今般於公事場吟味之上、本人吉藏与申者之由申顯候上は、仁右衞門同樣に成敗相願申渡候得共、其場を立退、追而公事場吟味之者に候へば、成敗奉願候儀も如何敷候に付、仁右衞門迄成敗奉願旨、直三書付添書を以重而被出之候。先以八幡境内致群集候はゞ、相扣可申儀心得も可有之處、其儀無之者不心得之至。其上右取捌手ぬるく相聞え候。依之願之筋は御聞屆難被成候。尤以後之儀急度相心得候樣可被申渡候。且又直三儀御貪着には不被及候得共、善太夫名跡相願候存寄に候はゞ、其儀は相扣候樣善太夫へ可被申渡候。將又右仁右衞門等兩人は不屆之致形に付、永牢被仰付候事。

疫病のことは本年四月の條參照

正月。金澤に於ける米價大に騰貴す。

〔政隣記〕

正月晦日、金澤も去年凶作に付、春來米價段々高貴、頃日者地米石に付九十目餘、遠所米准之。

〔舊　記〕

天明四年、前年不作に付、米穀春に至り段々高直に相成、米一石に付文丁銀百目、麥一石錢六貫文、稗一石四貫四百文相成、錢百目に付代十貫五十文位。如此諸物高直相成、飢饉無此上、山々餓死甚多く、且又去秋より當六月迄疫病大きにはやり、金澤笠舞非人御小屋・公事場罪人共多病死致し、其外在々所々疫病はやり、寺井組粟生村等男女五十人計致病死申候。

依之辟邪丸与申丸藥、御上表より諸郡在々ゟ被爲下候事。

翌四年本のまゝ

〔舊　記〕

天明四年正月より、小松町御奉行江守助左衞門樣御才覺を以、小賣米數ヶ所被仰付、同御郡方に而者、金平村・中村・寺井村此三ヶ所に而、小賣米一升に付九十三文宛に賣申候。右之趣御郡御奉行小寺武兵衞樣・成田十郎左衞門樣より被仰渡候事。

〔老翁雜記〕

一、天明三年七月已來雨天、氣色涼敷、五穀幷地に付申、品不出來、米高直、末々困窮。翌年春に至而米拂底一石八十目餘、閏正月上旬頃一升九十二文替、二月・三月頃より末九十八文替、翌四年三月御下行御召米に相成。直段小松八十五匁五分、本吉八十一匁五分、平均八十三匁五分替、五月三の一、七月三の一、殘銀九月二十二日相渡る。

閏正月三日。德川家治、前田治脩及び重敎に鶴を贈る。

〔政隣記〕

閏正月三日、於江戸上使御使番岡部大膳殿を以、御鷹之鶴御兩殿樣御拜領。

閏正月五日。前田重敎、治脩の婚禮を封國に於いて擧ぐるの許可を得んことを議す。

〔袖裏雜記〕

閏正月五日、主水・圖書中將樣御前へ被召、加賀守樣御婚禮今以不被整候。別御殿も不被仰付候半而は不被爲成御事に候。當時之御勝手之御樣子に而者、中々左樣之所へは迚至り申間敷候。さすればいつと申期も無之候間、各初可爲當惑被思召候。依之御心付被遊候者、於御國御婚禮与申儀は不被爲成公儀御格に候得共、只今も松平筑前守殿・喜連川左兵衞督殿には御在所に而婚姻に候得共、筑前守殿者各別之譯、喜連川殿には御府內同樣之場所に付難被引用に候。然共只今者公邊も以前与違ひ、被仰達により前不相成事も致出來候事ども丶有之候。御末家之事、其上御同國之事に候得者譯も違候間、田沼殿抔ゟ內々被仰込、俊姫樣御儀金澤へ御引移、御婚禮御整被成候樣御座候得ば、御一段に被思召候。各初了簡も有之間敷哉と御意に付、先以私共聊心付不申儀に御座候。被爲成候御儀にて御座候得者、恐悅之儀奉存候。此儀に付而者、安房守初別存は有御座間敷儀に奉存旨御請申上候處、左候はゞ御內々可被仰込候間、其趣相心得各へ可申遣旨御意に付、奉畏候旨申上候。右之趣加賀守樣奉達御內聽候上、今村五郎兵衞へ內密至極に申聞、とくと致工夫候上、夫々御內々申込候樣申渡候。將又於江戶表婚禮と申儀者、人質之代りにて御定法に候へ者、六ヶ敷可有之事に御座候。畢竟御末家其上御同國之事に付、先中將樣ゟ御引取置、追而御出府之上御婚禮御整被成候思召

御末家は大聖寺藩

之旨、無急度御屆被成候趣に相成候はゞ、結局物事大造に無之可宜事と、其趣も五郎兵衞へ申聞候處、右之通に候はゞ却而事輕く可相整哉とも奉存候。とくと思慮仕候上尙更可申聞旨申候由、閏正月五日之日附主水等より安房守等へ申越。

閏正月十一日。前田重教先に近習使番駒井平學に流刑を宣告せるも之を免除す。

〔袖裏雜記〕

駒井平學流刑御免等之儀、段々被仰出之趣有之に付、申渡左之通調正月廿日伺之處、伺之通被仰出候旨正月晦日返書。

中川八郎右衞門ゟ　　中將樣御近習御使番　駒井平學

平學儀不屆至極之趣有之流刑被仰付候旨被仰出、先達而申渡置候。然處實父佐々木孫兵衞儀、御近邊重き御役儀被仰付置候處、勤方神妙に被思召候。依之平學儀流刑御容免、御知行百五十石被下之、組外に被仰付候。此段可申渡旨從中將樣被仰進候條、可被申渡候事。

右之通結構に被仰出候間、自今急度相慎御奉公相勤候儀肝要之事候條、此段も可被申聞候事。

月　日

天明三年二月十七日の條參照

御横目に

中將樣御近習御使番駒井平學儀、不屆至極之趣有之、流刑被仰付候旨被仰出、先達而申渡置候。然處今日中川八郎右衞門於宅申渡候趣有之候。右申渡之節各内一人八郎右衞門宅へ被罷越、立會可被申候。猶更八郎右衞門可被申談候事。

月　日　　駒井平學

組外御番頭に

一、百五十石

右平學儀流刑御容免、右之通御知行被下、組外に被仰付候趣等、今日於中川八郎右衞門宅申渡條、各可有支配候。且又御禮之儀、新知被下候通候間、其心得候樣可被申渡候事。

甲辰　月　日

〔政隣記〕

閏正月十二日、左之通。但昨十一日被仰渡。

駒井平學

去春流刑与被仰付置候得共、其段御免、新知百五十石被下之、組外に被加之候段被仰出。

閏正月十九日。前田重敎歸國の暇を受く。

〔御年譜〕

一、中將樣に御國御暇之上使御奏者坂倉伊勢守殿、閏正月十九日御出。同二十二日右御禮御登城。

閏正月廿七日。大小將吉田彦兵衞江戸に於いて火災見分に出張し落馬負傷す。

〔政隣記〕

閏正月廿七日於江戸、曉天赤坂邊火事に付、御大小將吉田彦兵衞爲御使番代早出、火本見に罷越候處、和田倉御門之内御堀際に而致落馬、顕より頭に懸餘程强疼め、馬は御堀に落候に付、公儀御役人立合にて引揚之。土井大炊頭殿御家來殊之外彼是介抱、尤駕籠に而歸。疼所療養之處追日平癒。

閏正月廿七日。前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女俊姫を金澤に移さんことを請うて許さる。

美濃守は前田利物、御伯母は妹の誤、俊姫は當時利姫なるべし

〔三守御譜〕

天明四甲辰年閏正月廿七日、美濃守樣御伯母俊姫君御事御緣組之儀、明和八年御願被成候處、

今月は閏正月

其節御願之通被仰出。然所御國許重敎公御居所へ御引取置、追て江戸表にて御婚姻御整被成度段、廿五日御願書被指出候處、廿七日可爲御願之通旨、御付札を以被仰渡、翌廿八日爲御禮老中御廻勤被遊。

閏正月。物價高直なるを以て江戸詰の士を減員す。

〔政隣記〕

御上御勝手御難澁之上、去年以來米等江戸表及拂底、諸物高直至極に付、詰人御減少、組頭並御近習御用志村五郎左衞門、御鑓奉行御近習頭有澤才右衞門、御先手物頭羽田源太夫御國ゟ之御暇被下、表向御先手物頭芝山十郎左衞門詰滿御暇被下、代人不被仰渡。右人々今月十五日・六日に追々金澤歸着。右に付多田逸角御近習迄相勤、江守平馬一人に而御客方等勤候樣被仰渡有之。

閏正月。江戸より歸國する者の土産物を齎すを禁ず。

〔袖裏雜記〕

從前々江戸御供等に罷越候人々へ致餞別、又は罷歸候節土産物無用に可仕旨被仰出、夫々申渡有之候。右之通には候得ども、親類等至而身近き者、或は他門たり共至而懇意成而々ゟは、無味に打過候儀も致しかね候故、内分にて餞送等も仕、罷歸候節も右之首尾故無味成儀も相成かね候に付、相應に土産之品持參相贈候躰に相聞え候。然處自他一統勝手難澁之時節、其上去年以來米高直、當時者尙更高貴至極に相成、何も難澁千萬に候。然者中々土産物抔買求候所迄ゟは行屆不申事に候得共、金澤表發足之節、前段之通内分に而も相應に預餞送等候人々も可有之事に候得者、無味に及沙汰不申儀者如何敷と存候而、其心得致候面々有之間敷哉も難計候條、御歸國御供人者勿論之儀、常交代等にて罷歸候面々も、土産等致持參之儀堅無用いたし候樣可申渡旨被仰出候。如此被仰出候上、萬一にも至而内分抔と申立、買求等いたし相贈候人々有之候段相聞候はゞ、急度御糺可被成候。尤致受用候面々も同樣に候。此段嚴重に申渡、尤金澤表ゟも申遣、一統嚴重に申渡有之候樣可申遣旨も被仰出候付、其段年寄中へ申遣候事。

右之通今般は各別之被仰出に候。若々兼而土産物之心當にて、只今迄相求置候品々抔も有之間敷事に而も無之候。左樣之心當有之候共堅相贈候儀指止可申候。身近き親類・緣者たりとも、勿論右之沙汰に及申間敷候。尤自今以後右之趣に相心得、聊之費用等も無之樣可被相心得候。且又前々拙者共御供に而罷歸候節、敎千代樣奉初輕く土産之品致献上候得共、以後指止可申旨今般自御兩殿樣被仰出、則指止候事。

右之趣各被得其意、組・支配之人々ゟも嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配

へも不相洩樣可申聞旨可被申談候事。

閏　正　月

〔袖裏雜記〕

被仰出有之、左之通夫々觸出。

江戸表より御供等に而罷歸り候人々、土產物等堅指止可申旨被仰出之趣、別紙之通於江戸一統被仰渡候條、於此表も右之通嚴重に相心得、尤以後交代等に而罷歸候人々ゟ餞別として贈物者申に不及、盃事抔に事寄、親類・緣者たりとも相招候儀堅指止可申候。以後聊無違亂急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。則於江戸表被仰渡候寫相渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも不相洩樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

二　月　三　日　　前田大炊

閏正月。凶年に處する爲御郡所より煎粉の製法を示す。

〔筒井舊記〕

一、一升　こぬか　一、一升　下　粃　〃　但上煎粉

一、三升　ぬ　か　一、五合　こぬか　一、一合大豆　〃　但中煎粉

一、四升　ぬ　か　一、一合　大　豆　〃　但下煎粉

一、五升　ぬか　一、一升　こぬか　一、五合　ひえ　一、二合　大豆　〃　但同斷

此分右各粉にして二升出來可仕事。

辰　閏　正　月

去年凶作に付、御領國一統給物指支及飢可申躰に付、若々飢を凌可申便りとも可相成哉与心付に而、別紙御郡所より御渡に付、寫相廻申候。夫々御寫取、役人中へ御申聞御尤に御座候、以上。

二　月　四　日　　三　右　衞　門

閏正月。百姓等飢餓に瀕する者の互助を命ず。

〔司農典〕

諸郡より乞食躰之者、去暮以來非人小屋ゟ罷越候者多有之由に候。去作不熟米穀拂底故、餓死にも及申程之躰に付、右之通与相聞え候。右躰之者共有之候はゞ、村役人手前に而承糺、裁許十村ゟ相斷、其上に而其者之親類者不及申に、其外之者共も馳合候而、少々宛成共爲給續候樣可取計候。去冬已來御郡方より非人小屋へ入候者共、寒疫に而死候者多有之候由。左候得者不便之至、第一人命に懸り申儀大切至極之儀に候間、何分麥作出來迄幾重にも爲取續、

右之族にあひ不申樣取計專要に候事。

辰閏正月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月七日。金澤に於いて諸士に前田重敎が歸國を請ひて許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

二月七日、一昨日御用番大炊殿依御廻文、今朝頭分以上布上下着用登城、於柳之御間御年寄衆等御列座、大炊殿左之通御演述。依之爲恐悅、登城之人々御用番御宅ゟ參出。

中將樣御痛所爲御保養、御國許溫泉ゟ御入湯之儀御願被成候處、前月十九日上使御奏者番板倉伊勢守殿を以、御願之通被仰出。且又依御奉書、同廿二日御登城被成候處、於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、其上御馬御拜領被成、重疊難有御仕合思召候。此段何茂ゟ可申聞旨、從御兩殿樣被仰出候事。

二月七日

二月八日。前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女俊姫が金澤に移ることの許可を得たる報金澤に達す。

〔政隣記〕

二月八日、加賀守樣御緣女利姫樣（美濃守樣御姉、當時大聖寺に被成御座。）金澤表ゟ御引取、御婚禮御整、中將樣御對顏、追而御出府被成候樣被遊度旨、從中將樣御願之通被仰出。依之爲御禮御登城、御廻勤も被遊候由江戸より申來候事。

（利姫は俊姫の前名　美濃守御姉は妹の誤）

二月九日。前田重敎江戸羅漢寺筋に散策す。

〔政隣記〕

二月九日六半時御供揃に而、爲御行步中將樣羅漢寺筋ゟ被爲入、所々御廻見。御歸御途中に於而俄に被仰出、新吉原ゟ被爲入、大御門先に而御下乘、廓中御步行に而御巡見、九時頃御歸殿。

附、朝之內俄に被爲入候事故、廓內之者共中將樣与者不心付、御歸後初而奉承知候由云々。

〔釉裏雜記〕

自先年江戸に而名ある所々之氣色等參見候。昨日は聖堂、今日は五百羅漢・本庄邊・よし原までも致巡見候。あの邊むさく有之候得共、就中吉原甚賤くきたなき處にて、當家においては

侍は云に不迨、下々に至迄可參所とは不存候旨等。且又家中之者共かの所へ參、淫ごとの無樣彌以可被相心得之旨、二月十一日從中將樣以御親翰被仰出。

二月十四日。去年引免の爲不足したる家中の知行に對する償米を本年の新穀にて支給すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十五日、昨十四日御勝手方前田土佐守殿被仰渡候由、御算用場より左之廻狀出。

御家中知行當り候去作引免、能・越之分御藏米を以可被返下候處、引免幷御償米・當春夫銀米等莫大之御損毛に相成、御藏入米無數、右御引足米之御手當無之候。依之無是非當新穀を以可被返下筈に候。併當時譯付不申而は、先達而侍中賣出置候拂米切手通用留り、町・在用米之通用不足に付、御切手出來次第相渡、當新穀を以可渡譯切手に致附札相渡申筈に候。御米藏出之儀は、當十月以後受取に向候樣可被心得候。侍中手廻により、去收納未拂不申人々は、此度相渡候切手、當時賣出候儀勝手次第に候事。

二月十五日。江戸に於ける諸士の行狀に關して諭す。

〔政隣記〕

二月十五日左之趣御用番大炊殿當御留守詰頭ゟ被仰渡、夫々觸有之。

於江戸表一統麁服着用、其外無用之參會相止、萬端省略候樣近年段々被仰出候得共、自然与相ゆるみ候躰相聞ゑ候。當御留守中猶更嚴重御小屋暮聊費無之樣可相心得候。江戸表ゟ召連候家來給銀も御定之通に可仕候。江戸にて家來着類等、都而不相應成儀無之樣、且又主人當番等之節御小屋ゟ不集樣、前々之通可申渡候。尤內外廻足輕繁々相廻、右之族有之候者相咎、品により無會釋押込召捕筈に候。將又家來共江戸に而致入代、幾年も相詰罷在者有之由。勝手次第成儀、畢竟御縮方之ゆるみに相成候間、以來右之族候者、割場奉行より相糺候筈之事。

二月十七日。米價高直なるを以て諸士の食料に注意すべきことを諭す。

〔御觸留〕

去年御領國凶作至極に付、米直段過分に高直、其上新穀出來迄三州之用米指支候躰に付、尙更町・在一統ゟ別紙覺書寫之通申渡候。先達而も申渡候通、加樣之年柄は御家中之人々も心得も可有之事に付、猶又右覺書寫相渡し候。右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣に被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十七日

寫

去年御領國往古より無之凶作至極に而、御領國用米不足之圖り付、當秋新穀出來迄取續之儀、夫々遂僉議候處、元來出來高過分に致不足より、曁他國茂不作故米高直至極に候得者、他國より入米茂容易に不致出來候。右之趣に付、町家之者共一統粥を給候樣去年十一月申渡候。然處春に至猶更米高直、第一用米指支之躰に候間、油斷は無之事に候得共、猶更一統申合、成限粥・雜水抔を給取續可申候。右之通米直段高直至極に候得者、輕き者共之内雜水茂給兼候程のものゞも可致出來事候間、ヶ樣之年柄者人々勘辨いたし、平生のごとく相應に暮し候者茂、致難儀候もの同樣に食物勘略致し、其餘慶を米所持無之もの共ゟ品能相對を以貸渡候か、又者賣渡し可申候。尤飯米等餘慶致所持候ものは、勿論右之通り心得候而、何とぞ末々輕者に至迄、隨分相互申談致介抱、新穀出來迄取續候樣可致候。

一、御郡方之儀者、平生粥・雜水等給申儀は勿論之事に候得共、ヶ樣之年柄は尙更冥加之程を可恐事に候。年之廻りに而豐年・凶年有之事に候得者、自然我村凶年之わざはひに逢候時者、他村之合力を請取續べし。此度他をおろそかにしては、我難儀之時他村之合力疎略なるべし。大凶年に者三州一同之持合になくては取續難成儀故、此所能々相心得、十村・村役人等致世話、村中に而少々充茂給出し候分を、難儀之村ゟ品能相對を以貸付候歟、又者賣拂候樣相互に申談、艱難を凌取續候樣可心得候。

右之趣町・在一統嚴重可被相觸候。若難澁之者共ゟ合力救などいたし候もの有之候はゞ、町役人・十村等隨分無油斷遂吟味、其段後日に支配々々及斷候樣、是又可被申渡事。

甲辰二月

二月廿三日。金澤に於いて米價高直の際特に諸士の行裝を簡易にすべきを諭す。

〔政隣記〕

二月廿三日、當時米高直、一統詰人難澁至極に付、別而御使に罷出候人々者彼是指支申儀に候。依之米高直之内は、各たり共先供先者召連被申間敷候。笠籠も一つ被持、其外も准じ省略可有之候、御大小將之内小身之面々は、若黨・鑓・挾箱・草履取・笠籠迄爲持、近き所は天氣次第笠籠も止め、乘馬も遠方は格別、近き所は先は止候樣可被申談候。當時者寔に類も無之米等高直に付、各別之趣を以右之通達御内聽候上申談候。尤以來此貌押移儀に而者無之、寔に當分之儀に候旨等、去る正月於江戸主水殿より組頭ゟ被仰渡、夫々傳達等有之。於金澤も御用番大炊殿より、今日定番頭ゟ御覺書御渡、夫々傳達廻狀出。

各とは老臣といふ

是月は大盡なり

二月晦日。頭分以上の士に藩の財政窮乏の狀を告ぐ。

〔政隣記〕

二月晦日、組等有之頭分以上に被仰談儀有之由、前田御用番大炊殿依御紙面、各四時過登城之處、左之覺書御渡之。但一役御用番迄御呼出に而、夫より同役演達被仰談候事。

近年御勝手別而御難澁至極之處、去年御領國凶作に付、御郡方引免幷御貸米・御拂米、當春夫食銀等、彼是莫大之事に而、御收納米不納に相成、三州用米不足之處、如何共取捌方無之旨等御算用場奉行申聞候に付、用米之儀者別而品重き事故、種々遂詮議候事。

一、御兩殿樣御歸國御入用、暨御平生方御仕送り等之儀、種々僉議仕候處、去年凶作に付町・在共米銀不通用至極、就中去年御收納米を以御借銀引當米幷御拂米等、御算用場印之切手都而御借米に被仰渡候に付、調達方不辨至極に相成、迚先納近年之振に者出來難仕、暨當分調達銀者尙更相調不申。然者御歸國御入用を初、御平生方御仕送手段盡果候に付、於江戸表二萬兩計調達取組候樣仕度段、土佐守等に相達置候。假令右高相調候而も、御歸國御入用等指支可申儀に付、年寄中初御家中一統、分限相應に銀子上納有之樣にも仕度旨等、段々御算用場奉行了簡之趣申聞候。御家中より上納之儀、年寄中に者假令幾重に致し候而成共、知行高に應じ少々宛致上納間敷物に而も無之候得共、大抵高之相知申儀に而、行屆申事に而者無之候。御家中一統者、當時諸物も過分高直、彼是甚難澁之時節、其上去秋火災之面々段々願も有之候得共、甚之御難澁に付御救も無之候得共、人々是非もなく取續罷在事に候。左樣之處に、少分宛にても上納銀有之樣申渡候儀者難相成候間、何卒於江戸表に御才覺相調候樣いたし度候。萬一調達不致出來時者、乍迷惑千萬御發駕御延引可被遊より外は無之旨等、委曲先達而江戸表に申上候。

右之通に而、是迄御勝手御難澁与申儀者數年之事に候得共、當時俄に危御勝手向に相成、拙者共も甚致辛勞候事に候。ヶ樣御難澁之趣、表向之面々も承知無之候而者相濟不申儀、何歟心得も可有之事に付、此段申聞置候事。

二　月

右組・支配に之觸出者尤無之候也。

二月晦日。御馬廻組立川金丞、亡父の二十ヶ年前に於ける罪狀露顯したるを以て逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月晦日左之通被仰付。

逼　塞　　御馬廻組當時土橋御門番人　立川金丞

右亡父立川兵太夫改作奉行在勤之內、於大坂表私曲有之儀今般露顯に付、右之通せがれ金丞

御答被仰付。二十ヶ年餘以前之事与云々。右同趣に、御算用者九人も逼塞被仰付。

二月。諸士の儉約等に關する前令に違失すべからざることを告ぐ。

〔典制彙纂〕

御家中之人々儉約等之儀、前々より度々被仰出、就中近年茂嚴敷被仰出有之候所、自然与相忽み、衣類等も近く猥に相成候躰、暨組入・番入等之振舞、并無用之參會、且音信・贈答茂相止不申躰に相聞ゑ候。畢竟人々心得等閑故に候間、近年被仰出候通猶更無違失、嚴重可被相心得候。

右之趣被得其意、組・支配之面々ゑ茂——同役中可有傳達候事。

二　月

三月六日。能登奥郡破損舟裁許の職務を明年以降宇出津山奉行に兼ねしむべきことを定む。

〔釉裏雜記〕

能州奥郡破損舟裁許兩人、前々御當地より罷越候。右は御城米船難船有之節、爲取捌被遣置候得共、全取捌申に而は無之、難船有之候得ば右破損舟裁許罷出取捌、御當地へ申越候而、能州御郡奉行罷越候上引渡申樣子に候。且又右破損舟裁許は、二百十日立候得ば九月に至罷歸候。其跡に難船有之候得ば、宇出津山奉行等取捌候間、右山奉行等取捌、早速御郡奉行へ申越候得ば、つかへ申儀有之間敷候間、破損舟裁許は相止可然と二月廿五日伺之處、前々より破損舟裁許被遣候は樣子も無之哉、御算用場に舊記も無之哉と御尋。則相糺候處、何之儀も見當不申由故、其段申上候處、當分右山奉行より兼候趣可申渡旨、三月二日被仰出候得共、今年は先達而右御用兩人申渡、用意も仕候事故、やはり被遣、來年より當分山奉行より兼可然と重而伺之處、三月六日伺之通被仰出。

三月六日。前田重敎江戸を發して歸國の途に上る。

〔御年譜〕

一、中將樣三月六日江戸御發駕、同十五日御歸殿。但高田驛より御指急。

三月十三日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中水野出羽守殿を以、御國許ゑ之御暇被蒙仰、御例之通御拜領物。從西丸も上使□□殿を以御例之通御拜領物。且前日依御達に、同十五日御登城於御黒書院御暇之御禮被仰上、御懇之上意、御鷹・御馬御拜領、本多刑部　前田圖書御目見等被仰付。且當

缺字は鳥居丹波守なり

三月朔日は四月の誤

月十九日江戸御發駕、三月朔日金澤御歸城之筈之旨、追々江戸より申來候事。

三月十五日。前田治脩登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守治脩・大久保加賀守忠顯就封のいとまたまふ。

三月十五日。前田重敎金澤に着す。

〔政隣記〕

三月十五日夜九時頃中將樣金谷ゟ御歸殿。昨十四日夜滑川驛御泊より直々御歸着也。且江戸表ゟ爲御禮被指出候御使、人持組前田權佐御目見被仰付。二之御丸於御用番席紗綾二卷・御羽織拜領、披露御大小將。將又御着に付、此間迄に廻狀出候御横目暨諸頭等御待請に罷出、爲恐悦二之御丸ゟ翌十六日登城も、前々之通に付留略之。

附、去六日江戸御發駕之御飛脚同十三日到着、甲州路ゟ御廻り道も有之候へ共、御急に而當十七日御歸着之御圖り子申來候處、昨十四日從御旅中之御飛脚到着、十六日御歸与被仰出候段申來、重而同夜御飛脚到着、今十五日御着与被仰出候由申來、過急に相成、金谷御殿者不及申に、諸向大騷動也。佐々木孫兵衞早打に而御先ゟ歸候樣昨夜御仰出、昨夜九つ時滑川驛發出、今晝九時前金谷御殿ゟ到着。御宿拵幷宿割御大小將丹羽六郎左衞門・山口小左衞門今晝過歸着。

中將樣御旅行越後高田より直に越中堺迄被爲入、同所に而御供人御待合せ、夫より直に滑川ゟ被爲入、同驛今曉七時前御發駕、御途中に而御放鷹。右之通高田以來御急之御旅行に付、御供人疲れ下り候者夥敷有之。別而足輕共之内に者勞れ、御供仕得不申者多く有之、割場より今日俄に御迎今暮頃發足之事。

堺は越中新川郡境

一、高田迄被爲入候内、甲州路御廻り道等に而二日之御逗留有之。

四月五日は政隣記記載の日附

〔天明四歲日記帳之内舊記目錄〕

一、月十四日堺ゟ中將樣三御着之日圖之處、俄に越後高田より御急に而、十三日堺御着に相成、御側御人數漸七・八人迄にて御着、殘る御人數曉天近追々來る。夫より魚津御泊之所俄に滑川に成、滑川御着之上追付御供觸有之、夜通金澤迄被爲入候事。

三月十六日。前田重敎今日以後大に騎射を行ふ。

〔政隣記〕

四月五日。中將樣御歸翌日より、天氣宜候得者毎日或者朝夕、堂形御馬場ゟ御出御騎射被遊、御近邊等ゟも被仰付、加賀守樣にも毎日一度宛御出、御騎射被遊候樣被仰進。

但、御大小將之内古屋也一・野村傳兵衞・戸田五左衞門ゟ、御相乘幷騎射被仰付、毎日罷出

に付、二御丸御番御用引に而御馬場御用而已相勤。三人共最前御近習相勤候人々也。右之外無息之面々にも、右爲御用毎日罷出候人々有之、渡邊源藏嫡子與一郎・次男門之助等也。

〔政隣記〕

三月廿六日、御前樣附物頭並河村儀右衞門儀、昨廿五日從江戸歸着之處、今日騎射被仰付落馬手を甚痛、翌廿七日湯涌村入湯。金谷御近習御使番關屋一右衞門も、騎射にて落馬肩骨を强痛、同所に入湯。其外騎射に而落馬之人々一兩日數多有之。御馬共勞れ候故与云々。

三月十八日。横地理左衞門等酒宴に招かれ亂行したるを以て閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

被仰出之趣有之、先例的當不見當、後藤常右衞門等を引、此度理左衞門等三人之者共不埒至極、同組を引損候仕形に候へば、以後之御縮方にも候間、三人共閉門可被仰付哉との伺二月廿七日之處、伺之通三月十八日被仰出候也。

武田喜左衞門に　二百石　廿五歳　横地理左衞門

二百石　廿四歳　永原貞五郎

右三人之者共、去年十一月廿七日神尾源一郎宅へ仲間共相招候節罷越、源一郎と彼是及口論、其上料理等差出候得ば、家具等投打、亂行之躰尾籠之致方、不屆至極に付閉門被仰付。右三人之外永井兵一郎・林逸左衞門・杉本猪左衞門・原源太兵衞・不破宗助・中村喜平太も、同日源一郎方へ罷越、口論亂行に付、一往は宥候躰に候得共等閑にいたし、且爲給事女を差出候樣子不埒に付、遠慮可被仰付哉。源一郎も宿いたし、右之族に付是又遠慮之伺に候得共、元來此一件頭より言上有之に付、御尋有之、重而御請有之。且又前段三人之外は御咎無御座樣相願、且外之者は口論等隨分制候樣子に付、三人之外は御貪着無之、頭より申上候紙面にも、三人之外以來愼等之儀は急度可申渡旨等申上。亂行に而損候品々も書上、其品は障子・唐紙・疊・懸物・飾硯箱・吸物椀・赤繪猪口・染付猪口・指身皿・組盃・茶椀・酌手掛など、疊等は小刀等にて切さき候躰に見候由、喜左衞門より申上。此一件御横目等之言上もあり。前後事長し、爰に略記す。

酌手掛本のまゝ

三月十九日。前田治脩江戸を發して就封の途に上る。

〔三守御譜〕

三月十九日江戸御發駕、四月朔日金澤御着城。御供前田圖書。

三月廿九日。前田重敎金澤郊外大豆田に放鷹す。

〔政隣記〕

三月廿九日九半時御供揃に而、豆田口筋ゟ中將樣今度御歸後初而御放鷹、御先角者御大小將より被召連、其外御籠廻御近習、御餌柄鷂三・水鷄二。

但、此以後も御出每度也。相替儀無御座節は記略す。

三月。能登に於ける幕府領の百姓に夫食に當つる爲救助金を與ふ。

〔政隣記〕

三月、去年御領三州共八十ヶ年以來無之凶作与云々。諸國共大概同斷。公邊御不納も夥敷事与云々。

今月上旬以來、公領百姓夫食全御渡之處、正月・閏正月・二ヶ月分十三萬兩餘、二月・今月之二ヶ月分も右同斷。右金高に而も一人米三勺之割也。當秋新米出來迄は、右之通御救金被下候筈与云々。

四月朔日。前田治脩金澤に歸着す。

〔政隣記〕

四月朔日・昨夜高岡御泊之處、同晩六半時御發駕、今朔日四半時頃御歸城。御作法都而前々之通り。御歸國御禮御使人前田兵庫、御目見以後於御席紗綾二卷・御羽織一被下之、追付發足。且敎千代樣御式臺階上迄御出迎。

四月朔日。前田重敎近習の士をして騎射を行はしむ。

〔政隣記〕

四月二日

一、昨朔日御歸城後、無程從中將樣被仰進候に付、堂形御馬場ゟ御出騎射御覽、暮頃二御丸ゟ御歸殿。

但、御近習之面々騎射也等ゟ被仰付。三十騎。

四月九日。定番御徒藤江通太夫金谷御殿に於いて急死す。

〔政隣記〕

四月九日夜、金谷御殿於御次、御居間方定番御徒藤江通太夫變死之處、表向檢使無之、金谷御殿切に而相濟。宅ゟは煩出大切に候條、駕籠迎指越樣申來、則遣候處、相果居候由也。自害共雜說區々也。元來御居間方坊主候處、去年組替被仰付。宅は淺野川御藏附磨方組屋敷之內也。

四月十五日。前田重教堂形馬場に於いて五十騎の騎射を行はしむ。

〔政隣記〕

四月十五日夕方堂形於御馬場五十騎騎射被仰付、人持組中・組頭中見物被仰付。右相濟、於金谷御殿中將樣歌占御能被遊、右人々ゟ拜見被仰付。且御大小將菊池九右衞門持馬、先日以來度々御馬場ゟ出之、中將樣御鞍下に相成候に付、右馬持主爲罷出候樣被仰出。九右衞門ゟ右騎射・御能拜見被仰付。于時翌十六日中將樣、右馬應御意御乘込被遊候間、毎日朝夕御馬場ゟ出し候樣被仰出有之。

四月廿七日。能美郡小松に於いて磔刑を行ふ。

〔小松舊記〕

當月廿七日小松町端磔之御刑法者有之筈に候間、私支配所上下之内町端に而御刑法可被仰付場所有之候哉、内分遂詮議其樣子御達可申、尤右之趣御内分を以被仰越候旨、當十三日御紙面之趣承知仕、則夫々詮議仕候處、私支配之内兩町端に前々より御刑法被仰付候場所承及不申由。

微妙院樣小松御在世之時分、同所御馬廻宮部彌三右衞門下女、御郡奉行支配須天村・今江村間に而御刑法被仰付候由。其後元祿十年六月、私支配所小松八日市町蛭川屋久次与申者徒者に相極、於公事場斬罪被仰付候上、小松上口町端私支配所より六・七町末須天村・今江村間に而梟首被仰付候。有增役所留帳相見ゟ候得共、委細之儀者相知不申候。其節小松より下口に者爲懸不申樣、其御場より申來候躰に相聞申候。上口町端之儀者山王社有之、夫より二・三町末八幡社有之、五・六町之間双方御田地畠に而御座候。下口町端者御郡奉行支配に而、粟生通之道脇に双方田に而、湊通之道脇者天滿宮御社近邊に御座候。右之趣故須天村・今江村之間に而御刑法被仰付候。右兩村共御郡奉行支配地に而御座候。右之外近來小松町近邊に而御刑罰被仰付候儀承及不申旨、役人共申聞候。右爲御報如斯御座候、以上。

四月十五日　　江守助右衞門

前田數馬樣

江守助右衞門

來る廿七日於小松御刑法者一人有之、同廿六日發足申渡、同夜能美郡寺井村に致止宿筈に候之條、御自分支配所不指支樣可被申渡候。且又右御刑法之節、彼邊之者共見物に罷出候樣可被申渡候、以上。

辰四月廿一日　　前田數馬

江守助左衞門殿

四月廿八日。來月朔日以後前田齊廣の爲に建つる幟の觀覽を許すべきこ

自分は津田政隣

とを告ぐ。

〔政隣記〕

四月廿八日、來月朔日より五日迄七十間御門内に龜萬千殿御のぼり建候條、男子は十五歳以下、女子者大人共拜見勝手次第之旨等、御横目廻狀出。去年今日記同斷に付略。

〔政隣記〕

五月五日自分儀今日着到當番に而、七十間御門内通行に付、龜萬千殿御のぼり拜見す。兜十二刻。出し幟り、金紙折鶴・五葉橘・打出之小槌也。

四月。前田重教近侍の士をして打毬を試みしむ。

〔政隣記〕

四月廿八日。今月中旬以來中將樣御近邊等ゟ打毬被仰付。是馬場に毬門竹に而假に建。を建、三十間計此方に馬上二騎乘並び、右之方地上に紅与白と之毬を置、尤二毬之内一色宛分け置也。荒增如此。毬杖に而轉ばし、何れにも先ゟ毬門に入し者勝也。追合甚烈敷物也。本法十騎、夫より二騎迄段々有。尤毬數者人數に應ずる也。委曲は不能毫末。毬杖は丸打長き五尺の先に ——竹也 ⌒…苧縄也 附記、帶佩是當て字也。帶佩之字小笠原舘次郎殿・小笠原平兵衞殿兩家に而一子相傳也。依而致稽古候人々は、たいはい与假名にて書事也。

今月は四月

前記打毬中將樣被遊、幷御近習向ゟも被仰付、表向之人々ゟも追々拜見被仰付。

四月。是月以降領内に疫病大に流行す。

〔政隣記〕

今月中旬以來世上病人多し。多分疫・痢之二病也。金谷御表小將御番頭坂井要人、御大小將高山余所之助・河村彦七郎等追々病死。皆右病也。

〔加藤氏日記〕

當年諸郡疫病はやり申に付、別紙藥方御改作所より御渡に付寫仕指進申候。別紙藥方御書立之通相調、細末にして五粒程づゝ服し候得者、疫病うつり不申。尤疫病人介抱仕罷在候而もうつり不申旨に御座候間、夫々藥種相調、右丸藥いたし相用候樣被仰渡候間、夫々御申渡可被成候。尤にしきゞ与申藥種は、山にも在之木候間、則御見本御渡に付指進申候。此等山に有之候はゞこぎ取、地前に成共植置候得者、はやり病請申間敷ものゝよし被仰渡候間、左樣思召夫々御申渡可被遊候、以上。

辰五月十日　　番代　傳兵衞

何　間　宛　所

追而申上候。右丸藥御當地調合いたし有之處は、材木町柄崎屋与申藥種屋に調合仕候間、御

入用御座候はゞ此方ゟ御調に御越可被遊候、以上。

雲間李士材先生傳

雄黄一兩　丹參二兩　赤小豆二兩　鬼箭羽二兩一名衝矛、和名にしきゞ。

右細末にして、空腹に温湯にて五粒を呑。

醫宗讀避邪丸條云、服此雖與病人同床合被、亦不能傳染也。

五月五日。前田重敎百騎の乘馬を試みしむ。

〔政隣記〕

五月五日、俄之被仰出に而、堂形於御馬場百騎一度に乘馬被仰付。兩御近習頭幷兩御近邊且御大小將御馬役等ゟ被仰付。

但、自分ゟも罷出候樣申來候得共、着到當番に付不罷出候事。附、當日之服布上下に而乘馬被仰付候由也。

五月六日。前田重敎百二十騎をして乘馬せしむ。

〔政隣記〕

五月六日、今朝も昨日之通に而、服は馬乘袴に而、百二十騎一度に乘馬被仰付。今朝は二尺餘り之丸竹に自分々々之交名記したるを持、或は腰に指候而乘馬、乘迷候節或は追懸候而成

共、人之持所之竹を幾本に而も奪取候樣被仰出、烈敷迫合、落馬人も多有之。自分ゟも罷出候樣今曉申來候得共、今日も着到當番に付不罷出候事。但昨今共乘馬之人々足袋着用与被仰出、各着用之事。

五月十日。大聖寺侯前田利物金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月十日美濃守樣昨日御旅宿ゟ御着、今日四時過御登城御對顏、御饗應之上御退出。直に金谷御殿ゟ御出御對顏、御菓子等被進之。御作法都而御先例之通に付不記之。

但、御太刀馬代被進之、先達而御使者持參。

五月。前田齊敬腰痛を病む。

〔政隣記〕

五月十三日、此間敬千代樣御血虛之方に而、御腰痛强、御立難被遊御難儀に付、此間中御醫師晝夜相詰、且御家中陪醫師並町醫に至迄、世上に用候者不殘被爲召、診被仰付。

五月。前田重敎諸士と將棊を試む。

〔政隣記〕

一、中將樣此間者每日碁・象戲被遊、御近邊幷御身附之人々ゟ御相手被仰付、加賀守樣御見物被遊候由。御相手各奉負与云々。

一、無息之面々之內將棊覺候人々、金谷御殿ゟ被召出、御近邊之人々相手に而被仰付。

一、御大小將之內將棊覺候者御尋。自分儀も今月十九日罷出候樣申來候得共、將棊覺不申に付不罷出。

一、頭分ゟも將棊御尋、覺候人々十九日罷出。神尾伊兵衞・江守平馬中將樣御相手被仰付候處奉負。但兩人之內神尾は御馬廻頭、江守者御小將頭也。

一、御大小將之內恒川七兵衞廿一日罷出候處、中將樣御相手被仰付候處奉負。七兵衞外者覺不申、少々覺候者も痛等に而不罷出候事。

一、村波檢校・七尾勾當・笘都、此間將棊爲御用金谷御殿ゟ被召出、盲人相手に而指し候事也。晝比出、夜に入御暇出。

一、右之外諸向より、將棊爲御用罷出候人々數多有之。頭分・平士之內にも御相手に被仰付候人々も多し。

一、此間於金谷御殿、野尻次郎左衞門直法ゟ將棊之詠歌被仰付、則詠之。

所せくこがね白かねさす月のかつらの駒は中にいさめる

本文は能美郡小松附近の事情なり

五月。米價益騰貴して飢民を出す。

〔螢廼光〕

翌天明四甲辰正月より米次第に拂底、常の直段大抵一石に付四十目より四十五匁位。八十目・九十目・百目と騰躍し、五月・六月に至百二十目餘となり、右の直段にても米なし。只野山の草々の根を掘、木の芽を食とす。下敷の糠迄も喰盡せり。干菜一連三十五錢に買しと、しる邊の方の書狀于今所持せり。御上よりの米賣場有といへ共、兼て家毎の家數・人數を以、男三合・女二合の札渡りて、餘慶は望がたし。依て薪を負ながら道に倒れ、椀を持て道に死する者は毎日三人・五人なり。町・里・浦・山々も皆然なり。小松山王より八幡迄の往還玉緣に倒伏し、通る人を見てひだるしひだるしと泣。此所計にても毎日餓死する人多し。勘定村山にセキメンとて至て白く、碎けば葛根の如き潔白成る土あり。飢饉には食物と成と言傳へ侍れば、是を取り來、稗など少し宛交て食せしに、何れも糞つまりて皆死せり。若後世かゝる事ありとも必喰ふべからず。扨て九月より冬に至て疫癘はやり、死する者家毎なり。是皆同じ。わけて山方は夥し。予其頃鍋谷村といふを通りしに、屋根崩れ扉傾、葎に埋れし家軒を並て數を知らず。皆死絕たる家なり。死骸は葬るべき人なければ、皆谷へ捨たりとや。小松にても行たふれ死たる者は、三昧

本文は天明三年七月十日の條に載せたる咄隨筆の文に接續す

に大き成る穴を堀置、死骸どもを投込し也。後其跡に石塔立て、今に哀を殘す。かゝるうき目を見て、飢饉の貯はなすべき事なりといひし人々も皆死果て、今知る人稀なり。

〔咄隨筆〕

翌年に至りては、下民飢に臨む者多し。爰に金澤堅町に一箇のあきんどあり。名を五郎兵衛といふ。綿を賣りて渡世とし、正直なる者にして利を貪らず。心常に人を憫む。然る處下賤の者飢に及びて死に至るを見て、是を悲しみけれども、米穀の價尊うして施すべき術なし。是に於て雜穀の屑・粃・糟抔を求めて粥となし、飢ゑたる者の家へ持ち行き施す事毎日おこたらず。然れども飢人等多くして、周く施す事能はざるを憂ひ、近所の富家を賴みて下部を借り、糠・糟の類を買ひ來りて、日毎につとめて是を施す。おのれは寢食を忘れ、此事にのみ奔走す。是を見聞きて志を發したる者、米穀の類を施さんと思へば彼者方へ送るに、大に歡喜して卽時に粥となし是を施す。誠に奇特なる者なりとて稱美せざる者なし。去れば廉直の行を聞き、時の奉行なる人飢民を憐むこゝろざしを起し、米錢を施し賑はせけり。是において飢死の者一人もなし。是偏に彼の五郎兵衛が惠により及ぼすに似たり。

五月。領國内の驛馬を使用する者は家中侍の荷物といへども駄賃を徵することを告ぐ。

〔日記帳〕

近年御家中侍中等自分用事之荷物多相成、商荷物致減少に付、御領國驛馬借持共甚致難澁候旨、各より毎度被申聞候に付、以來侍中自分爲用事取寄候品々之分は、商荷物同樣に駄賃爲請取申度段、先達御用番へ相達候所御聞屆、一統御觸渡有之候間、被得其意、夫々可被申渡候。勿論右之趣候得ば、侍荷物しらべ問屋幷馬形共心得違仕、此上猥の賃錢貪候樣成も有之候はゞ、當場より御年寄衆へ相達候筋合不相立候條、隨分嚴重相心得、荷物付置候儀遲滯不仕、宿々麁末無之樣急度可被申渡候。則御用番へ相達候紙面寫相廻候條、可有披見候、以上。

五月　　御算用場

所々奉行名前

六月十一日。前田重敎騎射の用を勤めたる野村傳兵衞等に賞賜す。

〔政隣記〕

六月十一日、野村傳兵衞每度御騎射御用被仰付、御慰にも相成候。依之越後縮一反、幷御騎射的之圖・御日記も、佐々木孫兵衞を以拜領被仰付。且今度乘馬被仰付候人々も、昨今金谷御殿に被召出、御騎射御的之圖拜領被仰付。右御禮御兩殿樣に御近習頭を以申上、平侍之分は頭引受同斷。

六月廿七日。前田治脩及び重敎、歩士の水練を才川に觀る。

〔政隣記〕

六月廿七日、御歩中水練爲御覽、曉七半時御供揃に而、御鷹野御格に而、御兩殿樣才川貝殼淵ゟ被爲入水練御覽、四時御歸。

六月廿九日。石川郡粟ヶ崎藤右衞門に名字帶刀を許す。

〔袖裏雜記〕

粟ヶ崎村木屋藤右衞門御かゝ御用拔群御用立候。未年若故萬端親貞悅指引仕候。今般藤右衞門へ御扶持方御增被下、御例も無之樣子に候得共、格別に候間御紋付拜領、親貞悅へも何に而も御有合之品物拜領被仰付候樣仕度旨、委細御算用場奉行紙面指出候。成程過分に米銀御用に相立候。當時於居在所草高八十石被下候處、免御宜敷場所に而、此定納口米六十三石餘收納仕候。藤右衞門身上に而者、御加增米被下候よりは、格式宜敷被仰付候方難有可奉存儀に候。乍然御家人之振合に被仰付候儀者、相成申間敷哉と奉存候。且又御紋付之品も、十村格之者ゟ被下候与申儀は御例も無之、第一輕々敷此儀は難相成事と奉存候。依而僉議仕候處、藤右衞門當時御扶持人十村格に御座候處、少格式宜敷今津甚右衞門同格に被仰付候はゞ可然、甚右衞門儀は十村よりは餘程宜敷候。御城下に而も帶刀仕、出府之上御目見被仰付候節

天明五年十月五日の條參照

は、御間之内に而被仰付候。京都等町人抔之振合にも似寄候得共、大躰者十村之格式之宜敷者に候。藤右衞門へ之被仰渡には、父貞悅神妙之志に而御用方入情相勤候付、貞悅之爲御褒美如此被仰付候段被仰渡、貞悅へは御次より品にても被下候はゞ可然と何も僉議、六月十四日伺之處、帶刀者重き事、此前石丸彌一郎等改作奉行勤候節、十村共帶刀爲仕度旨申出、其後木梨助三郎等御郡奉行勤候節も、澤村源次へ帶刀爲仕度旨願候得共、御聞屆不被成候。微妙院樣御代に者、十村等ゟ御懇之趣も有之候得共、帶刀は不被仰付候。然ば藤右衞門前段之通被仰付候儀如何可有之哉之趣、六月廿六日段々御意有之。重而藤右衞門者各別之者に付、先達而伺之通被仰付候樣段々申上候處、左候はゞ其通相心得可申旨御意に付、廿九日に御算用場奉行へ申渡、貞悅へは於御次縮島三端被下之。

前文には廿九日とあり

〔政隣記〕

六月晦日、一昨廿八日粟ヶ崎村藤右衞門儀今津甚右衞門格に被仰付、帶刀御免、金澤町ゟ出候野間者鑓爲持候事も不苦由。名字粟崎与稱し、ヶ之字省与云々。同日町人中買等、數人ゟ永代御扶持、或は一代、又者此度現米被下切等被仰付。

〔國事雜抄〕

右加州石川郡粟ヶ崎村藤右衞門儀、今般今津甚右衞門格被仰付、當場支配被仰渡候。且又右藤右衞門手代、爲用事他國ゟ罷越候節、今津甚右衞門手代同樣に兩刀帶候間、右之趣爲承知如此に候、以上。

辰八月十一日　　御算用場

野村與三兵衞殿

六月廿九日。石川郡本吉の町人古酒屋四郎兵衞等三人の扶持を增賜す。

〔袖裏雜記〕

本吉町古酒屋四郎兵衞・明翫屋治兵衞・清水屋甚八郎過分之米銀御用立、藤右衞門と違甚之働者無之候得共、外に又類申者も無之に付、四郎兵衞・治兵衞へ八人扶持充御增米、都合二十人扶持充に被成下、甚八郎は手薄に候得共、兩人同事勤候間三人扶持御增米、都合十三人扶持被下候樣御算用場奉行紙面出。紙面之通被仰付可然と六月十四日伺、六月廿九日伺之通被仰出。

七月十三日。御勝手方主附前田土佐守・村井又兵衞等藩の財政を整理し得ざるを以て進退の指揮を求む。

〔政隣記〕

七月十三日御勝手方御主附前田土佐守殿・村井又兵衞殿、御勝手必至ゟ御指支、當盆前御拂方、是以後とても御運方手段無之、迷惑至極被奉存。仍之自分御指扣之儀被申上候處、翌十四日不及差扣段被仰出。同趣に付、御算用場奉行藤田兵部・神保舍人・小堀牛右衞門、自分指扣之儀御用番大隅守殿ゟ相達候所、則同十三日夕方大隅守殿於御宅、本多安房守殿御立合指扣被仰付。御勝手方御用小杉喜左衞門・矢部友右衞門・和田八太夫・遠藤次左衞門・田邊孫助儀も、指扣之儀頭々を以伺之候處、翌十四日不及指扣段被仰出。但小杉喜左衞門・田邊孫助は指扣被仰付、頭宅に而申渡之。兩人は頭取故也。

七月十四日。米價日に下落し諸士盆節季の仕拂を延期するもの多し。

〔政隣記〕

七月十四日

一、當作米御印紙三萬五千石一石四十三匁、津出御免也。御拂米有之。右故歟米價日々下落、頃日遠所米銀四十目平均に相成、其上望人無之。

一、御上必至ゟ御指支、諸向御拂方一圓無之。幷五百文計例年鳥目被下方も都而相止。尤兩御近習幷御廣式女中ゟ之例年被下方も、都而無之候事。

一、米段々下り、其上望人無之に付、當盆前拂方金府士中九分通者延置。自分も右之内也。

七月十七日。前田治脩婚姻の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

七月廿五日、加賀守樣御緣女利姬樣、九月中從大聖寺御引受可被遊旨、二月八日記之通に而、前月御治定被仰出候得共、御勝手向必至与御差支一件に付、來春二月迄御延引与今月十七日被仰出有之。

利姬は後姬の前名

七月。藩の財政困難なるを以て盆前諸拂を停止すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御勝手向累年御難澁之處、去年凶作に付、別而當春以來甚御指閊に相成、種々取計相辨來候旨、御算用場奉行等申聞候に付、御運方等之儀打返遂詮議候樣申渡置候處、御難澁至極之御勝手振故、何分手段無之、此節迄精誠遂詮議、尤他國調達之儀も取組置候處、相調不申、勿論地方調達も不相調、最早御辨方手段盡果申由。盆前取捌方必至与指支迷惑仕段、右奉行幷御勝手方役人申聞候。於拙者共にも當惑至極、如何共可及指圖樣無之候。依而心外之儀一統可爲難澁候得共、當盆前諸向御拂方等指延候樣、御算用場奉行ゟ申渡候。此節に至り如此に而者、末々難澁之程不便至極之事に者候得共、不得止事申渡候條、此段夫々可被申渡、尙更盆後に至り格別遂詮議候樣、御算用場奉行ゟ申渡置候事。

右之通御覺書を以被仰渡候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

七　月　　槻尾左膳

能州四郡十村中等

七月。江戸在住の與力池田彌十郎幕府の測量方助手を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月、江戸在住與力池田彌十郎儀（儒學詩文に達し、天文學も兼之、才藝之生質也。）公邊天文方御用吉田靱負ゟ、從公儀被仰付候測量方御用之手傳役被仰付、毎日天文臺役舘ゟ當上旬より出る由也。

八月朔日。石川郡粟ヶ崎村の粟崎藤右衞門登城して先に優遇を得たるを謝す。

〔政隣記〕

八月朔日跡目之御禮等被爲請、幷粟崎藤右衞門於檜垣之御間、今度今津甚右衞門格に被仰付候御禮も被仰付。依之扇子・鰹節一籠宛獻上之、隱居貞悅より串海鼠一箱獻上之事。

八月五日。前田重敎の近習小瀨卓广多流刑に處せらる。

天明三年五月三日の條参照

〔政隣記〕

八月五日夕方左之通被仰付。

金谷御近習組外

小瀬卓广多

引籠罷在候内不覺悟至極に付流刑与從中將樣被仰出。

右頭中島誠左衞門於宅、御大小將横目水野次郎太夫立會。

〔袖裏雜記〕

被仰出之趣有之、左之通可申渡哉之旨前々の振を以伺之處、追付可申渡旨被仰出。

佐藤半五右衞門・中島誠左衞門ゟ

小瀬卓广多

卓广多儀引籠罷在候内覺悟甚不宜、段々不屆至極之趣有之、依之越中五ヶ山之内ゟ流刑被仰付候旨、自中將樣被仰出候。此段可申渡旨被仰出候條可被申渡候事。

但配所へ被遣候迄之内は一類共ゟ御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共ゟ可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

甲辰八月五日

十三郎後文に重三郎に作る

右御日柄に付而之僉議等は何も不見。且被仰出之内、先達而段々不宜事は被仰渡、相改候樣に御沙汰專成といへども改不申。引籠上も覺悟一切是なく、重き御意共も空相成、人の申に可任爲躰、不屆至極之旨被仰出候也。

八月六日。田伏重三郎出合宿にて鰐部儀太夫の爲に刺殺せらる。

〔政隣記〕

八月六日、御馬廻組頭前田彌助組田伏長左衞門手前に、致厄介置候叔父田伏十三郎儀、不行狀至極之者に付、從先年頭ゟも相達押込置候處、近くは先非を悔得意之躰に付、一類示談之上昨五日より縮所を指出候處、今夜本多安房守殿家來篠井直記与申者、最前入魂之者に付同道、犀川川除町二口屋長兵衞方隱出合宿也ゟ罷越、九人橋番人福久屋吟助妹みよ与出會、同道之直記者越中屋庄右衞門与申者後家ゆり与出會有之候處、跡より御醫師林玄悅家來若黨長谷川平九郎与申者、安房守殿家來鰐部儀太夫与申者同道に而、右長兵衞方ゟ罷越及口論候上、十三郎儀太腹を庖丁に而被突破、長左衞門宅ゟ駕籠に乗歸死去。

右之趣隱密に可取計与之一類示談に而、十三郎儀一通病人之趣に而引取、外料二三人痛出來之趣を以療治を需候得共不致承引、彼是障取候内相果候に付、彌右一件押隱し葬可申手段之處、寺和尚も不致承引、無是非表發。附今月十八日御用番依被仰渡、翌十九日盗賊改方御用

松尾平九郎宅ゟ、二口屋長兵衛・同人妻つや・前記に有之後家ゆり・吟助妹みよ・長谷川平九郎召出、僉議之上、御書取立之上、夫々主人幷組合ゟ預置。但、具に及白狀、公事場ゟ引渡、尤皆皆禁牢。

一、九月十三日於公事場に、田伏長左衛門幷類門御馬廻組塚本次左衛門・中村猪右衛門・小幡清次郎以上三人は十三郎兄弟、長左衛門之伯父也。岡田沖右衛門沖右衛門も同斷也。御僉議之上、長左衛門等四人は一類ゟ御預、沖右衛門者去月六日頃は大病相煩、何等之儀も一圓不承由申に付、急度差扣被仰付候段申渡有之。

右十三日朝五時前より、一類同道公事場ゟ出候處、翌十四日暮六時過相濟退出。右御僉議者、五人別間に差置候而、一人宛之由也。田伏頭前田彌助・塚本頭小堀牛右衛門・中村頭奥村湍兵衛・小幡頭篠原勘左衛門・岡田頭武田喜左衛門、各相詰有之。

一、翌天明五年二月二十九日田伏十三郎一件落着爲聞屆、御用番之外御年寄衆不殘御出席有之。同年四月二十七日於公事場、左之通被仰付。

改易　二百五十石田伏長左衛門。百五十石中村猪右衛門。三百石塚本次左衛門。三百石小幡清次郎。

逼塞　岡田沖右衛門。沖右衛門せがれ岡田左門。父同事急度敬可罷在旨。

剪本のまゝ刀歟

一、田伏長左衛門頭前田彌助・相頭小堀牛右衛門ゟも、四月二十七日御用番横山大膳殿於御宅、長大隅守殿御立合、御大小將横目中村九兵衛・山崎彦右衛門指引に而、左之通被仰渡。

前田彌助

御手前組田伏長左衛門厄介仕置候伯父田伏重三郎儀、去年八月六日夜本多安房守家來鰐部平次右衛門せがれ儀太夫に被疵付相果候一件に付、一類共より相達候趣委細紙面被指出、相達御聽候處、最初一類共之内中村猪右衛門・小幡清次郎罷越、重三郎儀致口論少々蒙手疵候旨爲知候に付罷越候處、寶久寺河原二口屋長兵衛与申者方に而、右儀太夫与致口論、儀太夫相見得不申、長兵衛方に同家中篠井直記等罷在候に付、儀太夫尋出候樣に申達候。重三郎儀者、割場附者庄左衛門後家方に罷越居申候故、樣子見請候處、少々腰廻り疵所有之旨等申達候に付、小堀牛右衛門申談罷越見屆、其上に而致指圖旨申入、牛右衛門方ゟ罷越及示談、可致見分も与出懸り候處、猪右衛門罷越、先程段々申入候趣甚致相違候、重三郎爲躰疵之樣子致見分相糺候處、重三郎全致亂心、自身刺剪鞘走り、其上ゟ轉び申躰に而、手之内腰廻りゟも至而少々疵御座候。相手有之儀相糺候得共、一向無之旨等申聞候に付、段々相尋候得共、只今相達候處實正之旨相答候に付、重三郎縮方宜致し候樣に申達、其段同八日月番ゟ相達候段。先以最初者重三郎儀太夫与致口論候趣、無程手あやまち仕候段申聞候儀は、表裏之達に付精

誠相糺可申儀に候。且又重三郎同日致病死候段及案内候上、たとへ手あやまちたり共、蒙疵致死去候者は一通り之譯に者無之、第一最初屆之首尾も有之候事故訝敷可存儀、是非死骸不致見分候而者難計次第に候。其節致見分候者、自他之所爲者相分り可申處、其通りに致置候段未熟至極に候。將又右之樣子從御前御直に御尋之節、一類等最初罷越申聞候趣、幷重而申聞候次第具に御請可申上處、一通り手あやまち仕候趣迄御請申上候段、明白不成事に候。御譜代之侍中を御預置之儀に候へ者、ヶ樣之節入念心力を盡取捌可申儀、旁以甚未熟千萬に被思召候。依之役儀被指除、閉門被仰付候旨被仰出候。

小堀牛右衞門

前田彌助組田伏長左衞門厄介仕置候伯父田伏重三郎儀、去年八月六日夜被疵付候一件、彌助より御手前ゟ演述之樣子、委紙面之趣相達御聽候處、最初中村猪右衞門等彌助方ゟ罷越、重三郎儀及口論候樣子相屆。重而猪右衞門儀罷越、最初之趣与者相違仕候、重三郎亂心に而手あやまち仕、少々疵付、相手取儀無之与相斷候旨彌助申聞候に付、一類共左樣に申候者、其上を穿而可致見分譯にも有之間鋪旨彌助ゟ申達候段。先以一類共追而申聞候趣者、表裏之違に付得与相糺候樣に、彌助ゟ可申入筈に候。其上重三郎無程致死去候段案内候者、たとへ手あやまちたり共、蒙疵候者を致死去与候段一通り之譯に者無之、第一屆候首尾も有之事故訝敷可存儀、重三郎死骸不致見分候而者難計儀与、彌助ゟ存寄可申達處、其心付も無之段、相頭に者等閑成儀、不念之至に被思召候。依之指扣罷在候樣に可申渡旨被仰出候事。

一、本多安房守殿家來篠井直記、去年より於公事場禁牢之上無御構御免。但長谷川平九郎者牢死、鰐部儀太夫は出奔行衞不知候事。

一、田伏長左衞門等四人ゟ、改易之節被仰出之趣、大抵前田彌助ゟ被仰出之御書立之内に而相分り候趣に付略之。

岡田仲右衞門幷同人息左門ゟ被仰出之趣左之通。

岡田仲右衞門

右仲右衞門儀、去年八月六日夜田伏長左衞門致厄介置候田伏重三郎儀、本多安房守家來鰐部平次右衞門せがれ儀太夫与及口論被疵付候節、右長左衞門宅ゟ者罷越候得共、塚本次左衞門等口論之場所に而取捌下濟取計候趣者、且而不存旨申聞候。乍然右場所に而取喚之趣、次左衞門等ゟは得与承糺了簡も可有之處、其儀無之、甚等閑至極不埒之至に付逼塞被仰付。

右仲右衞門せがれ

岡田左門

右左門儀、去年八月六日夜田邊長左衞門致厄介置候田伏重三郎儀、本多安房守家來鰐部平次

右衞門せがれ儀太夫与及口論被疵付候節、右長右衞門等宅ゟ者罷越候得共、塚本次左衞門等口論之場所に而取捌下濟取計候趣者、曾而不存旨申聞候。乍然右場所に而取嘴之趣、次左衞門等ゟ得与承糺、仲右衞門ゟも申聞了簡も可有之處、其儀無之、甚等閑至極不埒之至に付、親仲右衞門同事急度相慎罷在候樣被仰出。

八月十三日。前田重教曲馬師の演藝を觀る。

〔政隣記〕

越中氷見之產、幼少に而父母に離れ、能州に知音之者有之に付罷越、其所に而成長、夫より上方ゟ登り曲馬致稽古候而諸國を廻り、年老候に付歸郷之由に而、今月中旬以來於廣岡山王社內曲馬乘之。依而見物人群集す。夫婦幷子共兩人都合四人共乘。夫四十歳計、妻三十五歳、子は兄十一歳、弟六歳也。曲馬之次第、駈之內夫者鑓、妻は薙刀に而、六歳之子を肩に載之仕合。其外駈之內、馬之腹潜り。立一驂・鶴鴿・骨なし形・大字調筆等、色々之曲乘候也。中將樣八月十三日被爲召於堂形御馬場、曲馬被仰付御覽、色々如前記乘之。且大字は風・雲・龍、尤一字宛書之。御厩之御馬にてても被仰付候處、畏り乘之、何之替事も無之由也。右之者實は尾張之產之由、御國法に付右之趣に申成与云々。

今月は七月

一驂本の儘騎歟

國法とは他國の者の藩內に留まるべからざるをいふ

八月廿二日。御小將頭等、御小將に會所銀返納の義務を完くすべきことを命ず。

〔政隣記〕

八月廿三日左之通紙面を以申談有之。

御小將中近年愼方宜、第一古き人々申談も行屆、暮方質素故、新御小將中成立等宜、尤成儀に候。然共近年打續世柄惡く、東・北共諸色高直、就中去年以來は別而甚高直至極に相成、其上町才覺も一圓不相調、勝手難澁之人々多、去々年以來江戸被相詰候人々等、彌增難澁之儀及承候。將又去年水難之御小將中、指當り難澁至極之樣子に付、其砌拙者共願之趣色々有之候得共、御上甚御指支之御時節故御聞屆も無之、其後引免被仰渡、御引足米切手も當春可被渡下等之處、六月に至御沙汰無之に付、是又相達候處、追付御渡可被成旨に而、今以御渡も無之、旁以當七月知行米之賣嘴も付兼候儀も有之躰及承候。御小將中之儀者、上納口も多き勤柄に而、別而無據難澁至極之人々も有之段者、各よりも御申聞致承知罷在候。尤人別之樣子者不相知候得共、自然七月中上納差支候人々も有之候而は、其品により御格も有之儀に付、七月中上納暫爲致延引、尤此段御聞屆有之上は、手廻相成人々は追々早速上納爲仕度段、拙者共僉議之趣段々御年寄衆ゟ再往相達候儀、各御承知之通に候。然處一圓御聞屆難被成段及數度被仰聞、是非當月中爲致上納可申段被仰渡候。此上者不及是非候間、何分被遂才覺、當

月中上納有之候樣可有御申談候。乍然當月中最早日間も無之儀に候間、容易に才覺可相調樣にも不存候條、才覺不相調人々は、來月に懸上納可有之候。尤來月に懸上納与申儀も、且而御年寄衆より被仰聞候儀に而は無之候得共、此所は御小將中手前指汲申談候間、猶更拙者共存寄も有之ば、當年之處打重り人々難澁之趣相察、色々遂僉議候得共、御時節柄故一圓者筋相立不申、心外之至に候。此所御小將中にも會得有之、夫々上納之心得有之樣に御申談可有之候。猶更口達にも申入候趣、得与御申含可有之候、以上。

辰　八　月

江守平馬
本保孫八郎
渡邊主馬
岡田太郎右衞門
多田逸角

御番頭衆中

八月廿七日。前田重敎鐵炮を放ち組頭をして之を觀しむ。

〔政隣記〕

八月二十七日組頭に、於豆田口中將樣御鐵炮被遊、拜見被仰付、脚半・股引等野間裝束に而可出旨被仰出。此後追々諸頭に拜見被仰付。

〔政隣記〕

九月朔日。御兩殿樣御騎射・御鐵炮、此頃頭分等に拜見被仰付候儀度々之事。

八月廿七日。儉約の爲に前田治脩行列の從士を減ずべきを命ず。

〔政隣記〕

八月廿七日今般御儉約に付、御寺御參詣等御行列之內、御大小將御先供四人、二人御減少內二人は新番より爲定加人出候筈。御先角は三人。都合五人之外被召連間鋪旨、今二十七日被仰出。御駕籠際者御表小將より勤候筈。且御供人從者草履取一人、嶋類等着用不苦、笠籠は御先角代より一つ、御左御先供二より一つ爲持、笠・合羽入候筈。御供揃幷歸候節之途中者、從者平日之通。將又御鷹野之節御行列も格別御減少に付、御供之節從者草履取一人迄可召連旨、夫々申談有之。

但、御先供合羽拔著は、一より兩人宛下り、尤二之御供所者二より埋め、二は明不申樣に仕候筈。

右者御大小將不足之處、御儉約に而不被仰付故如此。其外御供方諸向共御省略被仰出。併中將樣御供御行列等者、都而是迄之通相替儀無之事。

一、右御先供兩人、新番より爲定加人被召連候而者、新番組當り之御供所相止候に付、新番小頭御供に出候處御用無之故、段々願之筋有之に付、御先供は四人共御大小將より可被召連旨、九月十九日被仰出。但新番は一人御跡供仕候筈。

〔政隣記〕

九月四日、前月二十七日記に有之通、御供方御減少、從者小者一人宛に候得共、御番頭・御横目御怨籠際者三人之内御右之者之事只今迄之通り。

但、笠籠者右三人より一荷申談爲持候筈。都而紺染爲致着用に不及、嶋類等勝手次第之事。

八月。火消役の勤務に關する覺書を定む。

〔火消番勤方覺書〕

一、當番之節火事に而罷出候時分、其組合中に不殘以使可及案内候。鎭候歟、虚說に而罷歸候者、其段又可及案内候。助番之者有之節は、尤當番之組合可爲同事候事。

一、非番より罷出候刻は、非番之組合中不殘案内使、前後同斷之事。

但、非番之節近所火事に而罷出候はゞ、當番之者に茂可及案内事。

右二ヶ條近年指止候事。

一、一番組・二番組當番之時限、明六時之事。

但、番替時限前より出火に而、前日之當番人罷出防有之内六時鐘打、其日之當番人罷出候共、防懸申面々者其儘有之、無防所居申面々は替可申候。但其時之可爲首尾次第事。

一、火事沙汰有之候而も、煙も不見虚實難知候ば、早速見番遣、實火に候者可罷出候事。

一、火見番所より見に兼申手筋出火之段、同役中より案内召之候者、煙不見候共可罷出候事。

但、當時案内使は相止候而、實火之樣子承候ば、煙り不見候共可罷出候事。

一、出火之段承、火本に罷出候半途に而火鎭候由承屆候者、火本に不及罷越、道より可罷歸候。虚說勿論之事。

但、出馬以前實否承候ば尤不及罷出候事。

一、兩所一度に出火之節は、當番・非番無差別近所に可罷出候。乍然少に而茂前後候者、跡に出火之方に非番之者可罷越事。

一、何方に而茂當番・非番罷出防候内、又他所に火事出來候ば、其節之樣子次第同役申談、御横目にも相達、追而之火本にも可罷越候事。

一、火事場に而同役之家來、互に無遠慮可致指圖事。

一、御城下幷御寺近邊は、小火に而も非番茂罷出、其外は大概家五・六軒程燒候者、非番も可罷出候事。

但、近年非番も右之定より早罷出候故、御城程遠き町端等火事に而罷出候跡に、若又御城近出火候者、都而不心懸之筋にも可成候に付、自今以後以前之格に申談度儀と同役示談之上、御用番横山大和守殿・生駒監物相達候處、同役ゟも申談、可爲已前之通旨被申聞候に付、右之通相極候事。

一、御城下火事若及大火難防留候はゞ、同役申談人數引拂、御城近邊ゟ相集、其段御城代ゟ及案内、可請指圖候事。

一、御城近邊火事之刻、火之粉參候程之時は、兩御門前迄罷越、御城代歟又は御用番御横目中ゟ成共以使者申入、可受指圖候。若御郭之内番小屋に而も火之粉燃付候節は、右之通答を不待御門御番人ゟ致付屆、御郭之内ゟ罷越防可申事。

一、御郭之内下乘之内ゟは、火消道具之外長柄等之身有之物は遠慮仕候に付、竹柄之纏用ひ申候。馬上之儀は御城代等之可受指圖候事。

一、朔望・嘉節等御城に罷在候内、出火之段宅より致案内候節、表御式臺下番足輕迄家來之者可申達候得者、下番足輕より御横目ゟ相屆、火消中に通達有之筈之事。

但、右之節直に御城より當番之者罷出候刻、裏御式臺に而致裝束可申候。尤御横目ゟ非番内より、當番罷出候段相達可申候事。

一、當番之者は火事裝束入候挾箱、二の御丸腰懸迄通置候事。

一、請取人有之處出火之節、請取人より先ゟ出候者、無構防可申候。請取人罷出候はゞ、其時之首尾次第可申談候事。

一、御寺近邊火事に而罷出候刻、請取人未罷出御寺氣遣成節者、尤御寺之方第一に防可申事。

一、御寺危見ゟ候程之火事に者、山門之内何方に而も馬上不苦候事。

一、侍居屋敷幷下屋敷火事之節は、其家主ゟ防申段先達而可申達候。若内ゟ入間敷与及斷候者、相通可然旨門番人等ゟ達而爲申聞、樣子次第御横目ゟも可申談候。其上にも承引無之候得者、可爲其分候事。

一、居宅幷下屋敷花見え候程之火事に者、古來より御定之趣茂有之に付、同役申談、尤御横目ゟ茂相斷、宅之方ゟ罷越防可申事。

一、二月より四月迄助番相立可申候事。

但、其年之樣子により、騷敷年は年内よりに而も、同役申談助番相立可申候。雖爲四月兩天抔續靜成年は、是又仲間申談助番相止可申事。

一、當番五人之内煩等に而役引有之節、春中騷敷時分一人欠候而も不及助番、二人欠候者一人助番加、四人に而勤可申事。

一、十人之内一人欠、代不被仰付、四人・五人に而相勤候内、當番四人之組合一人番引有之候者、騷敷時節は助番を加、四人に而相勤可申候。五月頃は二人致役引候者一人加、三人に而勤可申事。

一、兩組三人・四人之時、二人之時は助番を請、三人宛勤候分には不及助番事。

一、金谷御殿請取有之者役引之節は、春中嚴重に相勤、助立時分之外は、當番四人相揃居申候得者、本役不及兼、金谷之助迄相勤可申候。右之通助番相勤居申内、又定役引人有之候者、助先之者より右助番相勤可申候。先達而一人役引之上、又金谷請取有之者致役引、欠人及二人候者、定役共に相兼助番勤可申事。

一、御寺助番相勤候内、御寺危程之火事に罷成、御位牌外ゟ奉除候儀は、寺社奉行茂罷出候。寺僧も此儀第一に相心得可申儀に候。然共寺社奉行も罷出不申、寺僧も手に合不申樣子に候者、見のがしには難仕趣に付、其所ゟ出合、其節之樣子次第御位牌之方ゟ茂主付可申事。

一、町續在郷出火之節、防可申候。町端より少間有之在郷に而も、風筋惡敷、町之方危候者、主人は町端に扣、人數迄遣打消可申事。

一、野田桃雲寺邊出火之節、金谷御殿請取所無之當番之面々罷越申候。其間者非番之者櫓開、當番同事に相勤候。就夫當番之方より前後共に、非番之方ゟ以使案内可申事。

一、宮腰火事に而火茂見ゟ申程に候者、當番之者金澤町端ゟ罷越、大火に茂罷成申躰に而、宮腰町奉行より火消役且御横目之内ゟ案内有之候者、金谷御殿請取所無之當番之人々罷越防可申候。其段御用番迄早速以使者可及案内候。其内は非番之者櫓開、當番同事相勤候。就夫當番之方より非番之方ゟ前後案内之事。

一、他國御使仕廻候而、十五日休息候流例候。發足以前致役引候儀は、其時節御用番ゟ申達、可爲指圖次第事。

但、先年は御歸國御禮之御使等者、御暇被進候左右承次第致役引候共、近年者他國御使前後共に、諸役懸役引休息等無之樣子に付、火消役も准之押立役引は不仕候。併同役申談、助番を立、五・六日も前後共に致役引候筈に相極置候事。

一、火事場より罷歸候節、御用番ゟ案内之儀、防口無之早速鎭、又者虛說に而候得者、尤不及案内候。大火之節人々消口も多有之、又は小火に而も何とぞ紛敷品に候者、紙面に記可及案内候。小火に而不紛時者、消口有之者より使者口上にて相濟申候事。

但、近年古來之趣と違候に付、是又今般大和守殿ゟ相達候處、可爲右之通旨に付相極候事。

一、御鷹野御往來御通之所ゟ參り懸り候節、下馬可仕候。相扣候儀者、其節之樣子次第相心得可申事。

但、古來此ヶ條無之候得共、今般序に大和守殿ゟ申達、右之通相極候事。

右勤方帳面、元祿年中已來之覺書之趣を以、同役示談之上、享保十七年帳面相仕立、元文元年五月同役成瀨先々内藏助等より御用番對馬守殿ゟ相達候處、已來帳面之通相心得可然段被申聞候に付、右之通相勤來候、已上。

天明四年八月

今枝刑部判
津田玄蕃判
成瀨内藏助判
寺西九左衞門判
前田内藏助判
竹田五郎左衞門判
不破彦三判
西尾隼人判
菊池大學判

九月六日。御小將頭江守平馬等役儀を除き遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月六日、御用番主水殿於御宅、横山大膳殿御立合、御大小將横目服部牧多・水野次郎太夫指引に而、左之通被仰渡。

江守平馬
岡田太郎右衞門
本保孫八郎
多田逸角
渡邊主馬

生駒右膳判

各組・支配之人々借用之會所銀上納、何も勝手致難澁候付、上納月延願之儀追々被指出候紙面之趣等、且前月中不致上納面々之名書入御覽候處、委曲相達御聽、年寄中より段々事を譯申聞、於御次も御内々被解利害被爲仰聞候上は、何分共取計先爲致上納、其上之處は願方何茂之身に引受、幾重共願樣可有之儀に候處、不致承引段不心得之至に候。今般者一統組之爲与存可罷在候得共、結局組々之御格を爲破候儀は、頭第一之越度に候。且組切之儀に而も無

之、一統之御縮方に指障候段不輕次第。右之族組頭之心得には一向有之間鋪儀に被思召候。依之役儀被指除、遠慮被仰付候。此段可申渡旨被仰出候。

右之通に付、御大小將御番頭當番之外不殘、主水殿御宅ゟ御呼立、主水殿・大膳殿御列座、左之御覺書之通被仰渡。依之御用方夫々引請候儀、連名紙面を以言上有之。

付札、齋藤與兵衞・青地七左衞門・溝口七太夫・天野傳太夫・奥村十郎左衞門ゟ

御小將頭江守平馬・岡田太郎右衞門・本保孫八郎・多田逸角・渡邊主馬儀、今日役儀被指除、遠慮被仰付候。依之代り人被仰付候迄、御小將組之人々各致支配候樣可申渡旨被仰出候。

各儀は當分御用番之年寄中致支配候事。

九月六日

付札、御大小將御番頭ゟ

御大小將組之内借用之會所銀前月中上納無之人々、早速致上納候樣、夫々急度可被申談候事。

九月六日

右之趣御番頭中より、御横目中を初廻狀觸有之。

九月十一日。御小將等先に役儀を解かれたる組頭の寃を訴へ、自分指扣を行ふべきことを稟申す。

〔政隣記〕

九月十一日、去八日・九日同組之人々寄合、今朝同組御番頭天野傳太夫殿宅ゟ、同組申談罷越、去六日頭中五人共役儀被指除、遠慮被仰付候趣、前月中會所銀上納之儀、頭中より組々被指留有之樣に被聞食候、而之御咎に相聞ゟ候。曾而指留に而延引仕候而は毛頭無之、頭中より段々被願候得共、御聞屆無之候間、今月中可致上納之旨、前月廿四日申談有之候處、元來勝手難澁、日間も無之に付、調達方手間取候内、今月へ移り候。御格破り候段は寔に私共之不屆に候間、何卒私共ゟ御格之通被仰付被下候樣奉願候。尤御下知迄は、自分に指扣可罷在哉。此儀は御差圖次第可相心得旨、頭奥村彌左衞門殿宛所に而、同組連名之紙面持參。猶口達に而も存寄之趣申達候處、取次可被申旨に付、指置各罷歸、右紙面出候上は、御用之外他出指止、質素に相暮、自分指扣同樣之心得に而罷在候事。

附、自分指扣に而は六組一統之譯に付、下より御用支に仕候事、御上を不奉願恐多儀に付、右之通委曲は不能書解粗記之。六組共大底一般連名紙面、文段は少宛之有差等。

右指出候紙面之趣、同十六日譯立、翌十七日より外出等都而平常之心得也。委曲之趣態与不記之。

一、御番頭中よりも、去六日御小將頭中御咎被仰付候趣、私共よりも段々申達候趣有之に付、同樣御咎不被仰付而は却而迷惑奉存候。先自分に指扣可申旨、御用番主水殿に相達候處、段々御指留之趣有之。翌七日組頭兩人被仰付候に付、紙面被出候得共不被受取に付、御用部屋志村五郎左衞門迄紙面達有之候處、則被入御内覽候得ば、主水等申聞候通可相心得候樣に与御噂に候。且又御小將中此節慎等之儀も何となく達御聞有之、是又右同趣之御噂之段、五郎左衞門申聞候由、天野傳太夫殿申聞有之候事。

本年正月十六日の條參照

九月十三日。江戸下谷茅町火災の際に於ける喧嘩事件落着す。

〔政隣記〕

一、九月十三日八時永原・馬淵等町御奉行所に可指出旨、山村信濃守殿より申來候段聞番申聞候旨可申渡旨、本多刑部殿御小將頭井上勘介等に夫々御申渡有之。則聞番高田新左衞門指添に而罷出候處、永原・馬淵幷指添人高田、相手與力中山源右衞門幷指添人都合五人は縁之上着座、足輕小頭小杉孫左衞門等四人、足輕林喜太夫、幷入牢中致牢死候四人之足輕代り承り足輕一人、水籠持小者傳六相果候に付代り承り人小者一人、中山源右衞門下人一人は白洲に着座候而、七半頃信濃守殿御出座、左之通落着之趣被仰渡。

永山吉平

右四人刑追放に候得共致牢死候。其旨可相心得旨候。

由良圓平
小山吉左衞門
山本彌一兵衞

右者源右衞門に懸合申者、其段不相達段不埒候。依之主人に引渡遣候。主人方に而相應之咎可申付候。

林喜太夫

右一件其節聊見聞不仕段申といへ共、兼而主人よりがさつ等に無之樣嚴重に申渡置、其段足輕小頭共に時々申渡置候處、ヶ樣之儀出來仕候上は、平生申付方不行屆故与相聞に、不埒に候。依之主人に引渡遣候。主人方に而相應之咎可申付候。

永原清太夫
馬淵友之進

小杉孫左衞門
鷲田市左衞門
吉岡作兵衞

右者平生申付方不行屆故、ヶ樣之儀致出來、不埒之至りに付叱り置。

宮川鳥左衞門　水籠持　傳六

右者不埒之趣無之に付、無構可被召仕候。

高田新左衞門

右夫々申渡候趣、罷越主人に可申聞候。

中山源右衞門

右一件夫々落着被仰渡候間、其旨可相心得候。

源右衞門下人　長八

右者不埒之趣無之に付、無構可召仕候。

源右衞門　同　道人

右之趣頭に可相達候。

右同夜五時頃、永原清太夫等御屋敷へ罷歸候處、只今迄之通り愼罷在候樣本多刑部殿御申渡之旨、頭井上勘助申渡之。翌十四日左之通刑部殿御申渡、則勘助申渡之。

永原清太夫

右兩人、當春茅町火事一件に付聞番に被指預置候處、昨日山村信濃守殿落着之趣被仰渡候。依之用意出來次第發足、御國に罷歸候樣可被申渡候。猶更於御國被仰渡可有之候間、先只今迄之心得に而致旅行候樣可心得旨も可被申渡候事。

馬淵友之進

九月十四日

一、右落着被仰渡之內相應之咎とは如何程之儀に候哉与、聞番村田甚右衞門より御用番御老中に迄伺候處、公儀に而者被仰渡之品に而候。此上はいか樣にも不被仰付候共相濟可申程之事に候旨、被仰聞候事。

一、右に付翌十五日永原清太夫等江戸發足、廿八日金澤歸着之處、御貪着之趣無之候條、歸着之上無構出勤可申渡旨、奥村主水殿被仰渡候旨頭奥村彌左衞門申渡有之。十月六日より兩人共取次に御番入申談有之。

九月十七日。吉田宇右衞門江戸に於いて不都合の行爲ありたるを以て知行を召放さる。

〔政隣記〕

九月十七日、左之通被仰付候段御用番主水殿被仰渡。

附札、奥村彌左衞門ゟ

吉田宇右衞門

右宇右衞門儀於江戸表、去年十月九日朝和角甚左衞門家來小者一人、内山養福家來若黨一人・小者一人致借用、御門外ゟ罷出、下谷池の端中町弓師方ゟ罷越、右家來共罷歸候樣申付、宇右衞門儀其日御屋敷ゟ不罷歸候に付、一類吉田九兵衞等家來共御門外ゟ指出爲相尋、同十一日朝永原清太夫等召連御屋敷ゟ罷歸候。依之江守平馬等より段々樣子相尋候へば、從中將樣御弓村被仰付置候處等閑に致置、右九兵衞より樣子相尋候に付申分無御座候故、御門外ゟ罷出候旨申聞候。家柄之儀に候得者、右村之儀無油斷九兵衞ゟも可及示談候處、其儀無之、段々九兵衞相尋候に付右之爲躰、不屆至極無十方仕形に付、御知行被召放、一類ゟ御預被成候旨被仰出候條、可被申渡候事。

甲辰九月

右同日晩吉田宇右衞門宅ゟ、御小將頭津田林左衞門・奥村彌左衞門、御番頭青地七左衞門、御横目服部牧多・木村三藏罷越、類中揃之上縮之間ゟ各罷通り、被仰出之趣彌左衞門申渡、御請紙面判形見屆、類中よりも御請取立、畢而各退出。

一、右宇右衞門御一行物上不申、一類之内ゟ預り置、且又家屋敷共御格之通爲差上、家財之儀者御貪着有之間敷哉之段、同二十日御用番ゟ彌左衞門より相達置候處、可爲其通旨同廿六日主水殿被仰聞候に付、一類之内石黒宇兵衞ゟ其旨申談有之。將又宇右衞門收納帳知行假所附、右宇兵衞就指出候、彌右衞門加奥書御算用場ゟ指出候處、當十七日迄に收納相收候地米・遠所米共書出候樣申來。則宇兵衞より取立指出之。

九月廿一日。前田重教狂言師八田屋萬藏に賞賜す。

〔政隣記〕

九月廿一日八田屋萬藏ゟ、白銀二十枚從中將樣拜領被仰付、結構之被仰出有之。是此間狸の腹鼓といふ狂言を相勤候處、應御氣候故与云。

九月廿八日。幕府の命により加賀藩の江戸火消にその擧動を慎ましむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

一、當月十四日御用番久世大和守殿役人より聞番呼に來り、村田甚右衞門罷越候處、於此表出火之節、足輕共之内がさつ成者共も有之候。以來がさつ成儀無之樣可被相心得旨被仰渡候由に而、別紙右之寫之通甚右衞門より及言上候に付、御使書等被渡候。其表ゟ申遣、火消方

并割場奉行ゟ可申渡旨就被仰出候。則寫進之候條、夫々御申渡可被成候、以上。

九月廿八日　　奥村主水

本多刑部様

出火之節毎度火消人數早速駈付、消防之働致出情候趣兼々相聞候處、先達而下谷茅町出火之節、足輕共之内がさつ成者共有之候。已來がさつ成儀無之様可相心得旨尚更被申渡、尤防方等之儀者、是迄之通彌出情無怠様可被申渡候事。

火消方之儀に付久世大和守殿被仰渡之趣、夫々可申渡旨被仰出候間、紙面等之寫相達之候間可被得其意候、以上。

十月十日　　井上勘助判

御上屋鋪火消五人・御中屋敷火消二人殿

紙面寫前記同斷

別紙之通御老中久世大和守殿聞番被召呼被仰渡候條、已來於火事場がさつ成儀猶以無之様無油斷加下知、消防之儀者隨分出情可仕候。右之趣本多刑部より可申渡候得共、尚更可申遣旨被仰出候條、可被得其意候、以上。

九月廿九日　　志村五郎左衞門判

御上屋鋪・御中屋敷火消六人宛所殿

九月廿八日。前田重敎、若年寄女中の嗣子高畠清太夫に新知を給す。

〔袖裏雜記〕

左之覺書帶刀持參、則九月廿八日申渡。清太夫は御馬廻高畠四平弟也。

若年寄女中中野養子　　高畠清太夫

一、新知百石

右中野儀、護國院様御代以來、御代々様御用久々全相勤、當時及老年候得共氣丈相勤候。依之若年寄女中せがれ被召出候御例は無之候得ども、格別之者に付せがれ如斯新知被下之、本組與力可被仰付様、中將様御噂も有之候條、可被申渡旨被仰出候。

右之通被仰出條、御申渡可被成候事。

九月廿八日

十月十二日。幕府前田治脩が明年の參覲を缺かんとする請を許す。

〔袖裏雜記〕

左之御書付、十月十一日田沼主殿頭御先手倉橋三左衞門殿を以御指出之處、翌十二日以御付札御願之通被仰出、其段志村五郎左衞門を以被仰出。

候へば本のまゝ

博取は果取

但、右御書付被指出筈之趣、十月十五日御親翰を以被仰出も有之。爰に略す。

私領分加賀・能登・越中三ヶ國共、近年氣候惡敷累年損毛、其時々御屆申上、追々勝手向指支に罷成候處、去卯年は八十萬石餘之損毛に而、連年相痛候上之儀故、勝手向彌必至与指支に罷成候處、勝手向之儀は先指置、百姓共ゟ夫々手當仕相凌がせ候へば、一躰打續損毛之上、去卯年之儀は古來より無之莫大之損毛故、百姓共に不限、士農工商共に及難澁候付、是以打捨難置、夫々救方手當仕候得共、困窮之上之儀に候間、人氣惡敷罷成、諸人掟共を取失、所々騷動仕候儀共有之候得ば、漸取鎮置候。兎角此上之處無覺束奉存候間、長く救方之所專勘辨を加へ、幷一統困窮に付掟共取失候故、是又元へ立戻候仕法而已思慮仕罷在候得共、私儀當在國中には救方幷仕法共元へ立戻、人氣も立直り候樣には出來難仕、いか計心痛仕候。殊更越中・能登兩國之儀は居城より隔り居候故、一入掟も取亂し候付、追々仕置も申付候得共、是又私在國之內跡々作法立戻候樣には難仕奉存候。右之政事共半にいたし置、私參府仕候而は、跡之儀家老共より逸々申聞候にも、遠路之儀博取兼、其內又々萬民氣請惡敷事ども出來、騷動之基罷成、重疊甚難澁至極に奉存候。依之近頃奉恐入候儀に者御座候得共、來巳年參勤之所御憐愍を以御用捨被遊、來々午年春參勤仕候樣被仰出候儀は相成申間敷哉。外之儀与違、前件之趣難默止奉願候。御規定も有之候處、加樣願何共遂惑至極奉恐入候得共、此度之儀中々難言語述事共、難澁至極誠無是非奉願候、以上。

出雲守は富山侯前田利久

美濃守は大聖寺侯前田利道

十　月　　御　名

御付札

願之通、來巳年參勤御用捨被仰出候間、來々午年春中可有參府候。將又別紙に被申聞候通、松平出雲守儀は來巳年御暇被下間敷候間、可被得其意候。

別紙願之通被仰出候付、同姓出雲守儀來巳年御暇年には御座候得共、直詰越被仰出、只今迄之通相應成御役等をも被仰付被下候樣仕度奉存候。尤同姓美濃守儀は、當時在邑は付、定式之通參勤之時節相寬候積相心得罷在候。

十　月　　御　名

十月。前田重敎近習の士をして和歌を詠ぜしむ。

〔政隣記〕

十月十七日、此間於金谷御殿、菊決榮与いふ題にて詰合一統ゟ從中將樣詠歌仕候樣被仰出候處、歌道一圓不心得之人々も多有之及遲々候內、追々御番交代之人々出候而多人に成、一入及遲々、漸三十一文字につらね上之候由。且右之外大音帶刀殿・伊藤內膳殿ゟ詠歌被仰付、兼而風雅之由被及聞召候旨被仰出有之。右兩人和歌者詠被申候事無之、連歌者少々被致候由。

右詠歌數首、皆々三十一文字をつらねし迄にて、和歌にも非ず狂歌にもあらぬ寔に蜂腰故不記之。

十一月朔日。頭分の士を召して前田治脩が參覲の期を明後年に延期せんとの請を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

八月十五日、聞番今村五郎兵衞御用有之候條、同役村田甚右衞門江戸表ゟ罷越、五郎兵衞与致交代候樣前月十三日被仰渡、同二十日甚右衞門發、出府交代有之。今月四日五郎兵衞江戸發、今十五日歸著之處、御内御用被仰出、九月八日金澤發出江戸ゟ罷越、十月二十八日右御内御用相濟金澤歸著。右御内御用之趣者、御國去卯年水損等に而御損毛八十萬石餘有之、元來御勝手御難澁之上彌增之御差支、且又士農工商とも及困窮、別而百姓共不穩躰、彼是無御據趣有之候間、來年御參府御用捨、午年御參勤被遊度段、五郎兵衞を以先御内々被仰込之上、表立御書附被指出候處、御願之通御聞屆、午の年御參府可被成候。且又出雲守樣ゟは來年御暇被下間鋪候。尤美濃守樣も御順年之通來年御參勤被成候樣、御付札を以被仰渡。十月二十二日右御付札物金澤到着、十一月朔日御用番本多安房守殿前々日依御奉書、頭分以上登城之處、於柳之御間御年寄衆御列座、御用番横山大膳殿右之通御演述。依之爲恐悦、登城之人々御用番横山大膳殿御宅ゟ相勤候事。

累年御勝手御難澁之上、去年御領國不作莫大之御損毛に而彌增御指支等に付、來春御參府御用捨、來々午春中御參府被成度旨御願被成候處、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候。

但右御願之通被仰出候御禮使、御馬廻頭中村左兵衞ゟ十月二十三日被仰渡、同二十九日金澤發足。

十一月十日。大小將横目木村三藏、木村重成所持の兜を前田治脩に獻る。

〔政隣記〕

十一月十日御大小將横目木村三藏、家に持傳候木村長門守重成所持之兜之儀、達御内聽候に付入御覽候樣被仰出、則入御覽候處、御留置被遊候段被仰出、今日御紋付御上下二具・白銀三十枚拜領被仰付。

十一月十五日。前田齊廣髮置の儀を行ふ。

〔金龍公御年表〕

天明四年十一月十五日御髮置。

十二月朔日。前田治脩と婚約したる俊姫が金澤に移徙の期定りたること

を告ぐ。

〔政隣記〕

十二月朔日、一昨日御用番大膳殿依御廻文、今朝頭分以上登城之處、於柳之御間御年寄衆等御列座、御用番大炊殿左之通御演述。依之登城之面々、御用番御宅ゟ爲御祝詞參上。

俊姫樣御儀、來年二月十五日此表ゟ御引移、追而江戸表ゟ御出府之上御婚禮御整之筈に候。此段何茂ゟ可申聞旨仰出候事。

附記、俊姫樣之俊之字、利之字に候處、先頃俊に御改之由也。且二月十三日大聖寺御發輿之筈也。

十二月十六日。安永九年以降五ヶ年の儉約は本年を以て終るといへども更に五ヶ年を延ぶべきことを命ず。

〔政隣記〕

十二月十六日、寺社奉行より以下頭分以上、一役一人宛御呼出、於御席左之通被仰出候段、御用番大炊殿御演述。

御勝手御難澁至極に付、安永九年より五ヶ年之内萬端嚴敷御儉約被仰付候段被仰出、當年に而右年限濟候得共、去年御領國中莫大之御損毛に而、彌增御難澁至極に被及候段、各見聞之通に付、重而來年より五ヶ年之間、猶更嚴敷御儉約被仰付候條、何茂致會得何分出情有之、御儉約之儀存付候品々、猶更無泥年寄中迄相達可申候。此段改而一統申聞候樣、拙者共迄被仰出候事。

辰十二月

十二月廿三日。前田齊敬の病癒えたるを以て醫師等に酒食を賜ふ。

〔政隣記〕

十二月廿三日、御内々於二之御丸敎千代樣御本服御祝就被仰付候、今度御滯之節伺等被仰付候御醫師中、并陪臣醫師・町醫師被爲召、御吸物・御酒被下之、御目錄金百疋宛拜領被仰付。

天明五年

正月朔日。前田重敎乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日、中將樣御乘馬初今日有之。御馬奉行ゟ御上下拜領。

二日、夜御謠初御規式、六時過初り、五時過相濟。

四日、御打初・御射初、九時前迄に夫々相濟。

正月四日。前田重敎寶圓寺の隱居にその騎射を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

正月四日寶圓寺隱居、中將樣御騎射拜見被致度段被相願候處、御聞屆に而於堂形御馬場今日拜見被仰付。

二月十一日。前田齊敬、大小將中村九兵衞等に命じて繪を描かしむ。

〔政隣記〕

二月十一日、敎千代樣去年以來折々爲御遊慰、二ノ御丸御式臺等に御出、詰人姓名抔御尋之儀も有之候處、春來は度々御出、詰人に繪被仰付儀折々有之。各多分松或は竹・梅・鶴等調上之。御大小將横目中村九兵衞之繪を書候に付伺候處、弊慶与御好に付則調上之。自分は富士山・三穗松原調之。料紙等者御抱守持參也。

右御禮に者不及段、御抱守中申談。加賀守樣に之御禮にも不及段御近習頭申談也。且今月十二日御出之節者、當番御大小將戸田五右衞門与御抱守与背競被仰付、此後度々右繪等被仰付候儀有之。

自分は津田政隣

二月十五日。前田治脩と婚約せる大聖寺侯前田利道の女俊姫金澤城二ノ丸の廣式に移る。

俊姫の婚儀は寛政十一年四月廿八日にあり

〔政隣記〕

二月十一日、去年十二月朔日被仰出候通、彌當月十五日俊姫樣御引移之筈。且御引移後も御名を奉唱候樣、從中將樣被仰出候段御横目廻狀出。

右に付十五日月次出仕朝五時揃、同日御城中に罷出候者は、朝五時後服紗小袖・布上下着用之筈之旨も申談有之。

但、俊姫樣今年御二十四歳之由云々。

〔政隣記〕

二月十五日、俊姫樣一昨十三日大聖寺表御發輿、同夜小松梅林院に御止宿、十四日夜松任に御止宿、今十五日野町町端に御休所出來、從金谷樣被仰進次第御發輿之筈。且同所迄御大小將横目篠島平左衞門爲御迎罷出、御先騎馬等相勤。九時前金谷御廣式に御着之上、中將樣・俊姫等御盃事等有之。

夫より御能御見物、暮前二之御丸御廣式に御移被遊候。但於二之御丸御廣式御料理御獻立等、不承に付不記之。御用ひ之御嶋臺者翌十六日當番之節拜見仕候處、高砂尉与姥・鶴亀・松竹・

雛御押・蕗根元にふきのたう有之。都合五臺。

一、今十五日爲御祝年寄中・御家老中等、御赤飯・御吸物しふか・御酒、御歩並以上當番ゟも同斷頂戴被仰付、足輕・小者ゟ者赤飯迄被下之。夫々御禮、御臺所奉行承之。

一、今日切御通筋野町は福町、片町は丸町、香林坊は香林橋与名目改之。

一、今日御著輿之節御行列左之通。

御先乘御横目篠島平左衞門　旅裝束。金澤町端迄御出迎、其所より御迎。　從者　御先拂足輕　御先拂足輕　此方樣御

横目足輕　御長持、宰領足輕　年寄女中乘物　足輕　足輕　荷挾箱　乘物

あなた御近習女中　御中臈之內　荷挾箱　合羽掛竹馬四荷　足輕小頭　御挾箱　御挾箱　小人二人　小人二人

御傘　小人二人　御徒　御徒　御徒　御徒　御徒　御徒　御薙刀　小人二人　侍生駒金左衞門　侍村井矢柄　御輿

侍河野七左衞門　侍桑平孫三太夫　侍佐分孫三　侍若林彌源次　此方樣　御歩横目　御歩目付　御行列前後　支配　御輿昇手替

御茶辨當、宰領足輕　小遣三人　乘物　あなた御近習女中　こなた御中臈之內　足輕　荷挾箱

乘物　こなた御表使女中　足輕　荷挾箱　乘物　あなた御次女中　足輕　荷挾箱

御長持、宰領足輕　御挾箱一荷　御召替御輿、宰領足輕　此方樣御横目　足輕

合羽掛竹　馬六荷　御跡乘頭堀江志摩　御醫師竹內玄閑　押足輕　惣供合羽掛竹

馬六荷　押足輕　押足輕　志村五郎左衞門　從者

今十五日御着輿御用に携候頭分者熨斗目、平士以下前記之通り。

同日前記に有之頂戴物、年寄中等者於席、人持以下者於御臺所、夫々席分に而頂戴之事。

同日七半時過志摩美濃守樣爲御使者登城、取次御大小將階上迄出向、虎之御間屏風圍ゟ誘引。

右御用懸り武田喜左衞門等ゟ爲知之。御式臺列居御大小將御番頭・御横目・御大小將九人也。

御歩給仕に而御吸物・御酒・御肴、御用懸御使番原田又右衞門相伴に而被下之。挨拶懸り組頭喜左衞門申述。且又就御省略御料理者不被下筈に候處、夜に入時刻移り候故御懸合、一汁三菜御燒鯛之御湯漬被下之、御目見は無之。御口上取次幷御答共御奏者番。將又從美濃守樣年寄中等ゟ之御口上有之段志摩申聞候に付、虎之御間ゟ年寄中等各被出拜聞、御請も右御間ゟ各被出被申上候。志摩披候節、階下ゟ御奏者番喜左衞門・又右衞門、最前誘引之御大小將送之。其外左之御作法書拔之通、御作法書要文。

武田喜左衞門幷御使番之內一人、右御用懸り、志摩ゟ挨拶幷御作法等之儀も內々演述可仕候。

右相濟御奏者罷出、御口上承、御目錄可受取之。御進物者於此方御用意有之事故、御目錄迄に候。且御口上取次人左之通。

御兩殿樣敎千代樣者御奏者番、御前樣等御四方者御附頭、芝御前樣者物頭代御用人、右順々罷出取次、御目錄受取退。御品は柳之御間御廊下に而御目錄に引合、與力本橋仙右衞門（御進物裁許也）等より受取可申候。右相濟御奏者番罷出御答申述、志摩に被下候御目錄も渡之。夫より御前檜垣之御間に御出、柳之御間御廊下迄御使番誘引、御杉戸之內より年寄中誘引、御奏者披露に而志摩御目見、御意有之、年寄中御取合申上、志摩退出。（ヶ樣に候得共、就御取込御目見不被仰付段被仰出。）於虎之御間中將樣・敎千代樣御答御奏者申述、被下物御目錄渡候。從御前樣被下物之御目錄は、御附頭河村儀右衞門持出渡之。右相濟、金谷御廣式御用物頭並山崎次郎兵衞出、藤姫樣・龜萬千殿御答申述候事。

但、志摩往來河北御門且三御門勤番。尤御目見之節、定番頭以下御步頭以上柳之御緣頰に伺公、各熨斗目。御門勤番服紗小袖・布上下着用之事。

一、俊姫樣御道筋、福町より香林橋・南町・西町・七十間御門より金谷御廣式。

一、金谷御廣式より二御丸御廣式に御移御道筋は、七十間御門より西町篠原織部屋敷横、西町口御門より御宮坂、土橋御門、御廣式。

十六日美濃守樣より、御結納被進候御禮之爲御使者、今日四時過堀江志摩登城。御口上御取次御奏者番昨日御使者之節同斷。三御門者御平常之通り、給事御步は布上下着用、御吸物等者不被下候事。

〔御觸幷御返書留〕

別紙之通可申談旨、御用番主水殿被仰聞條、御承知被成、御同席御傳達被成候、以上。

二　月　　御　横　目

人　持　衆　中

附札、御横目に

俊姫樣御着輿之節、御道筋警固足輕、辻々參懸候者は十五歲以下之もの者勿論、十五歲以上之ものに而も、御道之障に不相成樣、作法宜敷指置可申事。

一、御道筋町方外より參候ものに而も、女之分且又十五歲以下之子共之分者、みせ之內に作法宜敷仕指置可申事。

右之通被得其意、組・支配・家來末々まで可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、夫々申渡候樣是又被申聞候事。

二月二十日。石川郡粟ヶ崎に繫留する藩有船の修繕を稟請す。

覺

一、塗川御座御船　一　艘

但、損じ御用に相立不申候付、野村與三兵衞在役之内、安永六年四月御修覆相願、同七年十月御聞屆被仰渡候處、御入用銀高過分御座候。暨其節雪中にも相成候に付、御屆申上御修覆相見合置申候。

一、塗小早御船　二　艘

但、内一艘損御用に相立不申候。一艘は野村與三兵衞在役之内御修覆有之、當時御用に相立申候。

一、白木小早御船　同　斷

但、二艘共損御用相立不申候。

一、白木川御座御船　一　艘

但、損御用相立不申候。

一、小早御船附之橋船　二　艘

但、内一艘損、あか入仕候。一艘は當時御用相立申候。

一、塗川御座御船附之橋船　一　艘

但、損御用相立不申候。

一、車　御　船　二　艘

但、二艘共損、御用に相立不申候。

右御船々損じ御用に相立不申候に付、御屆申上候。數艘之儀に御座候間、追々御修覆被仰付候樣仕度奉存候。右御船之内白木川御座御船之分は、御兩殿樣御出之節御用之御船に而御座候。

一、塗川御座御船之分も、御兩殿樣幷御姫樣御出之節、御用御船に而御座候。塗川御座御船之儀は、先達而御聞屆相濟候御船之儀に御座候間、今般御修覆之儀、御勝手方御席にも御屆申上候。右兩艘は御出之節指懸り御用之御船御座候間、此分格別之御詮議を以、早速御修覆被仰付候樣仕度奉存候、以上。

巳二月廿日　　野村次郎兵衞　判

二月廿三日。前田重敎、俊姫を招請す。

〔政隣記〕

二月廿三日二之御丸御廣式に俊姫樣御移後、始而中將樣御招請有之。御饗應之御次第不承候

に付不記之。

二月廿四日。神護寺に於いて徳川家基の第七回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

二月廿四日於神護寺孝恭院様御七回忌御法事御執行。御奉行前田大炊。御前御裝束に而御參詣被遊候事。

三月十二日。越中新川郡の境が町なりや村なりやに就いて確定せんことを求む。

〔國事雜抄〕

私支配所越中境之儀、村に候哉又は町に候哉之旨、其御場より御尋に御座候。古來より西町・東町与申來候。乍去御貸米願返上帳等には、前々より境村与有之候に付、元來村・町之儀得与相分不申候間、改作所上帳等之儀承合候處、郷村帳に境村与有之候由に御座候。然ば境村にて、西町・東町与小名御座候与奉存候。依て支配所與力手前遂僉議候處、於支配所は古來より境之儀は町に御座候間、宗門帳に茂町与相調、曁御國目付巡見上使通行之節茂、御用之書物等町与相調申候。往古驛に而、于今驛御印茂町役人共手前に所持仕罷在、其節問屋相勤

境は部落の名

美濃守は前田利物

候家も東町に有之候。此等之趣にては町にて茂可有御座候や。右與力手前に而も難計段申聞候。右之趣にて村・町之儀相分り不申候間、是以後如何相心得可申候哉被仰聞候樣仕度奉存候、以上。

巳三月十二日　　野村與三兵衛

御算用場

添書

右紙面三月十二日御算用場ゟ指出候。同廿二日御算用場ゟ罷出、御用番小堀牛右衞門殿ゟ相達候處、御算用場に而も相分り不申候間、是迄之通村共町共申候樣にと牛右衞門殿被申聞候。尤藤田兵部殿・神保舍人殿にも列座有之候事。

三月廿三日。大聖寺侯前田利物初めて金澤城に登る。

〔政隣記〕

三月廿三日美濃守樣御家督後初而御登城、於御居間書院二汁六菜御料理被進之、御對顏は無御座候。（先日以來御風氣、十五日御表御出も金谷ゟも不被爲入故也。）御退出、三之御丸より爲御禮御立戻、追付御退出。土橋御門内御堀端通り御廣式ゟ御勤。（御鈴通御通之筈に御作法書出候處、後姫樣御風氣に而御對顏不被遊旨被仰出、右之通りに相成候事。）夫より金谷御殿ゟも御出、松之御間に於て中將樣御對顏有之、御退出、爲御禮御立戻り被遊候事。

三月。時疫大に流行す。

〔政隣記〕

三月下旬春寒立歸冬の如し。同月病人死人も甚多し。是時疫流行也。去十五日中川八郎右衛門人持組寺社奉行公事場奉行兼帶中黑六左衛門能州所口町奉行病死也。

三月。諸士の家來にして缺落・取逃等の罪を犯したるものを拘留する手續を改む。

〔御馬廻頭留記〕

付札、定番頭ゟ

御家中之人々家來、欠落・取逃等いたし候者、於盗賊改方召捕候節、只今迄は先主人手前ゟ相渡、其主人より公事場ゟ引渡候得共、詮議之趣有之、以來者改方に而召捕候節、直に公事場ゟ引渡、尤其段御用番ゟ改方より相達、其主人ゟも及屆候筈に候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配ゟも申渡候樣可被申談候事。

巳　三　月

芝御廣式は前田重敎の女諏姫

五月朔日。本日以後前田齊廣の爲に建てたる幟の觀覽を許す。

〔政隣記〕

五月朔日龜萬千殿御のぼり、七十間御門内に建、今日より五日迄見物被仰付候段、御横目廻狀前月出、去年四月廿八日廻狀同斷略す。

五月四日。中村十兵衞の養子乙次郎、その父を刺殺す。

〔政隣記〕

五月四日芝御廣式御用人並領二百石中村十兵衞養子乙次郎、遺恨有之由に而養父十兵衞を今朝刺殺候儀露顯。翌五日夜爲檢使、御大小將横目四人・十兵衞支配頭・寺社奉行中罷越、乙次郎手前糺明之上御達申候處、逆罪至極之者に付、右乙次郎儀先牢揚屋ゟ入置候樣御用番大隅守殿被仰渡、同夜公事場牢揚屋ゟ入。乙次郎儀實は御大小將組會所奉行永原清太夫弟也。右に付清太夫幷父方いとこ永原治九郎、金谷御近習也。依而勤之支配頭宮井典膳等より也金谷樣ゟ伺候處、不及指扣候段被仰出。但組者御大小將組也。安達多宮御大小將也。等指扣伺候處、清太夫儀者指扣可罷在候。多宮治九郎は忌外之いとこ故不及指扣候段、翌六日御用番被仰渡に付、清太夫儀者頭奥村彌左衞門於宅御番頭青地七左衞門立會に而申渡有之、治九郎・多宮ゟ者以紙面申渡有之、書付返達有之。

右名別之外一類同斷、一々記略す。

一、安達多宮嫡子吉次郎儀爲には、乙次郎儀は母方實伯父之續に付、吉次郎儀爲指扣置可申哉与父多宮より書付出之。則頭津田林左衞門より御用番ゟ相達候處、外出指留相慎罷在候樣可申渡旨同月八日被仰渡、則多宮ゟ申渡有之。此外無息之人々同趣、一々記略す。

〔政隣記〕

一、永原清太夫指扣罷在候處、故中村十兵衞家内・家來共一類ゟ御預に付、類中家來共指出勤番申付候得共、右家來迄に而者縮方不行屆に付、毛利伊兵太・毛利兵左衞門十兵衞舊宅ゟ罷越、夫々縮方を談候得共、兩人迄にては差支候條、清太夫儀差扣中に候得共彼宅ゟ罷越縮方等申談有之度旨、伊平太等申聞に付、同月十日支配頭寺社奉行横山又五郎宅ゟ伊兵太等相招、清太夫差扣者今般之一件に付而之事に而候間、十兵衞宅ゟ清太夫罷越候儀者不差支段又五郎申聞候由。則伊平太等より清太夫方ゟ申越候得共、又五郎之任指圖候事者難成段僉議に而、清太夫頭奥村彌左衞門より御用番ゟ相達候處、無據趣に候間御聞屆可爲勝手次第旨、大隅守殿被仰渡、其段清太夫ゟ彌左衞門より申談有之候事。

右乙次郎儀養父十兵衞を及殺害候趣意者、乙次郎常々不行狀博奕を好み候に付、今月三日朝強く加異見候處、其節者畏有之。暫以後外出、博奕有之場ゟ罷越博奕打候處、大に負け着服・帶刀迄も被取之候に付、色々与才覺を以、刀一腰やう〳〵借受候而四日朝宅ゟ歸り、將又養父妾与兼々致密通罷在候に付、右妾与申談、幷若黨□□与申者を申含置、十兵衞居間ゟ罷越候處、いまだ寢覺不申罷在候に付、頭上ゟ大夜着を覆ひ、其上ゟ跨り乘、下之方まくり、睾丸を縮め、肛門より刀を以刺通し令殺害。其節十兵衞儀、乙次郎等之所爲とは聊不心付躰に而、乙次郎幷妾之名を二聲宛呼び、助け候得と呼びながら絶命致し候由也。扨疵口を洗ひ清め、病死之爲躰取計、一類ゟ及案内候。右取計方に付容易に可及露顯に仕抹にては無之處、右一味致候若黨□□儀、一類中之内ゟ及訴人候に付、早速一類寄集り、先乙次郎を搦、幷妾をも搦め置候而、夫々頭等ゟ及案内候に付、早速令露顯与云々。

一、右十兵衞妾儀尤禁牢、親者今石動に有之被召呼、其外一類十八人有之。

右一件に付度々不時公事場有之。

一、今年十月廿二日乙次郎儀、於上口礫に被仰付。

右に付實兄永原清太夫等忌引之儀、牢舍之者忌引無之与申事に候得共、僉議分り不申に付、頭々より御用番本多安房守殿ゟ御尋申候處、爲致忌引候樣就御指圖忌引書付取立有之。十一月二日就忌明出勤之事。

但、清太夫指扣者十月十三日御免被仰付、其外之人々も同斷。

五月七日。前田治脩、金澤大豆田口に放鷹す。

一挺は一調

〔政隣記〕

五月七日晝頃より、大豆田口より加賀守様御放鷹。御餌柄鶴十一有之。但此後も折々御放鷹御出有之。時々記略す。

五月七日。前田重教、御先手三輪藤兵衛等をして一調を奏せしむ。

〔政隣記〕

五月七日、中將様春以來者御騎射等御間遠之處、此間當分御延引被仰出、當時之御慰者太鼓・小鼓御稽古、折々於新御舞臺一挺御打被遊、拜聽も寄々被仰付。其刻者役者抔にも一管一挺被仰付。今日者御先手三輪藤兵衛に小鼓放下僧一挺、御大小將渡邊源藏に太鼓舟辨慶一挺も被仰付、暨御一挺も被仰付。御鐵炮御稽古は今以御入情、御近習頭等にも被仰付。

五月廿四日。定番馬廻組麻生新四郎流刑に處せらる。

〔政隣記〕

五月廿四日左之通被仰付。

越中五ヶ山之内に流刑　小松定番御馬廻組　麻生新四郎

追放　八嶋猪三郎

右元來不行狀者に付、先年小松に被遣候處、於小松も彌增不愼有之故与云々。麻生は領百石、八嶋は百二十石也。

五月廿七日。諸士の他國に使者として出張したる際藩より借用したる小拂金銀返納の法を定む。

〔政隣記〕

五月廿七日、他國御使等之節不時に借用之小拂金銀、江戸・金澤共明和八年より去暮迄之分、今年より七月より十月迄之內、百石に二十目宛之圖りを以上納、御切米之分は十匁宛三月より十月迄之內上納与被仰渡候由廻狀來。

六月十五日。諸士に博奕を行ふことなかるべきを諭す。

〔政隣記〕

六月十五日、御用番前田大炊殿組等有之。諸頭等一人宛御呼出、以御書立被仰渡之趣左之通。

御家中之人々行跡不宜者茂有之、第一侍に不似合博奕に似寄候儀斷申族茂有之候付而、前々より段々御制止被仰付候所、不相愼、近年別而致增長候躰相達御聽候。依之嚴敷御糺可被成

候得共、先づ御猶豫被成候。先以右之爲躰、侍には猶更不埒成所業、不屆至極に被思召候。
此上相慎不申者も候者、嚴重御沙汰可有之候間、兼而此旨を存、急度相嗜候樣・頭・支配人指
引可仕儀之旨被仰出候。
右之趣被得其意、同役中可有傳達候事。

巳六月

六月。前田重教諸士の行狀を戒む。

〔坂井舊記〕

今度組中行跡慎等之儀に付、同役中中將樣御前ゟ被爲召、被仰出之趣御書立、幷拙者共添紙
面之趣、組中不殘拙宅ゟ呼出し申渡。御書立寫者筆頭山森外記ゟ相渡、封印を以巡達有之樣
申談候事。

累年御勝手御難澁、當時者社稷最早危殆共可申時節に至候儀、一統奉承知罷在通。就夫御家
中諸士介心得茂可有之筈也。近年米直段下直、諸色者高直、甚以難澁之處、風俗者咸奢侈
に相成、宴樂遊興を好、無益の物數奇等致し、謂なく難澁之人々茂有之樣被聞召候。畢竟
御上茂御難澁故、困窮者一統之儀に候得共、人々手前行つまり候を打捨置、不相應之參會
抔致、平生暮方油斷する族者甚以不埒之至、ヶ樣之所組頭明細に心を付、其人々之行跡等

介は大にと訓む

を相考、平生無油斷可加指圖。勝手向之儀者今日勤職之根本共可申事に候條、誠如何樣に
茂致勘辨、勤仕不指支心懸、其内に而分際相應の武器を嗜み、文道に茂携尤之至也。
一、新規に番入被仰付者は、古參之者共隨分心を添引廻、勤馴候樣成たけ取立遣可申事に
候處、心得違之者茂有之、不案内を致誹謗、或振廻之節抔美味を爲取扱候之類、皆以古參
之者心得不宜故なり。時節柄別而有之間敷儀に候條、急度相改る樣淑々可致差引。
今般拙者共中將樣御前ゟ被爲召、御直に被渡下候御書立寫相達候條、被奉得其意、与得會得
可有之候。是以後右被仰出之趣、急度可被相守儀者勿論之儀、如此被仰出候上者、拙者共心
付候趣猶更時々隨分可申談候。併今般之被仰出に依而、武藝稽古等に茂被寄合候儀難被致与
申樣成事に而者有之間敷候。兎角無用之參會、或器物木石等を翫び、凡而奢侈榮耀ヶ間敷儀
無之事而已肝要に候。尤御内意之筋茂有之候間、新規に番入有之節之參會之儀は、猶更堅く
無用に候。此等之趣隨分會得可有之候。
一、子息所持之人々、二三男又者弟等陪臣ゟ養子に遣候儀、親類之筋目有之者格別、續等於
無之者一向相成不申候。曁陪臣者之娘与緣組を申合候儀茂、筋目も無之儀は右同樣に拙者共
承屆申間敷候。將又惣而養子緣組申合候節、拵料与名付金銀を取受候儀、元來御停止に而度
々被仰出茂有之儀に候得ども、以來者猶更右等之取扱無之樣可被相心得候事。

淑々は能々と訓む

右之趣者中將樣於御前、右御書之外段々御内意之趣有之申談候間、急度可被相心得候、以上。

六月。女を抱へ人集めすることを禁ず。

〔政隣記〕

前々より被仰出置候得共、近年金澤廻り町方、幷寺社門前地、御郡方に支配所において女を抱置人集仕、暨出合宿仕候者多有之候由に付、今般松尾平九郎に被仰渡、急度遂吟味申筈に候。近隣不存事は無之筈之處、右之族不屆之儀に候。向後左樣之者有之に於いては、本人は勿論曲事可被仰付候。兩隣・向家も急度可被申付候。尤肝煎・組合頭無油斷遂僉議可申候。右之族於有之者、是又急度可被申付候。

右之趣被仰出候條、嚴重可被申渡候事。

乙巳六月

右之通寺社奉行・町奉行・御郡奉行に被仰渡候。御家中長屋借り・屋守等之内にも、右之族有之段相聞え候。是又急度可申渡旨被仰出候旨、大炊殿御添書を以御觸出有之。

六月。時疫流行するを以て郡方の請求により調藥を給することを告ぐ。

〔三守御譜〕

六月加州三郡之内、先頃以來時疫流行に付、御藥被下間、御郡奉行斷次第調藥指出候樣、御醫師中に可申渡旨、三田村内匠に被仰渡。

七月朔日。組頭等に藩の財政窮乏の狀を告ぐ。

〔典制彙纂〕

御勝手御難澁至極に付、町・在より之御借銀等莫大に相成候處、過分至極之御引當米に付、當盆前御返濟之手段一圓無之に付、御返辨方御猶豫、御運方出來候上者追而御返濟取計候之樣、御算用場奉行等に申渡候。如此之御勝手御行詰に付、此上は御家中に御かり免增穀に而茂不被仰付候半而は難被爲成候得共、御家中茂追年勝手向難澁至極に付、御救も不被仰付候半而は難成程之躰故、其儀に茂難被及候。左候得者御救之手段者猶更御手に及不申、御心外成事に候。然處前段之通先納銀等此度御返濟方御淀に付而は、町・在及難澁候事故、當七月半納米賣捌指支候儀茂可有之哉に候へども、右之通之御勝手振に候間、此處深察有之、何分被申談取續候樣可被取計候。誠元來御取箇に而不致符合、年中御入用高に付、此上各別に御省略不被仰付候半而者迚難相成候。此御時節を奉存候而、何茂致會得候樣有之度儀に候間、各同役中被申談、可然樣被申解候樣存候事。

右覺書、組頭初筆頭々二人宛相招、於別席口達に而申述覺書相渡。

七月朔日　　安房守

七月十一日。金澤城本丸の番士、その保管の鍵を紛失せしめたるを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月十一日、御本丸御番人定番御馬廻十一人。

伴　七兵衛組

駒井淺右衛門　永井儀右衛門　松宮吉兵衛　青木善太夫

熊谷半藏　佐藤清藏　横地善助

松田治右衛門組

丹羽久太夫　河合右膳　金岩嘉太夫　多田直丞

右東丸境御門鍵致紛失、不念之趣に付、今十一日遠慮被仰付。但右鍵は御本丸御番所預之處、當番之節紛失故也。

〔政隣記〕

十月七日

一、御本丸御番所預り之鍵紛失に付、今年七月十一日於金澤遠慮被仰付置候定番御馬廻之内、八人今日御免許。

左之三人は御免許無之。

河合左膳　佐藤清藏　青木善太夫

七月十二日。疫疾流行に付藥法を郡方に傳ふ。

〔加藤氏日記〕

頃日疫病流行いたし、輕き者共相煩候段相聞得候。依而御醫師中詮議被仰付、別紙藥法書揚候に付、拙者共迄被渡下、夫々無急度相觸候樣被仰渡候に付、別紙藥方書相越之候條、可得其意候。輕き者相煩候儀被聞召、藥方被下候儀難有奉存、其段不相洩樣可申渡候。先々無遲滯相廻べく候、以上。

巳七月十二日　　御用番　進士齋宮

能州四郡十村中

疫病之藥

一、松葉を細に切、酒にて一匕程宛一日に三度飲てよし。

一、小豆を布の袋に入れ、井の内に三日おき、男は十粒、女は二十粒飲てよし。

右頃日疫病流行いたし、輕き者共相煩候段相聞得候。依之御醫師中詮議被仰付、右之藥方書上候に付、各迄被渡下候條、夫々無急度相觸候之樣、三州御郡奉行・遠所奉行等ゟ可被申聞

候事。

天明五年　　御算用場

七月廿一日。道中筋の人馬賃錢を割増することに關する幕令を傳ふ。

〔御觸幷御返書留〕

道中筋宿々米穀高直等に付、從公儀相渡候御書附寫一結二包相越之候條、被得其意、御組幷與力、且又御家來末々迄可有御申渡候、以上。

乙巳七月廿一日　　本多安房守　印

長大隅守殿

田沼主殿頭殿御渡候御書付寫一包相達之候。被得其意、答之儀は久松筑前守方に可被申聞候、以上。

六月廿日　　大目付

松平加賀守殿留守居中

道中筋宿々米穀高直、其上流行病に而人馬繼立差支候由相聞候に付、東海道筋品川より守口迄、佐屋路幷渡舟場とも、當巳七月朔日より來る卯の六月まで拾ヶ年之間人馬賃錢四割増、中山道筋は先達而増錢無之分、沓懸より守山まで幷美濃路共、是又當巳七月朔日より來る子六月迄七ヶ年之間、人馬賃錢二割増受取候樣宿々に申渡候間、可被得其意候、以上。

右之趣向々に可被相觸候。

巳六月

七月。羽咋郡・鹿島郡の百姓等が食用に供する物の品種を上申す。

〔加藤氏日記〕

羽咋郡・鹿島郡里方幷山方村々百姓中食事に仕候品々

一、大唐米　一、めうし粉　一、ゆりこ
一、大麥　一、小麥　一、蕎麥
一、稗　一、粟　一、黍
一、大豆　一、小豆　一、蕎麥の目屑
一、空豆　一、大根、但葉共　一、蕪
一、干菜　一、大角豆　一、小豆の葉
一、畑芋　一、芋の葉　一、おばこ
一、せり　一、よもぎ　一、ちゝこ
一、山牛蒡　一、あかざ　一、わらび

一、りやうぼ　一、だつま　一、いたどり
一、のびり　一、たんからし　一、けぶき
一、裏白　一、豆ふかす　一、醤油かす
一、あさみ　一、いんとう

同囚年食事仕候品々

一、こぬか　一、粟ぬか　一、稗ぬか
一、飴かす　一、酢かす　一、たにし、但田に生じ申貝に而御座候
一、たん貝、右同斷　一、どくだめ　一、じねんご
一、くずね　一、藤の葉

右之外浦方幷潟廻百姓中食事に仕候品々

一、小海老　一、しゞみ　一、藻の實
一、いご

右私共御郡百姓中食事に仕候品々書上申候、以上。

巳七月　孫右衛門
平右衛門

御改作御奉行所

八月廿二日。前田重敎自ら藩の財政整理の任に當るを以てその吏を命ず。

〔袖裏雜記〕

八月廿一日安房守等中將樣御前ゟ被召、御勝手向之儀御心付之趣も被爲在候間、御勝手方之儀御引取御取捌可被仰付与思召候旨等御意。且御算用場奉行に富田權佐（奥改作奉行御勝手方兼帶）・富田彦左衞門・篠嶋庄兵衞・池田權左衞門・奥野七左衞門・多田左守・久田忠左衞門被仰付、遠田三郎太夫御算用場奉行御免除等之儀御親翰被渡下。

助左衞門
喜八郎
五左衞門
五兵衞
喜三次
彌兵衞

〔政隣記〕

八月廿二日、今日より中將樣御勝手向御下知に付、左之通被仰付。

改作奉行幷御勝手方兼帶

御馬廻組　富田彦左衛門　同　篠島庄兵衛
同　公事場御横目より　奥野七左衛門　同　多田左守
同　久田忠左衛門　同　池田權左衛門
會所奉行は只今迄之通り　矢部友右衛門　和多田八太夫
太田彌兵衛　水野平左衛門
堀田治兵衛　田邊孫助
小森貞右衛門

御勝手方御用御免除

產物方御用御免除

右之外只今迄之改作奉行御免除、内寺西多太夫・木村次右衛門者御免無之、同月廿六日御勝手方兼帶も被仰付。

右今般御引受御下知之趣意者、富田彦左衛門・池田權左衛門棟取に而一封認之、金谷御廣式向最寄取次を以池田より上之。依之御引受御下知可被遊旨被仰出候由等之風説也。且富田・池田者中將樣御近習兼帶与被仰出、直に奉言上与云々。

附、右に洩候產物方兼帶和多田八太夫・水野平左衛門、改作奉行杉野多助・堀田治兵衛、是又都而御免除之事。

九里幸左衛門は金澤所奉行

本令は遠所町以下に及ばざりしこと九月の條に見ゆ

九月八日。金澤の質商の營業を停止し、質物を本主に返して三十ケ年賦の債務とすべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

九月八日町奉行九里幸左衛門へ渡之。

町奉行ゟ

町中質屋致商賣候者、當夏以來銀支等申立其用不辨、輕き者共甚困窮。當年にも不限、毎年時々不辨至極之由相聞え候。元來質屋之儀は、末々輕き者共之運之爲致商賣事に候へば、不指支樣可相心得處、是迄質賣買方等閑之致方、末々輕き者共差支も不厭段不埒至極に付、右商賣方取揚追込に可申付候。仍而品物之儀は、先々持主ゟ相返、來午之年より三十ケ年賦を以代銀取立可相渡候。右之通申付候付、此以後質商賣差止候而は、末々差支可申候間、相應之者右商賣相願候樣可申渡候。尤願候者ゟは、相應に銀子貸渡有之樣可申渡候。右之通可申渡旨、從中將樣被仰出候條可被申渡候事。

〔政隣記〕

右に付金澤町質屋百十人不殘追込申渡有之。

〔袖裏雜記〕

御郡支配寺社門前地質屋之分も、前に記す町奉行ゟ申渡候同様可申渡趣御書立、九月十二日御渡、且左之通可觸出旨も御意。

質屋共取置候質物持主ゟ相返、來午之年より三十ヶ年賦を以代銀取立可申趣、先達而夫々被仰出候通に候。然處御家中小者・奉公人等之類卑賤之者共、至而少分之質物代銀、右年限に割方も難相成程之分は、無指引に而品物相返可申候。質屋共手前ゟは、追而御上より御沙汰可有之候。此段一統爲申聞候様被仰出候事。

九月

寺社門前地質屋追込、九月廿六日御免申渡。

九月九日。町奉行片岡孫兵衞・中買組合頭割出屋久兵衞以下役儀不相應を以て處罰せらる。

〔袖裏雜記〕

町年寄片岡孫兵衞、役儀不相應に付、役御指除御扶持御取上。中買組合頭割出屋久兵衞・戌亥屋仲助・油屋半左衞門心得不宜に付、御扶持御取上、中買組合頭御指除。右組合頭大竹屋庄右衞門、御鹽裁許勤候付被下候二人扶持御取上。右組合頭越中屋彦三郎不屆之趣被聞召候付、御扶持御取上、役指除。右組合頭越中屋次左衞門・鶴來屋吉兵衞・茶屋仁兵衞、去年御扶持被下候へども御取上之旨。中將様より被仰出、九月九日町奉行ゟ申渡。

九月十一日。産物方を廢しその事務を改作奉行の所管に復す。

〔袖裏雜記〕

産物方席被指止候付、如昔改作奉行ゟ右主付被仰付、富田彦左衞門・池田權左衞門兩人申談可相勤旨、九月十一日被仰出。

〔政隣記〕

九月十一日於金澤、左之通從中將様被仰付。

御勝手方幷産物方御用御免　村井又兵衞

九月十一日。勝手方御用を前田土佐守一人に處理せしむ。

〔政隣記〕

九月十一日、前記之通又兵衞殿御勝手方御免に付、土佐守殿一人役ヶ被仰出。

御勝手方御用無之、執筆御免　寺西作右衞門

御省略方御用無之　本多安房守　奥村主水

九月十二日。勝手向諸役所の事務を調査しその役人を交迭せしむ。

〔政隣記〕

九月十二日、御勝手向小役所しらべ被仰付、薪所小役人に至迄入替被仰付。

九月十二日。家中の諸士以下に質物を受出し及び債務に對する證文交附等の手續を告ぐ。

〔攻隣記〕

御家中之面々自分質物、暨家來之分も、其主人致引請に、當月迄之利足相加へ、元利〆高支配人之奥書之證文町會所ゟ取置、毎歳七月年賦當り取立可申事。

右之通夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

九月十二日　　九里幸左衞門

前田大炊樣

右に付質物置主ゟ相返候日限、暨年賦證文等之儀都而町會所ゟ可承合旨、別紙町奉行紙面之趣可相心得旨等、御用番大炊殿より御廻狀出。

〔御觸并御返書留〕

質屋共手前之儀に付、別紙寫之通町奉行ゟ申渡候。依之右質屋共より置主ゟ質物相返候日限、暨右質物價年賦證文等之儀、都而町會所ゟ承合可申事。

一、質物年賦證文等之儀、別紙町奉行紙面寫之通相心得可申事。

一、質物置主ゟ相返候に付、請取人指遣候節、質屋ゟ爲縮方町附足輕指出置候條、先後等之儀に付及爭論不申樣、家來等ゟ急度可申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候。

右之趣可被得其意候、以上。

九月十二日　　前田大炊

天明元年閏五月廿九日の條參照

九月十二日。金澤堂形の畑を廢し舊の如く明地と爲さしむ。

〔政隣記〕

九月十二日、堂形新畑苅毀、暫時之内如元明地に被仰付。依之大豆・小豆拾ひ悅申者も有之。但花屋清左衞門請地に仕、大豆・小豆作置候處、右之通に而損分、剩清左衞門追込に被仰付。

九月十五日。前田重教農事に就いて注意すべき事項を令す。

〔袖裏雜記〕

左之通早速可申渡旨九月十三日御意。

餘米は用米
劇は其の義
效は致と訓む
物はことゝ訓む
役仁は役人

諸郡隱田蹈出除地捨地之分、新田開發或手上等之儀第一に遂僉議、拔目無之樣淑々可申付事。
收納米皆濟之儀、少不作之年にても大概指支申儀有間敷候。惣而十村・百姓高持共、餘米先
に取、年貢米跡に相成候故、皆濟之指支に成躰、劇不屆至極に候。年貢米第一に心得不申族
不埒至極。餘米先取效故、皆濟之節に至小作可及難儀も可有之候。小作手前不足は、高持よ
り少々づゝ見次遣候へば、皆濟も支不申筈に候。以後は急度相心得候樣に夫々可申談候。此
等之趣改作奉行にも是迄不行屆處、無油斷取捌可申事。
諸郡變地場所等之儀相糺、夫々立歸候樣可申付事。
諸郡川除普請所等之儀、とくと遂僉議可申事。
右之條々嚴重申渡取捌可申候。彼是及違背申輩於有之は、時々不及伺曲事可申付候物。其方
共抽丹誠勤申上は、若仕毀儀有之候ても宥免可致間、毛頭無泥相勤可申候。當時勝手方指支
候條、入用等增不申樣取計可申候。其外諸事心付候品、聊無泥速に可申上。
附、諸郡扶持人幷十村・新田裁許・山廻・村肝煎・組合頭等之役仁共、百姓之內にも甚之不屆
者多有之段、委及承候間、必油斷不仕取計可申事。
天明五乙巳九月
改作奉行ゟ

可强は勉むべしと訓む
如しし

其方共支配取捌不行屆儀有之躰、萬端細々心付可强。支配之藏宿縮方など米方之儀に付、下
役人共甚不埒之取計有之處、奉行之內にも宜事と心得、用ひ申人々も有之躰、巨細承およぶ。
今般勝手引取候儀皆承知之通候。改申渡す條、心得違無之樣に可相守候。作方之儀に付改申
渡候條々有之間、支配之者共心得違無之樣、嚴重可申渡置。若改作方之儀において彼是と申
觸す者あらば、急度曲事に可申付候。末々迄斯筋得与合點參候樣可申渡。支配之扶持人幷十
村・山廻等之者、最屆不最屆之沙汰も有之躰、不屆至極に候。是以後嚴重に可相勤事。

九　月

宮腰町奉行
小松町奉行
所口町奉行
高岡町奉行
魚津町奉行
諸方郡奉行

右九月十五日夫々申渡。

九月十五日。諸士の借銀は凡て永年賦として返濟すべきを命ず。

〔政隣記〕

九月十五日、於金澤御用番等之諸頭、曁支配有之人持御呼出、於御席御用番大炊殿左之御書立御渡之事。

御家中諸士、近年勝手難澁之儀被聞召候。然處當時一統承知之通御財用甚御指支、最早御仕送方御手段無之程之期に至り候故、中將樣御勝手御引取御下知被遊候。仍之御運方御詮議之上、御家中御借知被返下度被思召候得共、兼而之思召与は致相違、彌增之御逼迫に付難被及其御沙汰、御心外被思召。左候得者取續方可爲難儀候間、諸借銀等返濟方、相對を以永年賦に申談、是以後幾重にも儉約專にいたし取續、惣而質素に相暮可申候。其内御勝手向御成立之道も付候はゞ、御借知も御返可被成候。將又諸士風儀惡敷、其内金銀等貸附之取組致候者も有之段、具に被聞召候。就中收納米拂方不埒之族も有之躰に相聞候。甚不愼之至、急度御糺可被遊候得共、御下知始之御事故不被及其御沙汰候。畢竟困窮より僅之世帶書算違等出來与被思召候に付、人々收納米藏縮之分、當年より藏解被仰付候。尤收納米拂方不埒有之輩者、急度御咎可有之候。人々其覺悟尤に候。右之通一統可申渡旨、從中將樣被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも相達候樣申渡、尤同役中傳達可有之候事。

本年十二月廿一日の條參照

九月十八日。前田重教政務を監するを以て小吏の任命にもその同意を經べきことを定む。

〔釉裏雜記〕

九月十八日御用番金谷に罷出候處、中將樣御勝手御引取御下知被遊候内は、御在國・御在府にても、小役人たりとも、加賀守樣より中將樣に被仰進候樣可申上旨御意。其段加賀守樣に申上候處、被仰進候趣一々畏被思召候。此旨宜申上候樣御意に付、重而中將樣御前に罷出申上。

九月十九日。御馬廻組頭原五郎左衞門知行を加增し人持末席に列せらる。

〔政隣記〕

九月十九日

一、御加增二百石　　御馬廻頭兼公事場奉行

先知都合千二百八十石　　原　五郎左衞門

五郎左衞門儀、幼年より大應院樣御部屋住以來數十年、品々重き役儀入情相勤候に付、如斯

御加増被仰付、人持末席ゟ被指加、佐々木孫兵衛次、石野主殿助上に列居、當分御用番支配被仰付。尤公事場奉行只今迄之通可相勤旨被仰出。只今迄之御役料は被指除之。

九月廿五日。鉛箭箱を公事場門前に出しその投書を前田重教に呈せしむ。

今月は九月

〔政隣記〕

鉛箭大さ高さ五尺計、横三尺計。箱の大さ高さ二尺六・七寸計、幅二尺計、横一尺五寸計。是公事場門續下之方土塀際に置之。尤番人無之。

右今月廿五日より被置之。名前無之投書者上り不申火中、名前有之分者中將樣上之候樣被仰出与云々。

〔續漸得雜記〕

十月十七日より公事場前鉛箭箱出來、出る。箱之上の口より善惡の事を記し入る也。毎朝御改御歩横目一人、割場より兩人宛參り引出し相改、其儘御次ゟ指上申事也。但其後御改法相止申に付、翌年十一月御取拂に相成候事。

十月十七日とあるは誤なるべし

九月廿九日。盲人の支配に關する幕府の令を領内に傳達す。

〔御觸并御返書留〕

中國・西國筋其外是迄無支配之盲僧之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、御組并與力且又御家來末々迄可有御申渡候、以上。

九月廿九日　　本多安房守　印

長　大　隅　守殿

松平周防守殿御渡候御書付寫一通相達之候間、被得其意、答之儀は牧野大隅守方ゟ可被申聞候、以上。

八　月　八　日　　大　目　付

松平加賀守殿留守居中

中國・西國筋其外是迄無支配之盲僧共、青蓮院宮御支配に相成候に付、武家陪臣之忰盲人は盲僧に相成、右宮御支配に附候共、又者鍼治・導引・琴三味線等いたし檢校之支配に相成候共、勝手次第たるべく候。百姓・町人之忰盲人者盲僧に者不相成、鍼治・導引・琴三味線等いたし、檢校之支配に可相成候。若内分にて寄親等いたし盲僧に相成候儀者、決而不相成事候。右之外百姓・町人之忰盲人に而、琴三味線・鍼治・導引を以渡世不致、親之手前に罷在候而已之もの、并武家ゟ被抱、主人之屋敷又は主人之在所ゟ引越、他所之稼不致分者、安永五申年相觸候通り制外たるべき事。

右之通可被相守旨不洩樣可被相觸候。

是月は大盡なり

九月晦日。能登に於ける御預地の百姓に對しその取締を嚴にすべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

左之御書立九月晦日御渡、十月朔日御算用場奉行ゟ相渡。

御預地之者共人氣惡敷、緩怠に相成、申度儘を申、風俗不宜候。彼是与及問答候へば、可及公訴等申候に付、一統相泥申故、彌申度儘に相成、不作法之族も有之旨被聞召候。容易に公訴可相成儀に而無之候條、以來は其心得を以隨分嚴敷申付、緩怠之族有之候はゞ急度可被相咎事。

九　月

九月晦日。儉約所を廢し、御用所に於いてその事務を執らしむ。

〔政隣記〕

九月晦日、金城御儉約所今晦日より被指止、於御用所御副印押候樣、中將樣より此間被仰出。

本年九月八日の條參照

江戸御儉約所者十月九日より被指止、是又御用所に而御副印押之。

金澤廻り暨能・越十村共番代相止、十村共直捌に可致旨、中將樣より此間被仰出有之。

九月。遠所町方等の質屋は取質・請質凡て從前の如くなるべきを告ぐ。

〔御郡典〕

今般當町質屋共、御樣子有之、質屋商賣御取揚、品物持主ゟ取戻し、代銀三十箇年賦を以返濟之儀被仰出候。遠所町等末々之者共、當町同樣品物取請申心得に相成居申躰に相聞え、甚不埒之至に御座候間、急度相守、唯今迄之通相心得、取質・請質共都而質格取亂不申樣可相心得儀に候間、了簡違無之樣嚴重御申渡可被成候、以上。

巳　九　月　　富田彦左衞門等七人

進　士　齋　宮樣

九月。藩の町方に對する八月以前の買上物代銀支拂は當分之を延期すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

九月、町奉行ゟ左之通り被仰渡。

累年御勝手御難澁之處、次第に御運方指支、御手當も難計期に至候。今般御勝手方中將樣御引請御下知被遊、御改法被遊候思召候。依之是迄指上候諸色御買上物等代銀、當八月迄指上候者は、御詮議之上夫々可被及御沙汰候。如斯被仰出、一統被爲難澁儀、以之外に被思召候。此所者格別に奉存、是以後入情仕御用相辨、不指支候樣に夫々可被申談候。向後御拂方七月・十二月兩度可被相渡候。急切なる御用之儀は、其節遂詮議可申上旨被仰出候。指懸り候御送方等御指支候に付、右之通早速夫々可申渡旨、從中將樣被仰出候間、此所末々可申談候事。

巳九月

本文は九月のことに係る

九月。百姓の天明四年以前に係る借用證文にして書替へざるものは効力を消滅せしむ。

〔御用大綱拔書〕

一、御改法之時貸借等無差別同事に相成に付、十村奥書等之儀、天明四年以前借用證文書替不申分は不及貪着、夫以後之分者綿密に指引相立候樣御觸渡之事。

九月。足輕・小者等にその分限を守るべきを諭す。

〔政隣記〕

諸組足輕・小者近年者分限を取失ひ、平生暮方不相應之躰相聞候。且又家居宜敷、土藏迄所持仕者も有之樣子に候。家居夫々相應に致させ、土藏者必毀て爲取可申候。將又被召抱候砌、或定役に罷成候砌、爲仲間入不相應之振舞致し候由。曁妻子等衣類等も先年与者違ひ、絹類致着用候者も有之由、向後綿衣之外着用致間敷候事。

一、今般諸士一統借銀永年賦被仰付候儀に候得者、御家人之儀者一統之事に候。組々小頭等手廻し宜敷者共、御下行米を致引當に、困窮をも不顧、理不盡に返濟方爲相立候故、勤仕に茂相障、心外御暇相願候族も數多有之由甚不埒至極に相聞候。畢竟其頭・支配人常々裁判等閑成故に候。此度借銀等爲相改、艱難に爲相暮、都而右之通可取計候。

右之趣夫々不相洩樣可被申渡候事。

乙巳九月

本多安房守の發令が十月朔日にあることは別書に見ゆ

十月五日は發喪の日なり

右御書立從中將樣被仰出候由、御用番安房守殿被仰渡候事。

十月五日。天德院に於いて前田重靖の三十三回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

十月五日、昨今於天德院天珠院樣三十三回忌御法會御執行、御作法等前々之通。今日御兩殿樣御參詣有之。且十一日前々之通御使御大小將不破直記を以、御茶・燒饅頭・狗脊一箱宛被遣

之。

同日於江戸廣德寺も御茶湯御執行。役附左之通前月二十一日申談有之。

取次幷御香奠裁許相兼　　津田權平

御給事　　別所三平

野口左平次

一、右御茶湯に付三日より五日迄普請・鳴物等遠慮。且五日御茶湯濟候後幷六日兩日之内拜參等之觸、右同日出。

一、於金澤も前之通御法事觸等有之。

〔政隣記〕

當五日就御法事、五十人出牢被仰付。

十月五日。石川郡粟ヶ崎村木屋藤右衛門の帶刀をその願に依りて停止す。

〔袖裏雜記〕

粟崎藤右衛門帶刀之儀、御算用場奉行紙面之通可申渡哉之段、十月四日伺之處、伺之通被仰出。

右被仰出之趣、左之通翌五日申渡。

天明四年六月廿九日の條參照粟崎は苗字として用ひたるなり

御算用場奉行ゟ

粟崎藤右衛門儀、今津甚右衛門格被仰付、帶刀仕罷在候處、商方に指支候趣有之に付、帶刀相止申度段願之趣、藤右衛門紙面に各紙面相添被指出候。願之通帶刀爲指止可申候。帶刀指止候へば、最前之身分に相成、御郡奉行支配可被仰付儀と被存候旨、各僉議之通被仰付候條可被申渡候事。

本年十二月の條參照

十月六日。郡方に於ける變死人檢視の爲出張したる足輕に食餌を供給する件に關し令す。

〔御郡典〕

町・御郡方之内變死人等有之、公事場檢使遣候節、檢使幷召連候足輕等ゟ食餌等指出候に付、諸入用失墜多相懸り、末々致難儀候事有之躰に付、先年も申渡置候得共、猶更以來嚴重相心得、食事さへ調候得者事足申儀に候。急度相心得候樣、公事場奉行より檢使等ゟ申渡候條、惣而費之儀無之樣相心得可申事。

附り、都而御郡方廻村、向後右に準じ、村方に而聊も費懸り不申樣可相心得事。

右之通從中將樣被仰出候條、夫々可申渡候事。

別紙之通被仰出候に付、寫相達之候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十月六日　　進士齋宮殿　　御算用場

十月六日。僧徒・醫師等よりの借銀幷に無盡の銀子も亦永年賦辨濟すべきことを命ず。

〔御觸幷御返書留〕

別紙之通從中將樣被仰出候に付、相越之候條被得其意、組・支配之面々に可被申聞候。組等之內裁許有之人々者、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月六日　　本多安房守

諸士幷御家人之分、今般一統借用銀、來午の年より相對を以永年賦申談候樣申渡候處、銀主等之內僧徒類・醫師或者厄介人・浪人躰之者等より、借用主格別之因みを以取組候類ひ、將又打入無盡等与名付候而、賴母子取立申者茂有之躰に候。元來賴母子之儀者御停止之儀候處、心得違之面々茂有之、ゆるかせに相成候躰に候。只今迄之分、借銀同樣相對を以永年賦等に致兼候人々も可有之樣子相聞に候。左候而者、此度一統勝手成立之ため申渡候詮も無之儀候間、如何樣之者銀主等に相成可有之共、借用金銀幷打入出銀等之分迄も、無泥永年賦等之申

政隣記は十二日に作る

談可仕事候間、尙更組・支配之人々に一統可被申談候之事。

十月七日。金澤卯辰日蓮宗妙圓寺等の住持禁牢を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月七日禁牢。

卯辰日蓮宗　妙圓寺
寺町禪宗　遊山院
同　所　開善寺

遊山院とあるは融山院なり

〔政隣記〕

前記七日禁牢被仰付候寺院前洩爰に補出之。

廣昌寺　大圓寺　桃雲寺　大蓮寺　鶴林寺　源性院

十月八日。組外の士脇田伊織、嫡子雄三郎と共に出奔す。

〔政隣記〕

十月八日、組外脇田伊織儀、一昨六日・昨七日・今八日も金谷御殿に被召出、御親翰被成下候處、御請不指上、今夜嫡子雄三郎同道出奔。但御前にも被召出候共云々。且書置有之。其文中國變に付身退与有之抔風說有、不慥。

十月九日。割場役人等音物を受けて依怙贔屓の沙汰を爲すを戒む。

〔政隣記〕

十月九日。

割場足輕・小者風俗近年惡敷相成、棟取候役人觸番等之者共、第一依怙贔屓專に候。無謂音物を受候族に而、譬へば足輕老人共を烈敷勤所ゟ懸渡し、若き丈夫成者を緩なる勤方ゟ懸渡候類多、甚不順之仕形に相成、下々殊之外及難儀候族も有之躰被聞召、彼是不屆至極沙汰之限りに被思召候。奉達御聽にも儀に候得者、奉行不役儀有之間鋪處、見逃し置候段不埒に被思召候。此度諸向右躰之不埒御吟味有之、段々嚴重被仰付候條、以來少分之品たり共音物等之意味を以、依怙贔屓之沙汰有之者、急度被仰付可爲曲事候。此段下々ゟも爲申聞、猶更無油斷致指引、奉行不能了簡儀者夫々急度相咎、不屆之族有之候者卽刻可及言上候事。

十　月

十月十一日。金澤城二ノ丸菱櫓の造營を命ず。

〔政隣記〕

十月十一日石川御門御普請相止、二の御丸菱御櫓御造營被仰出。

十月十三日。諸寺庵の出家に對しその不埒の行爲あるを戒む。

〔袖裏雜記〕

左之御書立添覺書を以、十月十三日寺社奉行へ渡之。

近年諸寺庵之內風俗甚惡敷、誠僧形を取失候族多、別而住寺をも相勤候者等は重き身分に候處、法儀を破り候へば、寺內等之僧徒も彌不愼に押移候事に候。然處甚亂法之輩も有之候儀、沙汰之限に候。依之格別不埒之族は、今般御吟味之上夫々禁牢被仰付候。此外破戒無慙之出家數多有之候。先以恥辱をも不顧、剩法衣を着し、內々にて肉食女犯等致增長、制戒を不恐、勝手次第に相働候儀は多罪之至候。且又其內には金銀を貯、所々ゟ貸付候寺庵も粗有之候。一向有之間敷儀、境界を打忘、利欲至極之事候。彼是不埒之輩、寺號等委細聞召被屆置候付、此上嚴敷可被遂御糺明候へども、先暫御猶豫被成候條、向後急度相愼、聊僧道違失不仕樣、諸寺庵ゟ嚴重に可申渡候。此上不愼之族於有之は、急度可被處罪科事。

十　月

十月十五日。前田重敎足輕の下人を伴ひて徘徊するを禁ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙等之寫扣〕

一、巳十月十五日左之御書立安房守相渡候。

足輕共、男女等不限、下人を召連致徘徊者茂有之躰被聞召候。是又不屆之至に候條、是以後右之族有之候はゞ、夫々支配方より相咎、嚴重可申付候。萬一左樣之者達御聽候はゞ、曲事

可被仰付候樣、中將樣被仰出候條、被得其意、急度可被申渡候事。

十月十九日。前田重敎諸役所に命じて日々の用務は當日中に處理せしむ。

〔政隣記〕

十月十九日。

諸役所其日々々之御用、成限り其日切取捌、日延に成不申樣可心得候。假令夜に入少御費に成申候共、其儀者不苦候條、諸算等者別而早速に可致決算候。其外御用向、其日之分成限り其日切に仕廻可申候。御用多節者早朝より出可申事。

一、諸役所共、從御先代人數多に相懸候躰に而、加人或は手傳人等取申樣子に候。御用多故に者可有之候得共、精誠人少に而御用方相濟候樣可相心得事。

右之趣諸役人嚴重に相心得候樣可申渡旨、從中將樣被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

十　月

右金澤に而者御用番、江戸に而者御家老伊藤内膳殿、夫々に被仰渡候事。

十月廿二日。前田重敎足輕の町並の家屋に居住するを禁ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙等之寫扣〕

一、巳十月廿二日左之御書立安房守相渡候。

組附足輕暨割場附等足輕、組屋敷或拜領地に可罷在候處、近年は町並家買求、多分居住之者有之躰に候間、町並に致居住候者相改、名書可指出与被仰出候事。

右之通從中將樣被仰出候條、被得其意、可被書出候事。

十月廿二日。金澤の上下郊端に於いて磔刑を行はる。

〔政隣記〕

十月廿二日　於上口磔　中村十兵衞養子　中村乙次郎

於下口磔　卯辰日蓮宗　宗榮寺

御馬廻土方勘左衞門家來　近藤九兵衞

九兵衞辭世、道ならぬ道つけられて枯野哉。三返申旨云々。

右之外火付於上口一人、養子殺女於下口二人磔に被仰付。

〔金澤古蹟志〕

右女を犯、破戒之族不屆至極に付、不被及赦之沙汰、追而磔被仰付、尤寺跡破却被仰付。

中村乙次郎の事は本年五月四日にあり　宗榮寺の事は天明三年八月十九日にあり

右女を犯、破戒之族無紛相聞え候に付、於存命者宗榮寺可爲同刑者に候へども、先達而相果候に付、寺跡破却被仰付。

右宗榮寺儀、於公事場禁牢申付置、遂吟味致言上候へ者、落着如此就被仰付、右之通今日申付候。宗榮寺等之寺諸道具闕所有無之儀者、追而可申達候、以上。

巳十月廿二日　　織田主税印
　　江守平馬印
　　原五郎左衞門印
　　松平典膳印

西尾隼人殿
三田村内匠殿
横山又五郎殿

右之通、公事場奉行織田主税等より申來候條、可得其意候。寺諸道具闕所等之儀、別紙之通候條、寺中幷諸道具縮方、猶更嚴重等之儀、組合寺庵ゟ可有御申渡候、以上。

巳十月廿二日　　西尾隼人印

妙成寺

右之通、寺社所より被仰渡候條、可被得其意候。尤寺中縮方之儀、組合寺庵嚴重可被相心得候、以上。

天明六年七月廿六日の條參照

宗榮寺組合中
妙久寺組合中　　妙成寺

十月廿七日。前田治脩引續き明年の參覲を缺き明後年に出府延期を許されたることを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

十月廿七日左之御附札物拜見被仰付。

私領分近年打續損耗に付、勝手向必至と指支、士農工商共及難澁候へども、救方行屆不申、諸人掟も取失候程に相成候付、長救方之所專勤辨仕、掟共元ゟ立戻り候樣に仕度奉存候付、今年參勤御用捨被成下候樣去年奉願候處、願之通被仰出、誠以難有仕合奉存候。依之夫々仕置等申付候。元來去年相願候節、重而之順年に參府致度趣奉願度内願には罷在候へども、先例も無之年延之儀故、恐入指扣罷在、尤大概は一年御用捨被成下候はゞ仕法等立戻可申と種々相考、先達而之通相願候處、今以全は行屆不申、今一ヶ年も在國仕候はゞ大躰仕法も行屆

可申哉と奉存候。左候へば自ら人氣もおだやかに相成候へば、誠安心至極仕候。去年結構被仰出候上、又候奉願儀は甚恐入候へども、相成申儀に御座候はゞ、來午年之參勤御用捨被成下、是迄之順年之通、來々未年春參勤仕候樣被仰出候儀は相成申間敷哉。每度ヶ樣之儀奉願候儀も自由ヶ間敷樣に而、迷惑至極奉存候へども、仕置等今少に相成行屆不申內出府仕候而は、又候立戻人氣も惡敷相成候而は、先達而今年參勤御用捨奉願、願之通結構に被仰出、是迄仕置等申付候詮も無御座罷成候付、重疊至極奉恐入候儀には御座候へども、右之譯合故誠に難默止又候願候、以上。

八　月　　御　名

御付札

格別之譯を以、願之通來午年參勤も御用捨被仰出候間、來々未年春中可參府候。

十月廿七日。新に藏縮によりて借銀せんとする諸士に融通を計るべきを諭す。

〔政隣記〕

御家中諸士年々勝手難澁相重り、勤仕にも指支申程之者も有之躰兼々被聞召、御救も可被仰付候得共、當時御上にも御難澁至極に付其御沙汰無之。依而借銀方ゟ相渡置候藏縮相解き、返濟方永年賦に而相返候樣被仰出候得共、過半本納も拂置、當時調達出來兼、來年迄之取續之手段無之人々も有之躰に被聞召候。今般借銀方ゟ相渡置候藏縮解き被仰渡候故、是以後藏縮慥に不存、彌相泥候躰に候。此度諸士心得・暮方等之儀、嚴密に被仰出事に候間、改而藏縮を以調達候者共、身上相應之銀高、只今迄勝手方致仕送好しみ之者は別而之儀無泥、新たに調達申談候者も、隨分用事相辨候樣可申渡候。改而藏縮渡し置、來七月に至返濟方不埒之者於有之者、急度御糺可有御座候間、又差引之者有之候者、各ゟ相達候上、尙更遂詮議可相達御聽候。此所致心服、相應之銀子取替候樣可申渡候。御上御調達之儀者最早不被仰渡候間、此段も可申渡旨從中將樣被仰出、夫々可被申渡候事。

十　月

別紙之趣可被得其意候、以上。

十月二十七日

右御用番より御觸出有之。

是月は大盡なり

十月晦日。前田重敎足輕の組數等を定めしむ。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙之寫扣〕

一、巳十月晦日左之御書立土佐守相渡候。

割場附組數之儀は、前々より組數幷一組之人數高茂不相極、先近年は五十六組に相成居候由。一組に小頭幷足輕共二十二人充に仕、五十組に可相極候。當時右之圖りに而は人高相揃不申候はゞ、先二・三組明組に可致置候。右之通に相成候而は、人數八九十人計不足躰に候。此内當時病死代廿三人有之由。此分追而可被召抱候。

一、足輕・小者江戸交代等之儀、是迄年寄中詮議も有之候得共、以後は交代指遣候節、割場奉行より紙面を以相達次第被承屆候樣被仰出候。右之趣に付、割場奉行等下々之事而已相いとひ、御不益を以不願仕形於有之は、奉行幷棟取役之者共越度に可被仰付候。若棟取役之者詮議之趣奉行聞屆不宜儀有之候はゞ、棟取共より可申上候。若左樣之儀於不申上は、嚴敷御咎可被仰付候旨、割場奉行ゟ被仰渡置候。

諸手合足輕共之内勤功に依而、其先々より相願小頭に被仰付候者も有之候。左候而は割場向にて指支候趣有之候間、以後は小頭に被仰付候樣相願候節は、割場奉行ゟ示談之上相願候樣可仕旨被仰出候間、何れより相願候共割場奉行ゟ示談、否致詮議候樣被仰出候事。

十　月

十月晦日。百姓等藩の收納米を上納する方法に關して告ぐ。

〔御條目等書上帳〕

今般御改法に付、諸郡御收納米步入納方之儀に付、先達而申渡候通、嚴重に可相心得候。右に付百姓居村より御藏所迄三・四里も相隔、頃日諸方より御藏所ゟ持懸候處、及數百石に納方手餘、遠路之者は別而持運候内時刻も相移り、其日之内御藏納不得致、無據御藏邊往來土之上に積置、米主夜番等致候間、悉く難澁之樣に相聞候事。

一、右之通土之上積置候而は、雨天之節濡俵等相成候而は、御米之障に相成候事。

一、持付候御米、其日時刻移、御藏納不致候節者、御藏所近邊に候者預置、御藏納之節尤米主相斗立、嚴重に可相納事。

一、右預米賃之分は三合・五合を限り、又は鳥目に而相拂候共、右割合を以可致相對候事。

一、右米預候儀は、村々肝煎共等示談之上、實躰成者共方ゟ指預け可申事。

一、右之者共難預り樣子茂有之候はゞ、指支等之分承糺、支配先役人共ゟ及斷可申事。

一、右預り候節、其身は勿論、家來共出入末々之者迄、米に麁抹無之樣、是又嚴重に可相心得候事。

一、只今迄御米預り候者之内、心得違之者多、不埒至極之儀共取組有之躰も相聞居申候得ば、以後ヶ樣之相對を以取組候者於有之は、急度咎可申事。

一、只今迄御收納御藏番等之内にも、預り米致候者有之躰に候。元來ヶ樣之族は嚴重に咎可

申付事。

右之通諸郡一統申渡候に付、寫相達之候條、被得其意、若百姓共より米預申度相願候者、預候之樣可被申渡候。是迄預米等之儀に付、種々取組等之趣有之、甚不埒之族共有之段相聞候間、以後預ヶ米致候者共、右等之趣無之樣嚴重可被申渡候。若違失之族於有之は、急度可相糺候間、違亂無之樣申渡可被置候、以上。

十月晦日　　御算用場

野村次郎兵衛殿

十月。前田重敎、鷹匠及び餌指の地方に出張するもの不法の行爲あるを戒む。

〔政隣記〕

御鷹匠　御餌指

右就御用遠所町・村々ゟ巡行之砌、旅宿に而不厭費不法之振舞有之躰、不時成人夫を多く取、不可然候。致止宿候共、食事さへ相調候得者事足り申儀に候處、不心得至極に候。向後急度相改め、村々致邪魔候族無之樣に夫々可申渡候事。

右之通從中將樣被仰出候。

十月。前田重敎、諸士の子弟を陪臣の養子たらしめ又は陪臣の娘と婚するを禁ず。

〔政隣記〕

左之通御馬廻組頭・御大小將組頭ゟ、從中將樣被成下候御親翰寫也。

家中三品之次三男・弟等、陪臣之者ゟ養子に遣候儀、親類之筋目有之者は格別、筋目茂無之者を養子に遣候儀は有之間敷儀に候。且又陪臣者之娘を緣組申儀茂同意味に候。右之內に者拵料抔与言立、內々に而銀子請候族茂有之躰に候。譜代之仁仁爲子弟共、年寄共等を主人に致し奉公致度志し、正誠とは不存候。先例有之候共、向後養子・緣組共に、筋目無之與陪臣之者申合候儀有之間敷、此段各心得のため申聞事。

天明五乙巳十月中　　北藩

右之趣侍支配有之人々ゟ傳達之儀被仰出、則右兩組頭より夫々申談。

附、右之通に候而者、小身之人々抔指支之趣就有之に、與力与緣組申合候儀者、享和年間より不指支事に相成。

三品とは馬廻組定番馬廻組組外組をいふ

仁々は人々

十月。借銀返濟の保證として交附したる米切手を債權者より米仲買に賣渡すを禁ず。

〔政隣記〕

御家中之人々借用銀返濟方爲引當相渡置候米切手之儀、返濟之期に至り借用主指圖を不待、銀子貸主或は口入之者向寄之米中買ゟ申談候得者、米賣拂候躰に相聞候。爲米中買共不埒之儀に候條、右躰之米切手取扱候者有之候者急度相糺、借用主より渡置候切手不殘取上、給人々々ゟ被下可相返候。且又前段之通之米切手賣拂候儀、甚不屆之至に候間、銀主等可爲損分候事。

十　月

右之通中將樣より被仰出候事。

十月。前田重敎、小將組の士の勤務に關して諭す。

〔政隣記〕

今月□日御小將頭不殘中將樣御前ゟ被爲召、段々御意之上、左之通御書立御直に御渡之。

大小將組之儀者、他組に違勤方も色々多有之、江戸表第一御公界向も專相勤、彼是規模有る組格に候。就夫自跡々、新に御大小將組被仰付候者は、古參之者に馴合、勤方情に入承合相習申振合に候。依而心得惡敷者は、古參之者より加異見引直し、御奉公勤馴候樣敎へ可遣事に候。然處其内に心得違之者有之候得者本意を失ひ、新參者之不案内を誘り、中には筋違ひたる振廻も有之、不計增長致候得者不法之族も出來、理不盡に食餌抔進申者有之。左樣之扱ひに逢候者之内、生質虛弱之輩は、氣分之障命にも障申程に至儀も有之躰に被聞召。自前々之組格意味合、今般格別改候樣にとの被仰出に而者無之候得共、若輩之者共興に乘り本を失ひ、不法に至候得者不可然候間、組頭急度相心得可有指引事。

一、近年江戸詰之内、仲間之外諸役人等ゟ右躰之振廻も有之躰に被聞召候。此儀者不埒之至、前々者曾而不聞召儀に候條、是等之類急度相慎候樣、嚴重可申渡事。

天明五乙巳十月中　　北　藩

右に付組々頭宅ゟ相招、左之紙面曁口達を以も申談有之。

今般拙者共中將樣御前ゟ被爲召、別紙之趣御意之上御直に御渡、拙者共迄段々被仰出之趣も有之候。御小將組之儀者、他組与違勤方多、第一御公界向專に相勤、彼是規模有組格之旨被仰出、誠に以結構之御書立、御用意忝儀御座候。是迄も御書立之通に可有之處、何となく猥りに相成、愼等之儀も相ゆるみ、行屆不申儀共有之、就中新御小將被仰付候節參會申談等之

儀者、數度申談置候儀に付、今更格別不及申談事、御書立之通り急度可被相心得候。將又新御小將被仰付候節、心得違之人々は理不盡成振舞も有之、江戸表に而外諸役人等わも右之族有之樣子も被聞召候段被仰出候。此儀者江戸表にも不限、心得可有之事に候。今般借銀方等結構に被仰付候上、勝手取續無謂指支、御奉公に相障り候而者申譯も相立申間鋪候條、此處は人々覺悟可有之儀に候。左樣に候得者、平生内輪暮方可成長ヶは儉約有之、誠に質素に可有之候。各にも粗承知之通、御上御勝手向御指支之御時節に候間、組當り之御用向被仰渡候砌、不時借用物願等は必相成間鋪候。然者此度者大切成所に候間、萬端之儀に付被仰渡之趣具に被奉承知、是以後急度相慎可被申候。裝束等之儀も近年數度之被仰出有之儀、彌嚴重に麁服可被相用候。今般之被仰出者別而格別之趣に付、猶更拙者共存寄之趣申渡候間、相互に被申合、聊無油斷可被相心得候。且又儉約專に被仰出候間、容易に參會等不仕、質素之形第一に候得共、人多に相集候儀を遠慮仕、武藝稽古等も相止候樣之心得に罷成候而者致相違候間、稽古之儀者隨分相勵、勝手取續之上相應に武器等相嗜候儀者、尤之心得与被仰出候。將又御家中三品之二三男・弟等、筋目無之陪臣わ養子に差遣候儀、緣組之願も右同樣、曁緣組之節拵料等申立、内々に而銀子取受候抔有之間敷儀、是以後右之族一向無之樣、改而急度申渡候樣、拙者共迄被仰出候條、以後右示談等之儀堅難相成候條、此段も申渡置候事。

村替の手續終了は天明六年九月二十日に在り

巳　十　月

右之趣於江戸表も、御小將頭溝口七太夫殿於御小屋、夫々相招申談有之、十月二十九日也。

十月。能登に於ける幕府領一部を加賀藩領と交換することを許可せらる。

〔能州公領地等之留〕

能登國之内御預所羽咋郡千路村等都合八ヶ村之儀、私領村々入交有之、國中難取縮候に付、其領分村々と村替之上、千路潟とも其領分被致度。尤千路潟之儀は先達而公儀新開之御吟味も有之、往々何程之御高合に可相成難被察候得共、右代知之儀は其領分羽咋郡・鹿島郡之内水旱損等無之村柄宜敷場所を以見立、三千石以上御物成米千五拾石餘充御收納可有之候新田、自分入用を以相仕立被指上候積り。右新田成就いたし候迄之内は、其領分右兩郡收納米之内を以年々千五拾石充、風水旱損等其外不作之年柄に不拘、潟之内代米として被相納、右代米は御預所村々皆金納定石代之振を以、其年々之直段に成共、又は五ヶ年平均直段に成共金納被致、前書新田成就之上右地所被指上、金納は其砌御免有之候樣被致度段被相願候。右之通御預所村々領分入交、國中難取縮候段、格別之趣を以願之通相成、御村替被仰付候。潟内は代官米として千五十石充石代を以年々上納被致、尤自分入用に而被仕立新田致出來代知被指

上候はゞ、其節代米御免之御沙汰可有之候。委細之儀御勘定奉行より可被談候。

十　月

〔能州公領地等之留〕

天明五年御領所之内御村替之事。

御上り知十七ヶ村

羽　喰　郡

尊保村　阿川村　楚和村　鵜野屋村　灯　村

入釜村　地保村　切留村　豊後明村　神子原村入會

福水村同

鹿　嶋　郡

谷内村入會　別所村同　田岸村同　深浦村　外　村

黒崎村

右十七ヶ村古高

〆千九百九十六石五斗

去る子より辰迄五ヶ年平均物成

〆四百三十六石六斗三升四合六勺

但定納也

辰年見所米

〆一石七斗

同小物成銀

〆一貫百七十四匁

但山役・苦竹役・炭竈役・舟械役

米に直し五十八石七斗

但、銀一匁に付代米五升

御物成詰米高

合四百九十七石三升四合六勺

外、夫銀口米は免圖御物成詰に入不申由。

右御代り知八ヶ村

羽　喰　郡

千路村　中山村　上棚村　二所宮村　町　村

安部屋村　佛木村
右八ヶ村高
〆二千百八十七石六斗九升五合二勺
去る子より辰迄五ヶ年平均物成
〆三百九十八石一升四合
辰年見取米
〆九升
同年小物成
〆五十一石五斗六升八合
同小物成永
〆三十七貫八百七十文九分七厘
但、高役・棟役・舟役苦竹役・獵師鐵炮運上・室役・肴役・鹽釜役代永・酒造冥加永米に直四十七石三斗三升八合七勺
但、永一貫文に付代米一石二斗五升五升
御物成詰米高

合四百九十七石一升七合
右御村替願通、天明五年十月御聞濟御下知有之。御代り知御上げ村等之儀、同六年秋迄に双方御引渡決着仕候也。
但、御主附御改作奉行高畠勘兵衛殿・御預地御奉行遠藤次右衛門殿御改作奉行兼帶也。

十一月朔日。前田治脩、幕府が來春の參覲を廢するの請を許したることを諸士の頭分に告ぐ。

〔政隣記〕
十一月朔日、一昨日御用番安房守殿依御廻文、今朝頭分以上登城、御帳附候以後、於柳之御間御年寄衆等御列座、御用番大隅守殿左之通御演述。依之爲恐悦各御用番ゟ參出。
去年御願之趣に付、來春御參勤御用捨、是迄之御順年之通、來々未の年春中御參府被成度旨御願被成候處、前月十七日以御付札、御願之通被仰出候。先以重而御用捨之儀、重き御事に候處、別而難有被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候。
右御禮之御使、御小將頭多田逸角ゟ前月二十八日被仰渡、明二日發、十三日江戸着。

十一月二日。明年より儉約勵行以前の例に復し年頭拜賀の際長袴の着用

を命ず。

〔政隣記〕

十一月二日、來年頭御禮被仰付候節、五ヶ年以前之通、是以後長袴着用可仕旨從中將樣被仰出候段、今日御用番より夫々被仰渡。

十一月三日。戸田與一郎の流刑を赦免す。

〔袖裏雜記〕

戸田與一郎流刑御免可被成旨、十一月三日被仰出申渡左之通。

覺

戸田與一郎

右與一郎儀、不屆之趣多有之、流刑被仰付置候へども、爲赦流刑此度御免被成候旨、中將樣より被仰出候條、此段可被申渡候。尤御城下ゟ罷出令居住候儀、勝手次第之旨可被申聞候、以上。

乙巳十一月

長大隅守始十三人　連印

淺井源右衞門殿

追而與一郎、親類等より家來迎に遣可申候間、其者ゟ可被相渡候。此儀は重而可申達候。先御免之段可被申聞置候、以上。

組外御番頭ゟ

戸田與一郎

右與一郎儀、不屆之趣有之、流刑被仰付置候へども、爲赦流刑此度御免被成候旨、從中將樣被仰出、則其段淺井源右衞門へ申遣候間、戸田傳太郎等へ可被申聞候。且又右與一郎爲迎、家來等彼表へ可差遣候間、誰罷越候段可被申聞候。其節淺右衞門等へ之紙面可相渡事。

十一月

十一月五日。明年より諸士互に新年を祝するの儀禮を行はしむ。

〔政隣記〕

十一月五日左之通御用番大隅守殿御廻文出。

御勝手御難澁に付、安永九年より五ヶ年之間嚴敷御儉約、右年限相濟去年又候五ヶ年中御儉約被仰出、右最前より年頭勤無之樣被仰渡候處、年始之儀は上を祝し相互に勤合候儀、左のみ費之筋にも不相成候儀之處、不相勤儀者中將樣不叶思召候。來年頭より如先規、隨分年頭嘉儀相勤候樣被仰出候段御觸有之。

十一月十日。前田重敎諸士の子女に書道を學ぶべきことを諭す。

定番頭ゟ

御家中諸士之子共男女とも、手跡隨分爲相習可申、調筆達者に候得者いづれ之爲にも宜、後に御役儀相勤る節茂指懸り御用之辨にも相成候。於御國は江戸表と違、婦人に手跡宜者稀なり。女子之分別而せり込可申候。男子は武藝稽古も爲習可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配有之人々等ゟ可被申談候。且又組等之内――。

巳十一月十日

十一月十二日。前田重敎諸士に親類と縁類との用語の相違を示す。

〔政隣記〕

十一月十二日

親類、父方續之者。

縁類、母方續之者。或は縁者。

親類与縁者之差別右之通に候。御家中諸士養子・縁組等願書附、双方續無之分は、何某儀親類・縁者に而無御座与相調候儀者隨分相聞え候。いとこ違又いとこ之續之儀も、是以後其名目書顯可申候。譬者何某儀親類に而いとこ違、或縁類に而又いとこ、遠き親類又は至而遠き縁者与書加可申候。此段一統可被申渡候事。

右之通被仰出候段、御用番被仰渡候由定番頭廻狀出。

十一月十九日。定番御馬廻小野木左門遠島に處せらるべきことを知り出奔す。

〔政隣記〕

一、十一月十九日定番御馬廻池田與左衞門組小野木左門、不行狀等に付遠嶋被仰出候段之御覺書、頭與左衞門ゟ御用番御渡に付、如例與左衞門より左門一類共ゟ迄及内談可申渡處、其沙汰左門承之、同日出奔。與左衞門宅ゟ相頭并御横目等立會、爲御用罷越有之處、彌左門出奔之躰に付、各今朝に至退散。

附、左門儀十二月三日盗賊改方手合足輕共於越前福井召捕來候に付、改方御用松尾縫殿より奉伺候處、於公事場禁牢与被仰出、則公事場ゟ引渡有之。

十一月廿一日。前田重敎諸組・支配の行狀に付善惡共直に言上すべきを命ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙之寫扣〕

一、巳十一月廿一日左之御書立大隅守相渡候。

諸組等より組・支配等之者共之行跡心得等、善惡共少茂不指扣可申上候。惣而何ぞ事に寄せ御尋も有之候得ば、申上候形茂相見え候。是は頭等心得不宜候。遮而可達御聽候。譬ば二十ヶ年餘或三十ヶ年皆勤等いたし、御奉公精に入ながく相勤候者等は、別而時を不待可申上、是以後延引有之候はゞ其頭可爲越度候。此趣夫々可被申渡候事。

右之通被仰出候事。

十一月

〔政隣記〕

十二月廿二日、諸頭等より、組・支配之者共行跡心得等、善惡共少も不指扣可申上候。且又二十餘年或三十餘年皆勤之者、早速可達御聽候。早速相しらべ、輕き役人にても數十年實躰に相勤候者は、皆勤に而無之共達御聽候樣被仰出候段、去十三日御用番被仰渡候旨、定番頭廻狀有之。

十一月。窃盗の罪を犯したる者はその輕重に拘らず出牢の際入墨を施すべきことを令す。

〔政隣記〕

圖略す

今年前月左之通公事場奉行に被仰出。

盗賊之者罪之輕重によつて、死刑或は二三ヶ年又は百日・五十日禁牢之上指免申儀、前々其通に候。赦免之上重而致惡事候而も、年月立候得者不相知儀も可有之、旁小盗たり共出牢之節向後致入墨、其上に而赦免可申付事。

右之通被仰出候條、可被得其意候事。

乙巳十一月

右に付入墨圖左之通極る。向々より金谷御殿に持參、佐々木孫兵衞等を以入御覽。

十一月。前田重敎の命は單に被仰出といひ治脩の命には特にその名を書せしむ。

〔國事雜鈔〕

中將樣より被仰出等之分は、都而被仰出・被仰渡与迄相調。

加賀守樣より被仰出等之分は、御名相調可申候。

右之通被仰出候條、此段諸向不相洩樣、夫々迅に可申渡候事。

巳十一月

十一月。諸士の縁組は豫め内意を伺ふことを要せず直に前田重教に願書を提出すべきを命ず。

〔國事雜鈔〕

頭分以上前々縁組前伺書付、年寄中ゟ相達候へ共、以後者右前伺之儀半切紙面に調、佐々木孫兵衛は前田主教の近習孫兵衛等ゟ指出可奉伺旨、前月被仰出候へ共、向後御家中一統縁組不及前伺、本書附を以可奉伺旨、重而被仰出候事。

但、與力御歩並之者は、右書付中折横二つ切に仕相伺可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十一月

十一月。前田重教頭分の士その職を辭するときは嫡子を馬廻組に列せしむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

頭分被仰付置候者、老年或病氣等之依願御役御免被仰付候者、何れも重き御役被仰付置候處、右之趣に而御斷申上候儀心外に可存候。依之右御役御免之頭分嫡子、御馬廻組ゟ打込御番爲相勤可申候。但、役儀被指除候頭分之嫡子も、右之通可申渡候。

右之通夫々可申談旨被仰出候條、被得其意、嫡子年來等之儀可被申聞候事。

年來はとしごろと訓み年頃なり

十一月

十一月。前田重教江戸に於ける消防夫の器具服裝等給與方を嚴重にすべきを告ぐ。

〔政隣記〕

江戸表火消役御小將ゟ

江戸表御近隣、火消出火之節御人數押出、火元被手懸候砌、火消道具品々損物紛失之品前々多有之躰に候。蔦之者等着束之儀も、大火之節者猶以之儀、小火に而も押出手懸候度々取替紛失之品多有之段、相知候通に候。手懸候度毎取替相渡候儀、外々大名方抔に無之事に候。是以後火消役之御大小將、何も損物等見分之上取替可申候。小頭等ゟ嚴敷申渡置、取替不申而不叶品者各別、無故紛失損物等之品者、綿密に遂僉議、一品にても御不益無之樣相心得、惣人數ゟ急度可申渡事。

着束とあるは服裝なり

十一月

付札、火消御小將ゟ

別紙之通被仰出候條、可申渡旨御用番より申來候。各可被得其意候事。

巳十二月

十一月。日蓮宗宗榮寺・妙久寺破却を命ぜられたるを以てその檀那を同宗内の他寺に轉ぜしむべきことを諭す。

〔例格拔書〕

瀧谷妙成寺ゟ　　日蓮宗卯辰　宗榮寺

同宗　同斷　妙久寺

右二ヶ寺令破戒、依御刑法寺跡破却就被仰付候、兩寺旦那、宗旨之内向寄之寺ゟ旦那成儀、可爲勝手次第事。

一、兩旦那交名帳差出可申事。

一、右旦那向寄之寺院ゟ片付候者、寺旦納得之趣、其寺々より書付を以斷を立可申事。

右之趣被得其意、帳面等早速可有御指出候、以上。

妙成寺は觸頭なり

本年十月廿二日の條參照

乙巳十一月

十二月朔日。年寄奥村主水を能登島配流に處す。

〔異本三守御譜〕

十二月朔日、國老奥村主水隆振を能州嶋之内配流可被仰付旨被仰渡。是先九月晦日同人逼塞被仰付、先達て御加增被仰付二千石被召上、今茲此所へ至る。然所十二月二十六日同人三男左京儀、故内記爲跡目新知六千石被下、人持組に被仰付。左京道て國老御加判被仰付。

此時長大隅守殿、主水宅へ被罷越御申渡也。細井彌三郎養父金左衞門、其時大隅守殿供役にて二御丸より夕方直に被罷越、何と言事不知、暫有りて女中大勢にて鳴聲聞えし由。間も廣く奥へも餘程可有之所、大勢ゆゑか聲聞えしと咄之由、彌三郎申聞。

此一件は其頃沙汰あり。木屋藤右衞門と申談、御國米を遠所へ被指出と言。飢饉にて米直段其頃高貴、他國は彌增高貴也。洩れ米之儀毎度御算用場より申出、尤被仰出もある最中誠不埒成儀と言。近頃も古老八十有餘の老咄、其頃之沙汰尤前段之通与言。尤此儀者表向不知、只沙汰を記す物也。木屋藤右衞門は粟ヶ崎村にて、親藤右衞門へ御扶持被下置、當時藤右衞門へも親同事御扶持方被下置、明和八年五人扶持御引足被仰付、都合十人扶持頂戴仕罷在候。然所藤右衞門儀、十村淵上村源五郎組下に罷在候間、藤右衞門一代御郡奉行直支配に仕、十村並に被仰付、十村同事に御目見も申上候樣に被仰付候者難有可奉存、尤前々より結構被仰付置候

木屋藤右衞門の處分は天明六年八月に在り本文奥村主水の流謫と關係ありたりとするは誤なり

儀に御座候得共、一兩年別而御用筋入情に相働申者之儀に御座候間、私共僉議之上奉願候段、可相成儀に御座候はゞ右之通被仰付候樣仕度奉存候与、安永二年五月御郡奉行木梨助三郎・奥村左太夫より相願候處、同十月粟崎村藤右衞門親以來御扶持被下置御用相立候者に付、藤右衞門一代御郡奉行直支配に仕、十村並被仰付、十村同事に御目見も被仰付候樣仕度奉願旨木梨助三郎等紙面に、御勝手方・改作奉行・御算用場奉行にも、右之通被仰付候樣奉願旨紙面を添指出候に付、其段達御聽にも、願之通被仰付候條可申渡旨被仰渡候。然所此時禁牢被仰付、後牢死す。主水殿は追而嶋より御呼返、無程死す。實は自害と云。

十二月三日。江戸に於いて年頭諸禮式都べて舊に復することを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月三日、來春より年頭御規式等、都而五ヶ年以前之通与被仰出候段、今日夫々ゟ伊藤内膳殿御申渡。於金澤も御用番夫々被仰渡候段申來。

十二月十一日。前田重教亦來年頭の謠初を復舊すべきことを命ず。

〔政隣記〕

十二月十二日、左之通昨十一日於金澤被仰出。

來年頭より御謠初御規式以前之通被仰付候段被仰出候旨、御用番御覺書を以、御表小將御番頭、御大小將御番頭ゟ被仰渡。

十二月十一日。前田重教諸士の希望により銀子を貸與すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十二日。左之通昨十一日於金澤被仰出。

一、今年一統借銀方結構被仰付候得共、右に付御家中取續町才覺銀等不調達之儀被聞召、可致難澁候間、御才覺銀を以少分爲取續御貸渡可被遊旨被仰出候間、借用有之度人々者別紙證文草案之通相調之、百目に付三石五斗宛之拂切手、來二月十日切人々頭々ゟ差出可申候。只今銀子受取候節者、右證文まで爲持受取人可指出候。銀高之儀者其頭々ゟ直に承合可申旨等、頭々より申觸有之。

覺

一、何百目　　文丁銀

右今般爲取續、御才覺銀を以御貸渡受取申候。一ヶ月百目に付一匁五分宛之加利足、來七月七日切上納可仕候。引當拂切手之儀、來月十日切指出可申所如件。

天明五年十二月　日　　誰　名判

頭　　殿

十二月十六日。大聖寺藩に横目として派遣せられたる御先手物頭小川七左衞門不埒を以て閉門に處せらる。

〔政隣記〕

十二月十六日

役儀被指除閉門　　御先手物頭　小川　八左衞門

於大聖寺町人集、其上銀子借受、返濟方不埒之趣有之、重き御縮方に被遣候處、不屆之旨被仰出、如此被仰付。

十二月廿一日。原五郎左衞門知行を增し人持組に編入せられ、若年寄に補せらる。

〔政隣記〕

十二月廿一日。

一、千石御加增　　人持末席公事場奉行

都合二千二百八十石　　原　五郎左衞門

本年九月十九日の條參照

五郎左衞門儀、十歳之節より今年迄五十ヶ年餘入情に相勤、江戸詰も度々、公邊御用他國御使等其外品々重き御役共相勤、勤功過分に思召候。仍而人持組入、當分年寄中御用番支配に被仰付、千石御加增被下之。及半白大儀に思召候得共、若年寄役に被仰付候條、萬端無泥可相勤旨被仰出候。名禪正与改候樣被仰出。

十二月廿二日。前田重敎來年頭に於いて頭分以上の拜賀を受くべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿二日。

中將樣來年頭若年寄以上獨禮被爲請、頭分以上座付之御禮被爲請候段被仰出。但平士以下御禮不被請段も被仰出。但右に付御奏者幷披露役、御大小將最初金谷御殿ゟ出相勤、右相濟二之御丸ゟ罷出相勤候筈也。

十二月廿七日。諸士の意見言上は之を前田重敎に提出すべきを命ず。

〔政隣記〕

十二月廿八日、諸方一統言上封物、是以後金谷御殿ゟ可指上候。二之御丸ゟ不及指上候段、昨

廿七日被仰出候旨御横目廻狀出。

十二月廿八日。諸士の改名は舊名の一字を用ふべきを諭す。

〔政隣記〕

十二月廿八日、向後名替願、可成たけ只今迄之名上之一字用可申旨被仰出候段、幷諸役懸り同役同名は紛敷候間、早速改名候樣被仰出候旨、御用番被仰渡候段、定番頭廻狀出。

十二月廿八日。是日以後諸士の心得に關し誓文を徵す。

〔政隣記〕

十二月二十八日より御馬廻組・定番御馬廻組・組外ゟ誓詞血判被仰付、頭々於宅見屆之。

起請文前書

一、對御上御後闇儀聊以仕間鋪、御尋之品不依何事有躰可申上事。

一、忠誠・忠義・忠孝片時も不怠、自之行尤甚慎、御恩を忘れず、御奉公情に入大切に勤可申事。

一、諸事御法度之御定を急度相守可申候。無禮緩怠無之樣可慎事。

一、武藝勵、專ら遊樂・好色・過酒抔相慎、少も分限を取失はず、奢侈之儀聊無之樣相心得可申事。

淑は能なり

一、勝手向之始抹放埒無之樣相心得、家内を可治。且夫子弟之儀隨分成立、淑御用立候樣育可申事。

一、兄弟等多有之、其内不心得之者出來、色々異見加見候得共不嗜時、速頭・支配ゟ書附を以相斷可申事。

一、相撲幷尺八之類好儀一圓有之間敷、左樣之餘力は武藝に相用可申事。

一、殺生抔に而山河を渡り身固候儀者可有御座儀、乍去御留場抔ゟ入込いたづら致し、御上之御目をぬく事堅致間鋪事。

一、輕き者共に對、無法之爲躰無之樣常可心得、萬端に我意を立申儀有御座間敷、別而金銀米錢指引合之儀、不埒等無之樣可相心得候事。

右條々若雖爲一事存昴、於致違犯者。

昴本のまゝ

神文

牛紙に而。

今般誓紙被仰付候御趣意者、近年御家中人々之内群集之場ゟ立入、或は御鷹場に而鳥を捕、其品を賣拂、遊樂に誇、不屆之族有之人々、此度嚴重に被仰渡候儀、各承知之通に候。以來不法之筋增長無之、何茂急度相改候樣被思召候に付、今般誓詞被仰付候。右躰之惡事無之、相

慎罷在候者は多有之候得共、人別に不被仰出儀者思召も有之候。組柄輕き御家人・與力等にも不慎之者も有之候得共、三品以上之儀誠に格別に被思召候に付、各ゝ分而先御内意被仰出候。とくと組々人々意得仕候樣可申聞候事。

十　二　月

附記半紙。

天明五年以來各ゝ誓詞血判被仰付候得共、是以後新入之面々は、右誓詞之儀當分被指止候。追而血判被仰付之儀も可有御座候。毎月一度宛組中頭之於宅に御前書讀聞、無忘却急度可相守趣御請に判形取置候儀者、可爲是迄之通候。右判形之御請、以來毎年二月・七月兩度可入御覽旨今般被仰出候條、可被奉得其意候事。

癸亥七月　　頭　名

各　御　中

十二月。先に磔刑に處せられたる妙久寺及び宗榮寺の寺號を繼續することを許す。

〔例格拔書〕

一、卯辰妙久寺・同宗榮寺兩寺共女犯肉食、右依破戒其身磔、寺跡破却就被仰付候。瀧谷妙成寺より右人々御刑法被仰付候儀者格別、何卒寺號被下候樣被相願候處、顯之通兩寺號被下候事。

本年十月六日の條參照

御覺書寫

西尾隼人等ゝ

日蓮宗卯辰妙久寺・宗榮寺儀、死罪被仰付寺跡破却被仰付候處、寺數減少仕候儀迷惑に奉存候間、右兩寺號被下置候樣仕度旨、頭寺妙成寺願紙面、各添紙面を以被指出、相達御聽候處、右願之通兩寺號被下置候段被仰出候條、其段妙成寺ゝ可被申渡候事。

十二月。變死人等の檢使の爲出張する者の心得を諭す。

〔公事場御定書〕

町・御郡之内變死人等有之、公事場檢使遣候節、檢使幷召連候足輕等食事等指出候に付、諸入用失墜多相懸り、末々致難儀事共有之躰に付、先年申渡置候得共、猶更以來嚴重相心得、食事さへ調候得者事足り申儀に候間、此旨急度相心得可申事。

附、浦方廻り罷越候者も右に准、宿々に而費懸り不申樣に可相心得候事。

右之趣天明五年十月被仰出候に付、公事場より改而町奉行初諸奉行へ、檢使幷足輕等へ食事指出候節、誠に食事之防迄に輕く湯漬飯指出候樣等、安永九年相觸候通に候得共、今般就被

仰出猶更嚴重可相心得。且又變死人一卷諸入用打込、檢使入用与申立候躰難心得候間、以來は檢使之者賄方入用与、變死人入用与、其譯はきと相分候樣可致、檢使所に無用之役人等不罷出樣可申渡旨等相觸、御家中に茂左之通年寄中より申渡候。

付札、定番頭に

變死人有之公事場より檢使指遣候節、於先々時刻移候得者、檢使幷足輕等へ食事指出候節、入用過分に相懸り候趣。畢竟無用之役人等爲取持相詰罷在、檢使入用幷變死人入用打込候故、檢使入用過分に相懸候躰に相聞、混難致候間、以來兩端之處相分候樣致度旨、公事場奉行申聞、則右奉行より町奉行等へ申達候紙面等も指出候に付、相達之候條被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々は、其支配へも申渡候樣可被申談候事。

天明五年十二月

舊臘は天明五年

十二月。割場附足輕の宛行を大槻内藏允の施政以前に復す。

〔政隣記〕

足輕宛行割場附之分最前より二十俵宛之處、大槻内藏允御用取嘲之砌より二俵宛減之、十八俵に相成、内藏允退候後、病死跡被召抱或は立替等被召出候者に者、如先規二十俵被下候得共、長命に而未だ存生相勤有之者共者、今以十八俵に候處、舊臘被仰出、一統二十俵宛に御引足被下之。在江戸之者に者其段今日被仰渡有之。

今日は六年正月十四日

十二月。横井元泰等三人に、醫師を統べてその學術を授くべきことを命ず。

〔御觸並御返書留〕

横井元泰
端丈庵
八十島壽三

御醫師家業心懸候儀勿論之事に候得共、人々無間斷相勵不申而者先以病人虛實も相分り不申、第一人命を救申儀に候へば大切之至り候間、右元泰等三人に醫道稽古之指引被仰付候條、御醫師曁町醫者も醫業專情入、御用に可相立者撰可申候。内經・素問・靈樞等之講習を相立、一ケ月三度充右宅に寄合修行可仕旨被仰出候。御醫師中夫々可申渡事。

天明五乙巳十二月

天明六年

正月朔日。前田治脩年頭の賀を二ノ丸殿に受く。

二之丸御殿は前田治脩

〔政隣記〕

一、頭分以上五時より登城二之御丸於御式臺御帳に付、四時過檜垣之御間に御出、御年寄衆・御家老衆・若御年寄衆獨禮被爲請、安永九年以前之通諸大夫衆も長袴に而御禮被申上。右相濟、於柳之御間人持・頭分獨禮被爲請。右相濟重而御同間に御出、獨禮難成痛等有之人持・頭分、六組御小將等より坊主頭まで一統御禮被爲請。其外於舟之御間、御近習平士一統御禮。鶴の庖丁御覽等年頭御規式、都而安永九年以前之通に候事。

同日、江戸年頭御規式都而安永九年以前之通り。今朝年頭御太刀御献上之御使者、御小將頭溝口舍人素袍烏帽子着用殿中に持參。

正月朔日。前田重敎金谷御殿に於いて年頭の賀を受く。

〔政隣記〕

元日六半時揃にて、於金谷御殿、御年寄衆・御家老衆・若年寄衆松之御間（檜垣の御間振合にて。）獨禮被爲請。裝束安永九年以前之通。諸大夫衆も長袴に而御禮被申上。右相濟、人持組より御馬廻まで座付御禮。

〔三守御譜〕

同六丙午年正月朔日、於金谷御殿重敎公、大老を初頭分以上年頭御禮被爲請。御隱居後初なり。

正月二日。前田重敎年頭の祝儀として太刀を治脩に贈る。

〔政隣記〕

正月二日、年頭御太刀從中將樣御献上之御使者、御步頭佐藤勘兵衞素袍等着用、殿中に持參。

正月二日。二ノ丸御殿に於いて松囃子の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日夜於金城御松囃子御規式有之、御番組左之通。

四海波靜にて　權兵衞

高砂　權兵衞（五左衞門彦次郎）　太郎左衞門養五郎

松高き　權之進

東北　權之進（治三郎惣助）　多賀藏

猩々　權兵衞（六之佐太三郎）　太郎助昌次郎

正月四日。射初・打初・乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月四日於金城御射初・御打初・御乘馬初御規式等、都而安永九年以前之通り、其外御規式等も都而同斷。

正月十一日。前田重敎割場足輕に棒術及び和儀を學ぶべきことを命ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙之寫扣〕

一、午正月十一日左之御書立於金谷御次佐々木兵庫相渡候。

割場足輕共弓・鐵炮之役有之者に而茂、棒・和儀人々心懸申儀は尤之事に候。指南仕候者相撰、寄々弟子取立候樣可申付、指南之儀は足輕に不限候。又家中之内に而茂術有之者ゐたより、御奉公之透に稽古爲仕可申候。

右之通被仰出候事。

但、稽古所相達候儀失墜有之儀も候はゞ承屆、入用等少分之儀は承屆可遂詮議候事。

正　月

正月十二日。前田重敎城中にて御扶持人・十村・新田裁許・山廻等の足袋及び下駄を用ふるを許す。

〔十村御目見例書〕

一、前々より御城中ゑ御扶持人・十村新田裁許・山廻等迄足袋相成不申處、御郡々御扶持人中、御改作御奉行富田彦左衞門樣ゑ相願候處、御聞屆、其段中將樣ゑ言上有之處、無構はき候樣、十二日朝六つ半時被仰出、何れも足袋をはき御目見に登城いたし候。

一、十三日にも同斷。

一、御城中げたも無構はき申旨、尤がんぎ坂より上御式臺迄ぞうりはき申候。其外御門々々等も、げた無構はき申候。

一、十三日御料理頂戴に罷登り候時者、御臺所口迄高足に罷越候。

右之通格別相改り候に付覺書仕置候。但、げたと申者名目迄、何れもあしだをはき申候。

天明六年正月　　眞館彌兵衞覺書

正月十四日。前田治脩佛寺參詣及び鷹野等の行列を舊に復することを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十四日、金澤御寺御參詣等幷御鷹野等御行列等、都而御省略以前先規之通与被仰出、且御駕籠際も如先規御大小將より被召連候旨、志村五郎左衞門を以從加賀守樣被仰出。但御先

本年三月十五日の條參照

供も六人に相成、近年者御表小將より被召連、御先供も四人に相成候處、今日より如本文。從者も都而最前之通に相成候事。

正月十八日。前田治脩參覲の際の供奉を命じ次いで之を延期す。

〔政隣記〕

正月十四日、當春御參勤御供御家老前田圖書殿に御内々被仰渡、諸向順先書出被仰渡。今月十八日順番之通御供被仰付、御道中奉行御小將頭松原元右衞門、御用人御步頭遠藤兩左衞門に被仰付。然處二月五日左之通圖書殿夫々に御申渡。

先達而當春中御出府与被仰出置候得共、春中御延引、重而御時節可被仰出段被仰出候事。

正月十九日。與力牧萬平放鷹禁止の所にて狩獵したるを以て廻藤内の爲に捕へらる。

〔政隣記〕

正月十六日中、石川郡大豆田口・宮腰筋等野廻り御留場に、殺生人躰之者多入込候に付、相咎召捕候樣改方等に被仰出有之。于時同十九日野々市村廻藤内、於御留場致殺生罷在候者召連、改方松尾縫殿宅に參り樣子相糺之處、人持組津田源右衞門與力牧萬平与申者に付、其段縫殿より金谷御殿に罷出言上仕候處、寺社奉行に引渡候樣被仰出候に付、寺社御用番横山又五郎に申達有之候處、萬平一類兄弟舟木平六・板坂彌三太夫・柴野甚助受取に來、渡之遣。

正月廿二日。江戸深川なる藩の米廩類燒に罹る。

〔御年譜〕

一、正月二十二日江戸大火深川御藏邸御類燒。

正月廿六日。金谷御殿に於いて今後經書の講釋を行はしむべきを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

左之通正月廿六日被仰出。

毎月　八日　廿三日

右日限に、是以後於金谷御殿、御儒者に經書講釋被仰付候間、組頭・物頭之人々不殘罷出可致聽聞候。書物持參或聞書之儀、勝手次第之事。

但、當月は廿九日に講被仰付、論語學而之篇講じ候。毎月定日朝五半時揃、右人々之内指懸候御用、或は當病又は病氣故障に而難罷出者は、御横目に及斷可申事。

一、右講談之節、御横目兩人充罷出可致差引候。尤聽聞人名前幷不參之者名前時々書記。

天明六年正月

正月廿七日。八百石以上の知行を食むものに自今その役料を支給せざることを令す。

〔政隣記〕

正月廿七日今般御改法に付、八百石より八百石以上之人々、何役被仰付候共、當分役料不被下旨被仰出候條、自分知八百石以上之人々、當午の年より當分役料不被下候。右之通被仰出候條、可被得其意候事。

午　正　月

正月廿八日。奥村主水配所能登島に向ひて出發せしめらる。

〔政隣記〕

正月廿八日奥村主水配所ゟ被遣發出。

正月廿九日。袖帽子禁止の令を發す。

〔政隣記〕

正月廿九日、於金澤左之通御用番前田土佐守殿より御觸有之。

男女共袖帽子与名付、面躰隱し候帽子致着用候。第一女之笄等に金銀を用候儀、御停止之段毎度被仰渡候處、近年猥に相成候躰に付、是以後改方に而急度相糺候樣被仰渡候。依之右袖帽子致着用候而者、相改候儀指支、其上面躰隱し候帽子者元來御停止に候間、向後男女共堅く用ひ間鋪候。此段御家中曁陪家中并町方等、不相洩樣急度可申渡候。右御觸承知之上相背者於有之者、途中に而改方足輕見懸次第相咎申筈に候。

但、右一統承知之上、二月十五日限右帽子相止可申旨、右日限以後者急度指止可申旨被仰出候事。

正月廿九日

正月。前田重教諸士の家督を相續する者は實際の生年をその組頭に屆出づべきことを告ぐ。

〔安永・天明間御用留〕

御馬廻頭

幼少に而家督相續被仰付、十五歳に滿候得者殘知御引足被下儀御定に候。近年者過分年劣申者も有之候哉、十五歳以上に而も格別幼弱に見え候容貌之者有之、殘知被下候而も當分前髪取不申、御番入不仕人々も多く有之躰に候。前々より出生之砌虚弱等に而、頭ゟ屆相見合候輩も可有之候。以來者頭々ゟ屆候節、生年無相違樣正直に相心得可申候。御譜代之者に候得者、

幼少虚弱たり共相續之筋目思召も有之、官年・實年と申事も候間、頭々了簡も可仕旨御内意に候事。

午　正　月

正月。難澁の村方にして藏宿に未進米あるもの、利足を用捨すべきことを命ず。

〔杉木氏小留帳〕

諸郡難澁村等、藏宿過分之未進米も有之、村々年々利足等相重り可致難儀候。藏宿之手前、年毎利足も請取申儀に候間、一統用捨可致候。此段支配ゟも申達候條、御郡方藏宿共へ可申渡候。

一、去暮御用銀申立、一統不指引に致候。別而心立惡敷者共、無差引成儀を任勝手、法外之仕方有之旨委細及承候。是以後藏宿等未進に不限、人手之物を借請致無沙汰候者共は、耻を不存不義至極に候間、以來節義之處異犯有之間鋪候。

一、十村與書は只今迄之通りに候。併天明四年以來借用證文書かへ無之分は、及貪着間敷候。右之趣夫々急度可申渡者也。

午　正　月　　池田忠左衛門

御扶持人・十村中　　富田彦左衛門

正月。十村等、隱田・餘田の告訴を要する法令を不可としその職務を辭せんことを請ふ。

〔杉木氏小留帳〕

先達而手上高等之儀被仰渡候處、元來御領國之内は地不足之村大半に御座候。然處勝手次第訴人被仰渡、他村之田地無謂主附申事に相成候而者、自他差別無御座、無道之形に相成、百姓抔之内不行跡或家業相怠り候者共、身分之家職取失、猥に人手之者を奪申工等仕、畢竟右類之者共隱田・餘田抔与申立候。近年別而累年不作打續、以之外難澁仕、少々地高餘勢御座候村々ども、不殘御取揚御座候而は、次第百姓衰、農業相進不申事に相成行、耕作に苦勞仕候而も所詮無御座候樣に相成、自農業怠、必定取續得不申場に至り可申与奉存候。左候へば御大切至極之儀に奉存候。其上心立不宜者共徘徊仕候而も、萬端賄賂之沙汰而已多、穩成儀無御座候。隱田・餘田抔与申立候儀、惣應に御聞入御座候而者、御郡方相鎮不申、取續難相成御座候間、兼而私共退役被仰付被下候樣に、小紙を以奉願上候、以上。

身分は自分歟

正　月　　御領國十村連名

二月朔日。前田治脩病むを以て遠所在住等の年頭拜賀を受けず。

〔政隣記〕

二月朔日、加賀守様此間御疝積に而、今日御表御出不被遊。依之遠所在住幷煩本復人年頭御禮不被爲請旨、昨日被仰出。依而例月出仕有之。尤年寄中謁に而退出之事。

二月十日。犯罪の種類により首錢・過怠銀を徵して之を贖はしむべきことを令す。

〔上田舊記〕

一、於公事場科人に首錢・過怠銀を指上させ出牢申付候儀、往古有之候間、是以後も罪之樣子に寄、首錢・過怠銀取立可申旨被仰出候。依而向後右之通申付候。尤科人有之、末々より首錢指出申儀願候はゞ、其時宜に寄て承屆候條、此旨可被申渡候、以上。

午二月十日　　不破彦三等

進士齋宮殿等

右之通り公事場より申來候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

進士齋宮

二月廿四日。金澤森下町に火災あり。

〔政隣記〕

二月廿四日夜八時前より金澤森下町油屋九右衞門家より出火、類燒十五軒有之。廿七日淺野宮際在郷大家七軒燒失、晝九時頃より出火。右之外火災度々有之。

二月廿四日。前田重敎の夫人上野護國院等に參詣す。

〔政隣記〕

二月廿四日、御前樣九時御供揃に而、同刻過西之口より御出、御邸內地藏堂に御參詣、夫より上野護國院・下谷廣德寺・上野眞如院に御參詣、暮頃御歸館。

二月廿六日。一季居奉公人の給銀を定む。

〔御觸幷御返書留〕

御家中男女一季居奉公人給銀之儀者、享保十四年御觸被成、其後寶曆元年公事場より相觸候處、其以後段々猥に相成候間、右給銀高之儀、今般一統相觸可申旨就御申渡、猶更遂詮議、別紙之通に御座候條御承知被成、嚴重に相守候樣に、御組・御支配中且又御與力等にも可被仰

觸候、以上。

午二月廿六日　　不破彦三郎　江守平馬　織田主税　松平典膳

一季居奉公人男女給銀之事

役小者

一、九十目より七十目迄　上中下見計此内を以可相定

但、江戸ゟ相詰候共不及増銀、江戸ゟ當座歸に候者五匁、京・大坂ゟ者三匁之増銀たるべき事。

鎗持

一、八十目より七十目迄　上中下右同斷

江戸其外他國詰仕候者十匁、江戸ゟ當座歸に候者五匁、京・大坂ゟ者三匁之増銀たるべき事。

附、他國詰一ヶ年に滿不申候者、半年に五匁計之圖を可相渡事。

馬捕

一、八十目より六十目迄　是より以下上中下幷他國詰増銀右同斷

一、乘物舁小者之儀者鎗持馬捕に可准。

草履取

一、七十目より四十五匁迄。

平小者

一、六十五匁より四十五匁迄。

あらしこ

一、四十五匁より三十目迄。

若黨或先供等之者

一、百二十目より百目迄　上中下見計此内を以可相定

但、江戸其外他國一年詰仕候者二十目、當座歸幷京・大坂へ者十匁之増銀に限るべき事。

附、他國詰一ヶ年に滿不申候者、半年十匁計之圖りを以可相渡事。

右若黨躰より級宜中小將抔之類

一、百五十目より百三十目迄

但、他國詰增銀等之儀前段之趣に准、相應に可相渡事。

一、はした者等之儀給銀は、當時通例遣來候通たるべし。但是以彼等に不相應程之給銀者遣申間敷事。

しんめう或物縫等之類

一、年中七十目より五十目迄。

一、高知之面々家來之内譜代之者、又者何とぞ舊功之筋に依而給分相增遣度存候者は、尤格別之事。

一、役方之用事等申付候者抔、强而給分減少之沙汰には及間敷儀に候得共、是以主人之分限に茂應申事に候條、猶更其心得仕、畢竟高祿之家來者召仕不申覺悟尤に候事。

一、惣而此度之定より、相對を以給銀少分に召抱申儀者、尤勝手次第たるべき事。

一、出替之時節過候而、半年又者五・三ヶ月以後召抱候者茂、近年は大方年中之給銀を取申躰に相聞候。一向ケ樣之筋に而者無之譯に候間、向後は半給銀、或日割等を以召置可申事。

右之通先年被仰出之趣、今般猶更相改候條、若違背之族於有之は公事場ゟ可申斷事。

丙午二月

二月廿六日。前田重敎能美郡に放鷹す。

〔政隣記〕

二月下旬能美郡ゟ爲御放鷹中將樣可被爲入旨、今月廿七日被仰出候處、二月廿四日明後廿六日御發駕可被遊旨被仰出、則廿六日曉御發駕、翌廿七日夜御歸殿之事。

〔舊記〕

天明六年午二月廿六日に、中將樣能美郡ゟ鶴御鷹野に被爲入、則同日朝、御膳所福留村六郎右衞門方に被仰付候。御晝御膳所傳右衞門方に而、夫より野間御鷹野被爲遊、小松御旅館久津屋彌平次方暫御休被爲遊、同日俄に御歸城被爲遊度旨被仰渡候處、早速御立、寺井通被爲御入候而、粟生通御歸城之圖に而、同村卽得寺に暫御休被爲遊候所、折節洪水に而粟生・湊兩渡場舟立不申候に付、則其夜俄に傳右衞門方に御泊り被爲仰付候。翌朝六つ時御機嫌能、赤井道通湊舟より御歸城被爲遊候事。

一、右御鷹野御晝之内、傳右衞門方御座間之内、れんじ窓御好被爲遊候而、則御繪圖を以被仰付、御郡御奉行成田十郎左衞門殿より、御立之跡に而早速取懸り、近々又々被爲御入候迄出來仕置候樣被仰渡候事。

二月廿八日。前大聖寺侯前田利精を金澤に移さんとするを以て豫め近習の士を選定す。

本年三月廿八日の條参照

〔政隣記〕

二月廿八日金澤において、御先手長谷川三右衛門・上月數馬に御内御用被仰渡。是御馬廻組井上勘右衛門家御借上に而御普請有之、備後守様を從大聖寺御引取一件御用也。但、あなたより御家來者不罷越、此方様御家來左之人々に先御内々被仰渡有之。御抱守之振に而御近習・配膳等勤候筈与云々。

五百石　金森彌二郎　三百石　前波端三郎　三百石　林　義三郎
三百石　河合半兵衛　三百石　野村兵藏　百廿石　吉田甚五郎
百廿石　加藤與兵衛　百九十石　中山儀太夫　二百石　由比久左衛門
百七十石　平野是平

以上御馬廻定番御馬廻組外也。

右に付井上勘右衛門者先淺加五兵衛實弟也方に同居、其後町屋御借上に而御貸渡也。

三月七日。金澤城造營の爲諸士の上納する人夫賃銀を減額す。

〔政隣記〕

三月七日於金澤、左之通御用番大炊殿御廻狀出。

御家中一統指上來候御城御造營人足賃銀、於御作事所召仕候日用賃銀一人に付三分宛相減候間、右人足賃銀上納向後一人分八分宛之圖りを以指上可申候。尤人數は是迄之通に候事。

自分は津田政隣

三月九日。前田重教夫人平尾邸に赴く。

〔政隣記〕

三月九日五時御供揃に而御前様・松壽院様御同道、御忍に而御下屋敷に被爲入候處、御大小將横目指支候に付、自分可罷出旨御家老衆御申渡に付、六時過御廣式に罷出候處、五時過御出、茶屋町より庚申塚通り御下邸に被爲入、暮頃御立、巣鴨本道より夜五時前御歸。於御下邸御膳下幷御菓子・御酒・御肴被下候。且御歩以上に御酒・御肴・御菓子被下之、將御賄兩度一統に被下之。

一、御庭拜見仕候處、廣々景色難盡筆頭言語事共。廣き事二十九萬歩と云々。

三月十二日。年寄中の邸内に於いて鐵炮を練習し得べき期日を定む。

〔袖裏雜記別集〕

天明六年丙午三月十二日被仰出左之通。

年寄中自分屋敷幷下屋敷之内角場に而鐵炮打申儀、前々四月より七月中迄之御定に候處、以來中嶋誠左衛門・豐嶋喜右衛門稽古所同事に、從三月九月中迄鐵炮打申度旨願之趣御聞屆被遊候條、三月より九月中迄勝手次第可有稽古候。乍然大筒或目込等者可有遠慮候。六匁筒以下之鐵炮稽古之儀は、可爲勝手次第旨被仰出。

三　月

三月十五日。前田治脩當年秋季に參覲せんとの請を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

附札、御道中奉行ゟ

當春中御出府御延引、當秋中御參勤被成度旨御願書、當十九日御用番牧野越中守殿ゟ御先手衆を以被指出候處、無御滯御受取被成候。御願之通被仰出候はゞ、當秋中御出府可被成旨被仰出候事。

二　月

右御道中奉行より夫々申談。

〔政隣記〕

付札、御横目ゟ

去年御願之趣に付、來春御參勤可被成候處、當秋中御出府被成度段重而御願書被指出候處、御願之通被仰出候。此段爲承知申聞候。右之趣頭分以上ゟ可被申談候事。

三　月

附、十五日於御横目所披見申談有之候事。

〔政隣記〕

三月十五日、當秋御出府御願之通就被仰出候爲御禮被指出御使、御馬廻組森田直右衛門ゟ被仰付、去十三日金澤發、同月廿三日江戸參着。

三月廿三日。二ノ丸御殿實檢の間に於いて初めて經書を講ぜしむ。

〔異本三守御譜〕

三月十日、於金谷御殿經書講釋被仰付、組頭・物頭聽聞罷出候處、是以後右講釋於二御丸被仰付候條、御近習頭初二御丸へ詰合候諸頭、勝手次第致聽聞候樣被仰出。且年寄中・御家老中等茂御用之透聽聞罷出候筈之旨、前田大炊申渡。三月廿三日於實檢之御間初て講釋被仰付。

當時は於瀧之間、毎月八日・廿三日講釋被仰付。是文化七年御城御造營、夫より當時御間にて講釋あり。講師上下着用、天保十年より常服也。

當時とは文化七年以後のことなり

三月廿四日。前大聖寺侯前田利精を金澤に移らしむる爲從行の諸士を命ず。

〔政隣記〕

三月廿四日於金澤、備後守様御引取御迎御用御大小將横目代林與八郎、御駕籠際御供御大小將恒川七兵衞・姉崎太郎左衞門・岸忠兵衞・喜多岡善左衞門・吉田孫左衞門・渡邊治兵衞・鈴木助左衞門に、伺之上申談有之。

〔政隣記〕

三月廿六日

備後守様に御使　御近習御用定番頭並　横濱善左衞門
同　副御使　御近習御先筒頭　松平才記
備後守様御迎　組外御番頭　上月數馬

今般備後守様御引取に付、小松御止宿、翌日金澤御着之筈。御迎人一統御發駕前々日發足、大聖寺に參着次第、人々旅宿名前小札に調、參着之上無間違上月數馬に可指越旨。御供之人々從者幷乘馬・驛馬・宿次人足數書付、直に早速數馬等役所に可指出候。從者隨分相減可召連候。於御泊宿賃は、本陣に而相極候通可相渡候。粟生渡舟一艘に二十人計乘候筈。込合不申候様末々に可申渡。粟生支候得ば湊通り被爲入候間、是又同様に可心得候。御行列帳役所に出可致披見候。小松御泊、御中休は松任に候旨等、上月數馬より頭・支配人迄廻狀出。

三月廿八日。前大聖寺侯前田利精金澤に移住の後附屬すべき諸士を確定す。

〔政隣記〕

三月廿八日。

一、前月廿八日之記に有之備後守様金澤表に御引移の後、御側勤仕、先御内々被仰渡有之候十人之内より、左之七人に今日被仰付。

金森彌二郎　林儀三郎　河合半兵衞　前波端二郎
吉田甚五郎　中山儀太夫　平野是平

三月。諸士の借用したる會所銀返納の法を改む。

〔政隣記〕

會所銀御改法之覺

一、安永四年より天明五年迄借用、地・他國當り幷定借共元利數口有之候共、前借百石二十目宛之上納之分共、右二ヶ條打込、今年より百石に付二十五匁宛之割合、無利足を以上納之事。

但、是以後前借之分此内に打込、是迄之通取立可申事。

一、安永五年より無利足を以返上之殘銀、被下切之事。

一、當午正月より御貸付之分、來未之年より十五ヶ年譜を以元利上納取立可申事。
但、前借有之分、百石に付廿五匁宛之割合を以今年より上納、是又是以後他國當り重而借用之時者、都而前借右之割合を以、今般改候百石に付二十五匁宛之内に打込上納之事。
一、定役地廻相勤候人々定借、是以後も只今迄之通り毎歳證文相改、利足迄上納之事。
一、會所銀御貸渡之上に而、其御用無之御指留に相成候人々、夫々用意仕候儀に付、當式之通御貸渡に而、翌年より十ヶ年譜を以元利上納。
但、其身煩等に而御斷申上不罷越分は、其節一時返上取立可申候。無據願之趣有之節者、其時々詮議之事。
一、退轉人利足は、退轉月迄之分取立候得共、是以後元利共被下切之事。
一、上納取立月、是以後御知行分七月、御切米之分三月、年中兩度に取立可申事。
但、是迄者利足銀十二月年切取立候得共、數月之取立に相成候間、是以後本文之通取立可申事。
一、是以後御貸附高、左之通十五ヶ年譜に而、一ヶ月百目に付五朱宛之加利足上納取立可申事。
但、左之百石に付而之當り。
五百目宛　他國御供人。　四百目宛　他國詰之人々。　二百目宛　地廻り御用。
右之通會所裁許御貸銀、是以後御改法被仰出候條、夫々可被申談候、以上。

丙午三月　　前田土佐守

會所御奉行中

四月六日。前田治脩參覲の際の行裝は凡て天明元年省略以前の格に復せしむ。

〔政隣記〕
四月六日、左之通御供御家老前田圖書殿御申渡被成候段、御道中奉行廻狀有之。
御參勤御供人天明元年より格別御省略就被仰出候、鑓數等減方之儀被仰渡置候得共、當秋御參勤御供之節武器等之儀、右天明元年以前之通爲持候樣從加賀守樣被仰出候。其外御行粧等、幷下々着束紺物着用之儀等も、都而天明元年以前之振に被仰出候事。

四月十三日。諸士の借銀を年賦返濟とすべき去秋の令を勵行すべきことを告ぐ。

〔御觸幷御返書留〕

御家中之人々町方等より借用銀、以相對永年賦に仕、年限之儀も相對之懸合候而差引仕候樣去秋被仰渡候。然處いまだ指引不相極、年賦證文に相改不申人々多有之躰に候。早速證文相改候樣一統可申渡候。

一、質物質屋より置主ゟ相返、質物價證文に相改、三十ヶ年賦を以相返候樣先達而被仰渡置候。彌無相違相心得候樣、是又一統可申渡候。

右之通り被仰出候條、被得其意、組・支配之面々ゟ被申渡、組等之內裁許有之人々は、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月十三日　　本多玄蕃助

四月十四日。前大聖寺侯前田利精金澤の假館に移る。

〔政隣記〕

四月十四日、備後守樣、昨十三日大聖寺御發途、今日暮候頃御居所安江木町井上勘右衞門宅御用借之所ゟ御着之事。

但、御迎人ゟ於大聖寺旅宿、十三日朝一汁三菜之御賄料理被下之、參着之砌より御馳走人被附置。右御禮上月數馬を以申上有之。且歸着之上假御横目林與八郎者御次ゟ罷出、御近習頭を以言上、其外者頭々を以申上有之。

〔三守御譜〕

四月十三日晝四半時之御供揃にて、大聖寺御立、其夜小松に御泊。翌十四日七半時過此元へ御着。此時爲御迎御用大音帶刀安曹（御家老）上月數馬・佐久間與左衞門（御横目）・林與八郎（御横目代）、御大小將にて恒川七兵衞・喜多岡左衞門・姉崎太郎左衞門・吉田孫左衞門・渡邊治兵衞・鈴木助左衞門・山岸忠兵衞、其外御役人・御醫師・御料理人・足輕・小者に至るまで被遣御供仕。（御引取の上御近習中村仁右衞門後定番御番頭に被仰付相勤候由にて、仁右衞門色々咄あり。）

〔政隣記〕

前記備後守樣ゟ從大聖寺之御附人無之与記置候得共、あなたより御附頭分寺岡喜八郎幷御近習兩人被附置、今日參着。御醫師者此方樣池田玄眞・森快安、御針醫二木順伯、御外料有澤長安ゟ被仰付。

四月十四日。前田重敎の夫人江戸靑山千壽院に參詣す。

〔政隣記〕

四月十四日於江戸、靑山千壽院ゟ五時御供揃、略御行列に而御前樣御參詣。御大小將横目就指支候、自分儀御供に罷出候樣伊藤內膳殿御申渡、六時過相揃候處、五時過御出、四時過千

自分は津田政隣

重附本の儘

壽院ゟ御參詣、說法二座日本一二之說法曾來有之に付、御參詣。二座之內一座は御所望に而神代卷說法也。參詣人夥數事也。御聽聞、同所暮頃御立、五時過御歸。但於千壽院、侍以上ゟは御菓子・御酒・御肴・御歩ゟは御菓子被下之。幷賜一汁二菜、暮前御湯漬被下之。足輕ゟは御賄代錢百文宛、小者ゟは七十文被下之。將又侍以上重附上下、御歩以下羽織・袴着用之事。

四月廿一日。前田重敎、その下賜したる親翰の箱を返上すべき形式に就いて諭す。

〔政隣記〕

四月廿一日左之通御覺書、御用番玄蕃助殿御渡之旨、定番頭廻狀有。

御親翰被成下候節、御箱之上被成下候者之名前、御指札に而被成下候。其御請指上候節、右之御指札を被成候時之通りに、御箱之上に指し候而上る者有之候。不心得之至候。右之通り認上候而者、御用多之時分者、未不被渡下御箱与紛敷候に付、又其儘に而被渡下候樣成御麁相も不圖御出來可有之。其上被成下候御指札に殿文字有之節者、如何可仕候哉、御請に者相改候而定□極り候事に候。御請上何某如斯相調指札仕上候儀。被渡下候節之御指札者御箱之內ゟ入奉返上候事に候。此段夫々爲心得爲申聞候樣被仰出候條、諸頭諸奉行等不相洩樣可被申談候事。

午四月

四月廿五日。大聖寺侯前田利物江戸より歸邑の途に上る。

〔政隣記〕

四月廿五日美濃守樣御在所ゟ之御暇、一昨廿三日被蒙仰、如御例從兩御丸御馬・卷物御拜領。今日江戸御發駕御歸邑。

四月廿五日。前田重敎、小將組半田半兵衞に流刑を命ず。

〔政隣記〕

四月廿五日於金澤左之通被仰出。

付紙、御小將頭ゟ

半田半兵衞 領七百五十石也

右半兵衞儀、先年以來御膳方之儀に付、不屆未熟不心得麁抹不敬失念鹵莽等品々每度有之、其時々段々巨細被仰渡、隨分御猶豫被成置候得共相改不申、近〻此儀に付血判誓詞茂致候處、又候今日不心得之致方、御上は申に不及、諸神ゟ之誓詞茂虛に相心得科不輕。依之越中五ヶ山之內ゟ流刑被仰付候旨被仰出候條、可被申渡。

但、配所に被遣候迄者、一類共ゟ御預被成候條、急度縮仕置候樣可被申渡候。尤一類交名

本文單に被仰出とあるを以て前田重敎の處罰なるべし

可被申聞候。

丙午四月廿五日

右半兵衛御膳奉行御用番支配に付、御用番多田逸角於宅、井上勘助・御番頭田邊長左衛門、御横目木村三藏・坂野忠兵衛立會に而逸角申渡、御請判形取立、幷一類武田喜左衛門・河地才記・上木金左衛門・淺賀彦兵衛・同せがれ左平太も罷越有之、配所ゟ被遣候迄一類御預之旨申渡、武田・河地兩人之御請に判形取受、且御步横目檜葉孫右衛門・中島要助相詰、前々之通相勤候事。

弟は弟鷹なり

四月廿八日。能登七ッ島にて巣鷹を捕へ得たることを報告す。

〔御用留帳〕

四月廿八日

一、能州七つ嶋之内荒見子に窠四つ子の内二据弟、同所大嶋窠三子之内一据弟、都合三据、此度致窠揚、來月三日頃可罷歸旨、窠揚人より申越候旨取次より屆る。

四月。前田重教、御小將組野村傳兵衛等の亂行を處罰す。

〔政隣記〕

付札、御小將頭ゟ

本文亦單に被仰付とあるを以て前田重教の命なるべし

野村傳兵衛

御家中之人々行狀愼等之儀、去冬被仰出、一統奉承知罷在儀に候。然處傳兵衛儀、同役參會を企、別而當春に至、不同心之者ゟも强而寄合宿等を申談、於會席亂行之爲躰有之旨、頃日粗風聞之趣達御聽候。傳兵衛儀幼少より御近習被召仕、其後御表向ゟ被指出候處、去冬御近習再勤被仰付候儀は、寔に難有可奉存筈に候。當時之勤柄に而は、組柄も宜、筆頭に罷在候得ば、一統愼方之儀も萬事心付可申談筈に候處、却而參會等之儀を棟取仕候躰、御時節をも不顧不屆至極候。依而御近習番被指除、閉門被仰付候條、可被申渡候事。

四　月

右御用番玄蕃助殿被仰渡候に付、御用番御小將頭多田逸角於宅、御番頭伊藤甚左衛門立合申渡有之。

閉　門

新番組　星野高九郎

同　八嶋金藏

但、被仰出野村傳兵衛同趣、御近習番被指除。

遠　慮

新　番　根來三九郎

但、同斷。

御近習番組外　寺西彌八郎
同　吉田左太夫
同組外御馬役　有田俵兵衛

四月。去秋の令により質物による貸借の整理方法を議す。

〔御觸幷御返書留〕

去秋被仰出候質物之儀、其節御達申候通り、一統帳面に記指出申筈に御座候へ共、置主幷質屋共手前に而も、殊之外相混、しらべ方出來兼申樣子に御座候間、此度相改、札主・口入等之無貪着、質物受出し候本人より金銀錢高まで書記、質屋何町何屋誰与相調、御家中幷寺社方・御郡方等夫々頭・支配人手前ゟ取立、一紙目錄記、當六月十五日切町會所ゟ差出候樣仕度奉存候。尤質屋書出帳面与引合、相違之分者夫々可申達候へ共、急に者出來兼候間、先人々書出之通、三十ヶ年賦割合を以當七月晦日切、御切米等被下候人々者十一月晦日切、人々印形添、紙面を以町會所ゟ指出候樣仕度御座候。尤以來取立月、毎歳兩度相極申べく候。

一、御家中小者・奉公人等之類、卑賤之者共至而少分之質物者、追而御上より御沙汰可有御座旨、先達而被仰出御座候間、其主人等より不及書出候。但し上立候人々之内、輕き者借札等に而差置候分者、書出申筈に御座候。

右之趣一統不相洩樣被仰觸候樣仕度奉存候事。

午四月　吉田九兵衛
九里幸左衛門

四月。累犯の者を死刑に處すべきを命ず。

〔政隣記〕

致賊候者、於公事場禁牢及三度に候得者、從前々可爲死刑筈之旨、公事場奉行紙面御覽、是以後尤可爲其通候。於盗賊改方之禁牢者も入墨及三度に、出牢之上又候致賊候者は、是以後之不依輕重、召捕次第公事場ゟ差出候樣改方ゟ被仰渡、公事場ゟも此分死刑可申付旨被仰出候段、御用番より天明六年四月被仰渡有之。

五月六日。前田重敎その子齊敬と共に金澤郊外大豆田に放鷹す。

〔政隣記〕

五月六日、大豆田口ゟ爲御放鷹、九時御供揃に而中將樣・敎千代樣御同道御出、敎千代樣御拳に而水鷄御翕被遊。

但、初而御拳之事。

五月七日。大聖寺侯前田利物金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月七日美濃守樣金谷御殿ゟ御出、於松之御間中將樣御對顏。夫より二之御丸ゟ御登城候處、御持病之御疝積に而、春來御表等ゟ御出無御座に付御對顏無之。御退出、三之丸御堀端通御廣式ゟ被爲入。都而御作法等前々之通。

五月十三日。前田重敎越中に放鷹す。

〔御用留帳〕

五月十二日

一、明十三日曉天八つ時御供揃に而、越中へ御鷹野御發駕に付、今日退出より直に一統窺御機嫌罷出る。依之今朝石動迄御先へ罷越候御鷹方等左之通。

一、福井網懸御鷂　鹿野鐵次郎
一、越前御兄鷹　小塚次太夫
一、大坂御兄鷹　山崎半助
一、松坂御兄鷹　吉田五郎兵衛
一、岩井御大鷹　宇野源太夫

一、餌飼場御大鷹　山崎宇太夫
一、谷地御大鷹　廣瀨彌平次
一、富山御大鷹　追川喜八郎
一、眞那板淵御大鷹　吉田太左衛門
一、岩崎鴉御大鷹　松崎吉左衛門
一、御備兄鷹　薄井善左衛門
一、御備兄鷹　黑田五郎左衛門
一、御備兄鷹　棚橋平六
一、御備兄鷹　黑田源藏
一、丸之內御集　山口五郎太夫
一、樽見窠二御集　吉田幸左衛門
一、上野若御集　吉田太次兵衛
一、大嶋窠一御集　河合新助
一、大嶋窠二御集　林傳左衛門
一、市川若御集　薄井左平

一、富山若御集　丹羽伴吾

一、大嶋窠一御集　足輕　武部善九郎

一、大嶋窠二御集　同　安達彌九郎

手明　清水新五郎　内藤十左衞門　吉田新左衞門　高木安右衞門

山口七左衞門　金子又右衞門　廣瀨彌助　山口又助

山下次郎太夫

御雇　清水宇左衞門　棚橋彌太夫

御横目　林判太夫

御步横目　石澤喜三郎門

取次　清水平八

手明足輕　榊原理右衞門　加藤沖藏　宮崎文藏　井上與三太夫

伊藤才一郎

足輕　石倉散藏　寺内平六　宮北才右衞門

御餌指　三人

御鳥見　七人

能美郡網指　二人

明朝御供　林淺右衞門　武山治部衞門　清水平

右之段御步頭へ申渡す。

五月十三日

中將樣今曉八時御供揃之段、昨夕和田權五郎等より申來候得共、七つ半時過御發駕被遊候事。

御泊附　森下村御小休、津幡朝御膳所、倶利伽羅御小休、今石動御晝、福岡御小休、御廻道内島村御小休、高岡御泊。

〔政隣記〕

五月十三日、越中筋ゟ爲御放鷹今曉中將樣御發駕被爲入、十五日晩御歸殿。御餌柄鴻鶴六羽・鸛七十餘、都合百羽餘有之。

五月廿七日。大小將横目原宗右衞門火災の爲出張の際落馬して死す。

〔政隣記〕

五月廿七日曉八時過、堅町金澤辻彌平太宅より出火、類燒無之鎭る。各登城。但御大小將横目原宗右衞門、火事所より歸候刻、岩根馬場人持組永井七郎右衞門前に而落馬、塞り候處開

不申死去。息亥之助二歳。

五月廿七日。前田重教火災を報ずる太鼓の打方を改むべきことを命ず。

〔政隣記〕

五月廿七日。是迄金澤定火消太鼓打方、御城近幷兩御寺近之火事に者三つ宛打續け、犀川・淺野川兩大橋之内二つ宛續け打、同橋外者一つ宛打候處、被仰出に而今月より左之通打方改り候事。

御城近　○—○　○—○—○　○—○—○—○　宛
御寺近　○—○—○　宛
兩大橋内　○—○　宛
同上外　○　宛

六月六日。鹿島郡角島の漁民朝鮮に漂着す。

〔御用大綱拔書〕

一、鹿島郡角嶋村之者一人、獵船に乘獵出居申所被吹流、天明六年六月六日朝鮮國全羅道唄天之内粟浦与申所ゟ致漂着、夫より對馬ゟ被送、大坂ゟ來候上御藏屋敷ゟ相渡し、無異儀歸國す。

角島は今の鹿渡島なるべし

六月七日。前田重教病むを以て治脩自ら政務を見るべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月七日、左之通昨日從加賀守樣被仰出、今日御用番大隅守殿被仰渡候旨、御横目廻狀出。是五月上旬於御馬場中將樣少々御塞り、其後御浮腫も有之、御勝れ不被遊候處、押而同月十三日越中ゟ御放鷹に被爲入候處、御氣色不御宜に付、十五日御歸、其上にも御押被遊候而、同月中御馬場・御能等被遊、今月朔日にも御能被遊候處、御中入より餘程御滯に而、直に御床に被爲附。御大病与御七横井玄泰・相見内山養福奉診候得共、被仰出之趣に而御表向ゟ者不相知、少々御浮腫等に而御勝れ不被遊と被仰出。御所勞御重き御容躰抔与申事甚御嫌ひの御容子に付、難申上。依而玄泰等兩人之外診被仰付候樣に申上候事も難成由。委曲に者難書解趣也。

諸向より指上候封じ物、金谷御殿ゟ指上候樣先達而被仰出候得共、當分二之御丸ゟ指上候樣從加賀守樣被仰出候事。

〔政隣記〕

中將樣前記之通就御所勞、御國政等都而今月七日より加賀守樣ゟ御引渡被遊候。且御所勞御重き抔与堅く沙汰仕間敷旨嚴重之就被仰出、御表向ゟ者其頃御樣子相知不申候事。